

リア、イスパニア、ガリア若くは亞非利加に有する領土は優に王侯と比肩すべき貴族のみ、獨り羅馬には殘らざりしか。國幣に養はるゝ放逸無頼の徒は到る處の街上に浪遊せざりしか。地方の小民は收斂の重きに勝えずして漸く凋落し去れり。吾人は彼等の爲に責を負はむや。吾人はダキアを捨て、國境の防備を怠慢に附せむことをトラヤヌス帝に慫慂せしことあらざりき、將又カラカラ帝に勸むるに萬邦の民をして羅馬の市民權を得せしめ、以て國家の團結を弱むべきことを以てせしことあらざりき。奴隸を以て以太利の野を掩ひ、是憫むべき同胞をして牛馬の役に服せしめたるものは、吾人に非ず。吾人基督教徒の唱道し、實行したる教義は大に趣を異す。夜毎に州郡の臣民を鐵鎖に繋きて之を奴隸となしたるものは、吾人に非ざるなり。誰か是の如き暴政より當に來るべき叛逆、毒害、暗殺、復讐を以て吾人を責めむとするや。吾人は美衣、美食、遊戯、競技、演劇を以て國民を腐敗せしこと無し。否吾人は足を劇場に投せざるの故を以て却て迫害せられたりき。吾人は軍隊の内訌を助成せしこと無し。異教者よ、爾等が喋々する所の愛國心を消耗したるものは、

爾等の帝國には非ざりしか。彼等がガリア人、埃及人、亞非利加人、「フン」人、「イスパニア」人、「シリア」人を以て羅馬の公民を形成せし時に當り、彼等は愚にも、是の如き危難なる群衆が一個の以太利の都府、而かも彼等が久來怨望したる其都府を、誠心誠意を以て保護すべしと思惟したりしなり。愛國心は勢力の集中を必とす、是の如き現世上の制約が如何にして人心の散漫を統一することを得べき。是の如き精神上の統一は獨り基督教の中に發見し得べきのみ。思想感情の一致は言語の一致を要す。國の一半は希臘語を用ひ、他の一半は羅匈語を談するもの、如何にして鞏固なる國家を組織することを得べき。元老院の廢止は基督教の起原に先づ。誰か歴代帝王の弊政を以て吾人の力なりと云ふや。九十年間に三十二帝と、二十七の僞帝を出したる軍隊の跋扈に就て、吾人豈何の責任あらむや。吾人は「プレトル」の親衛兵に帝國を競賣に附するを教へしことあらざるなり。異教者よ、爾等は實に此の如き一切の事情が終局を告げたることを驚くか。吾人基督教徒は皆に驚かざるのみならず、却て天帝の恩澤を感謝するなり。

今や人類が休息すべき時期は来りぬ。囚虜の歎願と祈禱とは遂に聽かれたり。羅馬府を陥れたるアラリックは『ゴート』族なりと雖も、一個の基督教徒なり。彼は彼の同胞なる基督教徒を敬し、彼の爲に爾等は救はれたり。若し爾等の信憑する幾多の神等は果して不幸の中より爾等を救ひしことありや。ハニバルが彼等を辱めしこと幾年ぞ。フレックスの禍より政黨を救ひしものは、一羽の鷲鳥なりしか、將た又爾の神なりしか。敗北せる羅馬軍の中に何處に神ありしか。あゝ國民の膏血に酔ひたる賣女、羅馬府の陥落は幸なり。是現世的都府の没落は、迷信罪惡の長歴史に結局を告げ畢むぬ。而して『神の都府』は將に起らむとせり。蠻族の劫火は異教の汚穢を燒棄して基督の王國に適するものとすべし。異教者よ、爾等が失望の中に回顧する數千年の罪惡の暗夜の代りに、預言者の宣傳したる『ミレニウム』の日は羅馬に現はるべし。其再建せる城壁の中には罪惡の汚れなく、只正義と平和とあるのみ。現世の虛榮、名利の競争、其跡を絶ちて、神聖なる敬虔の信仰あらむのみ。

第四章 民族大移動と歐羅巴の人種

(一) 總說

新民族の出現は歴史上の一大事實。——人文史上人種の意識。

(二) 歐羅巴に於ける『アールヤ』人種

『ケルト』民族。——『ケルト』民族移動の蹤跡。——其最古の歴史。——其特性。——其風俗。——其宗教。——其言語及詩歌。——『チェーリトン』民族。——『チェーリトン』民族の勢力。——『チェーリトン』民族の二派。——其比較。——歴史上有力なる四派。——『ユート』族。——『ヴァンダル』族。——『フランク』族。——『サクソン』族。——紀元第三世紀に於ける『チェーリトン』民族。——『チェーリトン』民族の地理學的位置に於ける『フン』族の勢力。——羅馬没落後の『チェーリトン』民族。——カル、大帝時代に於ける歐羅巴各部の人種的配布。——『チェーリトン』民族の原的人文。——『チェーリトン』民族の言語。——『スラヴ』民族。——移動の事情。——東西『スラヴ』民族。——『チェーリトン』民族と『スラヴ』民族との比較。——各西亞。——『ルーリツク』家。——蒙古民族の襲來と『スラヴ』民族の人文。

(三) 歐羅巴に於ける『ツラン』人種

歐羅巴に於ける『ツラン』人種の侵入。——『フン』族。——アツテラ治下の『フン』族。——『イギアール』族。——匈牙利。

新民族の出現は歴史上の一大事實。

人文史上人種の意義。

(一) 總説

羅馬の末路に當り、基督教の傳播と共に並び稱すべき歴史上の一大事實を新民族の出現となす。其主なるものは日耳曼民族、『イペール』民族、『ケルト』民族、及び『スラヴ』民族となす。近世歐羅巴の歴史及人文は主として是等諸民族が希臘羅馬の古文化を基礎として建設したるものなり。故に吾人は暫く筆を枉て是等民族の由來を最近人種學の研究に本きて少しく説述する所あらむとす。

蓋し人種は歴史上の一大勢力なり。諸般人文の特色は多く是人種的差別に本く。各人種の生理上、及精神上に於ける先天的特質が、外界の諸勢力と相交貫して遂に其異彩を失はず、茲に多様複雑なる人文を經緯するの事實は、歴史上最も注意すべしとなす。是等人種は一元なるか、將た多元なるか、又は將來に於て永く其差別を維持し、渾融同化の望なきものなるか。是の如き疑問は吾人の茲に考察せむと欲する所に非ず。唯歴史的事實として吾人の認識し得る範圍内に於ては、人類は幾多の人種として顯はれ、各其人文史上の職能を異にせり。是點より歴史を通觀する時は、偶然なる外部の事情より生起せる種々の差別を超越

し、各國民族を通じて人種の異同より起る所の精神的團結と分離とを認め得べし。是れ各國民族の真相を會得するに欠くべからざるなり。

吾人今歐羅巴中世史の初めに於ける所謂民族移動(Völker-wanderung)の由來を知らむが爲に、先づ其人種一般に就て少しく述ぶる所あるべし。而して便宜の爲に歐洲に於ける『アールヤ』人種、及び『ツラン』人種の二節に分たむ。

(二) 歐羅巴に於ける『アールヤ』人種

『バスク』(Basque)及び『フィン』(Finn)兩民族によりて代表せらるる、歐羅巴最古の住民は、果して何人種なりやは、茲に述ぶるの必要無かるべし。何となれば大陸の歴史は、『アールヤ』人種を以て初まりたればなり。

『アールヤ』人種は中央亞細亞より歐羅巴に彌蔓せり。其最初の移住民を『ケルト』民族となす

『ケルト』民族

『ケルト』民族移動の歳時は逸として尋ねるに由無し。其初めて歴史的記錄に現はれたる頃は、已に歐洲の中西部に固着し、其起原に關する傳説の如きも既

「ケルト」民族
移動の蹤跡。

に久しく湮滅し去れり。古代の史家も、有人以來土着の人民なりと思惟したりき。然れども近時言語學研究の結果として、印度日耳曼人種、即ち「アールヤ」人種の一分派なることは疑ふべからざる事實となれり。

『ケルト』民族は「アールヤ」人種中、最も戰勝的民族として知らる。ドナウ河及び小亞細亞より、今の瑞典、獨逸、佛蘭西、以太利、西班牙を越へて遙に愛蘭土の西海岸、蘇格蘭の高原に至るまで、彼等の遺跡を見ざること無し。今博士マイエル氏(Dr. C. Meyer)の説に隨へば、彼等の歐羅巴に入るや、二條の路を取れり。其一は西南の方向を取り、シリア、埃及より亞非利加の北岸に沿ひ、ソナラタルの海峡より歐洲に入る。其中一群は海を越へてブリタニアに入り、他の一群は以太利に入り、第三の一群はアルプス連山及びドナウ河畔に沿うて、黒海に止まれり。他の一は北部歐羅巴、即ち今の瑞典、普魯西の地を過き、紀元前六百年頃、更に北海を渡りて蘇格蘭及其附近の諸島に移住せり。マイエル氏は前者を以て羅馬史家の所謂『ケルト』人、及びガリア人の祖先なりとし、後者を以て『ピクト』人、及び『スコット』人の祖先なりとせり。

其最古の歴史

其特性。

是設想の當否は暫く措き、是民族に關する信憑すべき最古の歴史は、其西班牙に於ける『イメール』人との争闘に初まる。但し彼等が有史以前、已にアルプス山を越てポイ河畔の平原を占有せしは疑ふべからず。紀元前四世紀に至りては、所在の『エトルスク』人を驅逐し、此處に後年『キサルピン』、『ゴール』として知られたる一國家を建設しき。幾もなく更に大舉して中部歐羅巴よりマケドニア、希臘を蹂躙せしことあり。其餘勢遠く西部亞細亞に於ける『スキユタイ』民族に及ぼせり。

古代ケルト民族に就て吾人の有する精確なる智識は甚だ少し。只彼等が戰闘を好み、歐洲の各部に蔓延し、到る處當時の邦國に危害を及ぼしたることは争ふべからず。之を古記に徴すれば、彼等の性質は大體に於て今日の『ケルト』民族と均し。即ち勇敢機敏にして虚榮虚飾を好み、喜ひて冒險に従事すれども、堅實耐久の志操に乏し。新奇に趨りて舊習に泥まらず。是を以て『チートン』民族の如く土着の風無く、隨て鞏固なる國家を建設して其中に定住することを好まず。隨うて其歴史上の事業は、快濶華麗なりと雖も、其戰勝の結果一として見るべきもの無し。彼等は個人の自由を尙ぶ。然れども一定の主權に服従して國民一致。

其風俗。

の大運動を起すの團結心に乏し。近世の佛蘭西人は『ケルト』民族として多少は特色を保存せり。彼等は素深湛の民なり。又傭兵として善く戦へり。然れども訓練無き匹夫の勇氣は、遂に羅馬の秩序ある軍隊に敵する能はず。初めは羅馬人の征服する所となり、羅馬の滅後は更に『チニートン』民族に隸屬せり。『ケルト』民族の精神的特質は古今太だ其差を見ずと雖も、其肉體は大に變化せりしが如し。ケーザル時代の『ケルト』人は細毛碧瞳にして、其皮膚は赤色なりきと謂へり。今日の『ケルト』人の中、是摸型に適するものは、獨り蘇格蘭人あるのみ。其遺物によりて之を見れば、彼等は夙に鎔鑄の術に長じ、又種々の陶器を製作せり。其建造せる家屋、船舶、道路、橋梁は一種の特色を有し、殊に其煉瓦の圓塔は歐洲各部に著し。彼等は死者を火葬せり。

其宗教。

『ケルト』民族は、又希臘のそれに類似せる以呂波文字を有せりしが如し。又多少美的感情を有せしことは、其遺物にて知らる。其宗教は今日尋ね難しと雖も、自然崇拜は一般に行はれたりしが如し。羅馬の史家によれば、未來世の存在、及び

其言語及詩歌。

輪廻轉生を信ぜりと云ふ。僧侶は殊に社會の尊敬を受け、非常の勢力を以て人民を支配せり。是僧侶は『ドルイド』(Druids)の名によりて知らる。言語及び詩歌は夙に用ひられき。言語は二種に別たる。『キエムニス』派(Kymrisch)はガリア人及びブリタニア人之を用ひ、今尚『ケール』派(Gaelisch)は今尚愛蘭土、蘇格蘭及びマン島に行はる。

『チニートン』民族。

其歐洲移住の年序を以てすれば、『ケルト』民族の後にありと雖も、其歴史上の勢力は『チニートン』民族(Enion)を以て最となす。中世以後、歐羅巴歴史の中心を作せるものは、實に主として『チニートン』民族なり。

其大移動。

然れども、『チニートン』民族の出現は、歴史の研究をして一層困難ならしめ、其人種學上の位置も亦學者間の一難題なり。基督教の播布以前の中央歐羅巴は實に亂雜糾紛を極め、幾多の戰鬥民族の移動離合は一々討尋に遑あらず。而かも皆之れ初めは東方より波來し、皆之れ同一人種に屬する半野半開の民族にして、而

『チユートン』
民族の勢力。

して昔之れ古代の文國羅馬帝國の版圖を侵掠し、破壊し、以て自家立脚の地盤を求めたる者なり。實に耶蘇紀元後二世紀より七百年の間繼續したる是歐羅巴の紛亂、及び幾多國民の運動は、世界の歴史上空前絶後の事例なりとす。北より南まで、南より北まで、東より西まで、日耳曼民族の移動は殆ど端倪すべからず。同一の名稱は天涯異方に顯はれ、或は興り、或は滅し、或は羅匈民族の文明の中に抱容せらるゝあり、或は自家の征服せる、『ゲルト』、『スラヴ』の諸民族と混淆するあり。集散離合の跡、雜然として人目を眩せしむ。

是等幾多民族の所屬たる『チユートン』民族は、當時にありても既に世界の最強民族なりき。羅馬帝國は其打撃の下に仆れたり。歐羅巴の各處に於ける腐敗せる人文は、彼等の足下に粉碎せられ、柔懦無氣力なる希臘及び以太利的『アーリア』民族は、彼等の青春有爲の血液によりて興奮せられき。是の如くにして近世歐羅巴の新人文は生起せり。『チユートン』民族は實に歐羅巴及び亞米利加に於ける最も有力なる要素なり。

『チユートン』民族をして其亞細亞の故郷より歐羅巴に移動せしめたる原因は、今日

『チユートン』
民族の二派。

之を詳にするを得ず。其移動の年代及過程に就ても、學者間に種々の設想ありと雖も、茲に必要無きを以て記載せず。是民族の歴史的な生活は、紀元三四世紀の交に於て、東部歐羅巴に始まる。是移動の直接の原因となりたるものは、『フロン』民族の壓力に在りしものゝ如し。

古代『チユートン』民族を分て二派となす。一は日耳曼族、即ち索遷族(Saxon)にして、一は『メネヴ』族(Geives)なり。後者は多少『メラヴ』民族の血液を混じ、『ゴート』(Goth)、『ランゴバルド』(Langobard)、『ヴァンダル』(Vandal)、『メルガングマン』(Burgundian)等を含む。是等の諸民族は、純粹なる日耳曼族、即ち索遷族に比すれば、一層游牧的且戰鬥的性質に富み、農業を好まず。其國家は専制政體に傾けり。索遷族は之に反して、寧ろ民主的なり。然れども國民的感情は『メネヴ』諸民族に比すれば、稍、薄弱なり。

其比較。

歴史上有力な
る四派。

『チユートン』民族中、歴史上の勢力及び關係の重大なるものを擧ぐれば、大凡四あり。即ち『ゴート』族、『フランク』族、索遷族、及び『フレイマン』族、是なり。『ゴート』族は多く歐洲の東部に在り。『フランク』族(Frank)は主として西部に移動し、索遷族は主として

北部に『アレンマン』族(Alemanni)は南部に住す。

『ゴート』人は初め瑞典の南部を占有せしが、紀元四世紀の中頃、西『ゴート』族としてドナウ下流の地に現はれ、五世紀に入りて遂に西の方ガリア地方に遷し、西『ゴート』王国を建設せり。是派の遺民は、今尚クリメアにあり。また四世紀の末葉、彼等は所謂東『ゴート』族としてドナウ下流の地より、ブルガリアに入り、五世紀の末、轉じて以太利に入れり。是地に建設したる王国は、六世紀の末、東羅馬帝國の軍隊に滅さるゝまで、凡そ一百年間成立せり。他の一派は東北日耳曼の地方を占有せり。

『ブンダル』族

『ブンダル』族が今のウングアルン(匈牙利)の地に住せしは、紀元二世紀の半にあり。五世紀の初に到り、他の民族と共に其移動を初め、ガリアよりイスパニアに進み、羅馬の軍を破りて亞非利加に達せり。其一群は再び歸りて羅馬府を焼けり。然れども六世紀の半に到りて、に敗滅に歸せり。

『アレンマン』族

『アレンマン』族は、三世紀の初め頃、已にドナウ、マイン兩河の間に於ける日耳曼の中部に住し、羅馬軍を苦む。然れども五世紀の末、『フランク』族の爲に其進路を遏

止せられたり。

『フランク』族

『フランク』族は紀元三世紀の頃、已にライン河の下流に住し、四世紀の半、ガリアに入り、其處に幾多の小王国を建設せり。五世紀の末、大に羅馬軍を敗りて今の佛蘭西の地に其後裔を止めざらしめ、更に『アレンマン』西『ゴート』『テューリンギアン』『アルカンヂイアン』の諸族に勝ち、茲に後年カル(シヤール)レマン(大帝國)の基礎を固め、歐洲今日の諸邦國樹立の勢を決めたり。

『サクソン』族

『サクソン』族の名稱の初めて顯はれしは、二世紀の中頃にあり。其住所は、エーゼル河より、エルベ河を越え、今のホルスツォイン、及び建馬の地方を占む。多くは海賊を業とせり。五世紀の半に到り、一派は海を越て『アケル』人と共に英吉利の大部分を征服し、他の一派は大陸の諸邦を蹂躪したる後、遂に十世紀の初、ノルマンディ王国を建設し、更に十一世紀に入りて、ウヰリアム(William the Conqueror)の下に再び英國を征服せり。又『サクソン』族は他方に於ては常に『フランク』族と衝突し、後者が九世紀の初に於て、『フランク』王国を結成するに至りて、争鬭辛やく熄みき。『サクソン』族は之より北、日耳曼の全部を占領せり。

紀元第三世紀に於ける「チエートン」民族。

之を要するに、紀元三世紀頃、に於ける「チエートン」民族の位置は概ね次の如し。即ち北の方ライン河よりエルベ河に至る地方には「サクソン」同盟あり。其西方、北部ガリアに到るまでは「フランク」族の住地たり。「アレマン」族はライン河の上流に於ける今の獨逸の西南部を有し、獨逸以東の地は「ゴート」族の占領する所なり。「ゴート」族は「チエートン」民族中の最も古きものなりしが、「フン」族(日)の痛激なる攻撃を被ること、其羅馬帝國內に居住して其文弱に感染せしこと、は共に大に其勢力を減殺し、遂に一個の獨立民族として其跡を止めざるに到れり。「チエートン」民族の中にて、最も羅馬文明の影響を受けざるは「サクソン」族なり。之れ彼等が永く其生來の活力と勇氣とを維持し得たる所以なり。「チエートン」民族の血液を尤も純粹なる状態に於て保存したるものは實に是民族にして、近世人文に至大の勢力を有せる國民亦多く是族より出づ。

「チエートン」民族が初めて羅馬歴史の一要素となりしは三世紀の中年にあり。五世紀の末に到りて、彼等は西羅馬帝國を滅ぼし、八世紀の初に到てフランク帝カール(シヤールマン)の下に新「チエートン」帝國を建設し、其版圖は西班牙、日耳曼、佛蘭

「チエートン」民族の地理學的的位置に於ける「フン」族の勢力。

羅馬没落後の「チエートン」民族。

西、以太利の大部分を包容せり。

「チエートン」民族の地理學的的位置を決したる要素は、東部歐羅巴に於ける「フン」族の激烈なる侵襲なりとす。「チエートン」民族をして漸く歐洲の西部、及び西北部に移らしめ、東部歐羅巴を擧げて「スラヴ」民族、及び「フィン」民族の占有に委ねしめたる者は、實に「フン」族の勢力に本く。是關係的位置は現今に於ても尙ほ依然たり。五世紀に於ける羅馬帝國没落の後、「チエートン」民族の地理學的配布は概ね次の如し。即ち、イルリア(Illyria)及び以太利には「ヘルール」人、及び「ルーク」人、及び後には東「ゴート」族の混淆あり。西班牙に於ては「アンダル」族、及び北部には西「ゴート」族あり。南部佛蘭西には、西「ゴート」族、東部佛蘭西には「ブルガンナ、アン」及び「アレマン」族あり。北の方比耳義、及びライン下流の地には「フランク」族あり。其他「チエールランド」には「フリシアン」族、エストフリアには「サクソン」族あり。ドナウの左岸、維納の附近には「ランゴバルド」族あり。是の如く「チエートン」民族はエルベ以東の地を「スラヴ」民族の手に委棄したりき。

羅馬帝國の没落は「チエートン」民族の大部分には何等較著の影響を及ぼさざりき。

獨り東西「ゴート」族は、久しく其文弱の弊に浸潤し、「フランク」族も亦「ケルト」及び羅
旬民族との接觸によりて、大に其感化を受けたり。今の佛蘭西民族は其結果な
り。

カル、大帝時
代に於ける歐
洲各部の人種
的配布

今序にカル、大帝(シャールマン)時代(七六八—八一四)に於ける歐羅巴各部の人種
的配布を一言し、以て當時「チュートン」民族の如何の位置を占得せしかを述へむ。
是時代にありて、南部以太利に於ては、「アラビア」民族戦勝の結果として「セム」人
種の混和あり。北部以太利に於ては、羅馬及び「ケルト」民族の文明に同化せられ
ざる「チュートン」民族の一派なる「ロムバルド」族尤も勢力あり。西班牙の南部、及
び中部は「アラビア」民族の支配の下にあれども、西北部は多少「ゴート」族の子孫と
「イベール」族の混和あり。佛蘭西の南部には、古代「ケルト」民族の遺孽と「ゴート」族
と混ざる羅馬人あり。東部には「フランク」族尤も勢力を有せり。若し夫れ「セ
ム」ライイン兩河の間より、「マイン」及び「ドナウ」兩河に至る一帯の原野は、日耳曼族の
専占する所にして、多少「ケルト」及び「スラウ」兩民族の血液を混したるが如し。「チ
ュートン」民族の尤も純粹なるものは、連馬、瑞典、那威、及び歐洲の北岸に住せり。

「チュートン」
民族の原的人
文。

英吉利は素「ケルト」民族なりしが、漸く日耳曼族の血液を混し、遂に「サクソン」及び
「ノルマン」の二回の征服によりて、「チュートン」民族は茲に不拔の權勢を樹立せり。
今古代歴史家の告ぐる所に隨ひて、「チュートン」民族の人文を尋ねるに、他の民族
に比すれば概して優秀なるが如し。彼等は名譽心に富む。其弊や動もすれば
驕傲に陥る。然れども單純素朴、能く人を信ず。好て危険を冒し、其敵を悪むと
と甚し。然れども婦人を尊敬することは、遙に他族の表に立つ。之れ其言語に
賣淫を意味するもの無きを以ても知ることを得べし。

「ケルト」民族は市街を愛すれども、「チュートン」民族は田園を好む。然れども一定
の土地に固着するの念慮は比較的少し。「アールヤ」人種に普遍なる宗教心は
彼等にも亦之を發見すべし。然れども迷信に熱中すること少し。其神話は寧
ろ科學的に近く、其精神的傾向は概して法律政治の方面にあり。殊に注意すべ
き特色は、其道義を重ずることあり。是の如く是民族が婦人に對する尊敬、其
道義的傾向、一神教及び其自治的政體は大に基督教の傳播を容易にせしこと、蓋
し疑ふべからざるなり。

「チニートン」
民族の言語。

若し夫れ言語に關してはマックス、ミュルレル氏は之を三種に區分せり。第一は低地日耳曼語にして「ゴート」「サクソン」和蘭及び平獨逸の諸語を含む。第二は高地日耳曼語なり。七世紀より十二世紀に至るまでの古高地日耳曼語、十二世紀よりルーテル氏までの中高地日耳曼語及び今日の文學的獨逸語、即ち新高地獨逸語を含む。第三はスカンディナヴィア語是なり。

「スラヴ」民
族。

歐羅巴に於ける「アールヤ」人種中「チニートン」民族に次ぎて歴史上に勢力を有する者を「スラヴ」民族(Slavens)と爲す。

移動の事情。

是民族の移動の事情は明ならず。想ふに恐らくは土耳其民族の跋扈に辟易し、「チニートン」民族の遺蹟を追うて、亞細亞の故郷より漸く西方に遷徙せしならむ。而かも彼等の占住せし土地は、歐羅巴東方の藩屏なるを以て、不幸にして亞細亞民族西侵の衝に當り、常に其禍害を被れり。然れども彼等の堅忍不拔の性質に富むや、能く其土地及び特性を支撐し、猶ほ狂瀾退き去りて依然たる岩石を殘すが如く、「フィン」「アブール」土耳其諸民族の蹂躪し去りたる後は「スラヴ」民族は再び

東西「スラヴ」
民族。

平和なる耕作民族として再現せり。是民族の起原に關しては學者間に一定の説無し。

紀元前の四世紀及び紀元後の一世紀間「スラヴ」民族の運動は主として東北に向ひしが、三世紀より七世紀迄の間は、之に反して西南に向へり。之れ東部諸州に於ける人口の増殖と亞細亞的遊畜民族の侵襲ありしとに因る。殊に五世紀の末葉に於ける「フィン」族の破滅と羅馬帝國との没落は、彼等の爲に西方歐羅巴を開放したるに等しかりき。

「スラヴ」民族を東西に別つを便宜とす。東「スラヴ」族は七世紀の初め、セルビア、ダルマチアを占領し、更に轉じてアルプス山の東南の傾斜地に移住せり。魯西亞人も、其名稱はスカンディナヴィアの一部落、ロッシン(Ross)より轉訛せりと雖も、實は是派の「スラヴ」民族に屬す。

西「スラヴ」族は六世紀の終に當り、希臘を侵して其諸州を蹂躪し、殆ど之を「スラヴ」化せむとするの勢ありき。七世紀の初め、日耳曼のエルベ河畔に現はれ、エルベ、并スツラ、兩河間の北海岸に幾多の植民地を樹立せり。ダルマチア人「フランク」

『チエートン』民族と『スラヴ』民族との比較。

的『スラヴ』『サクソン』的『スラヴ』波蘭土人、ボメラニア人、匈牙利の『スロヴツク』の諸民族は是より出づ。
冒險の精神に富み道義の觀念高きことは、『スラヴ』民族は遙に『チエートン』民族に及ばず。然れども堅實耐久、百難の中に立ち、毅然として終始其特性を失はざるに至ては、『チエートン』民族遂に遙に『スラヴ』民族に及ばず。其人種及び國民の觀念の強盛なることは、古今を通じて一なり。耕作工藝の如き平和的事業に於ても亦遙に『チエートン』民族の上に出づ。彼等は『チエートン』民族の如く戰鬪を好むこと甚しからず。然れども一旦劍を執て立つの已むを得ざるに遇へば、千患万難、又彼等に前無し。個人自由の觀念に乏しき代りに、公共の利福を思ふの念甚だ強し。實に一定の主權に服従し、其指麾に隨て歩武整齊なる國民的運動を作爲するは、『スラヴ』民族の特性にして、又其歴史上の大勢力たるを得たる所以の一なり。
宗教は、印度、日耳曼の一派として、一方に於ては印度及び波斯のそれに類し、他方に於ては日耳曼、以太利のそれに似たり。希臘との類似は少し。大體より見る

時は、所謂道義二元主義にして、靈魂不滅、復活及び因果應報を信ぜり。其基督教に轉化したるは、九世紀の中葉、希臘の僧メトヂウス氏 (Methodius) 及びキリロス氏 (Kyrillos) 兄弟の力なり。殊にキリロス氏は希臘『ホント』『アルメニア』諸邦の文字を參酌して、初めて『スラヴ』的以呂波文字を製作し、メトヂウス氏と協力して聖書を翻譯せり。之を『スラヴ』文學の嚆矢となす。
之を要するに『スラヴ』民族は、民族移動時代に於ける剛毅堅實、最も永遠の望ある民族なり。其歩武は迫らず、激せず、其抱負の實現を悠久に期待するの風度は、中世以後西洋歴史中の一偉觀たり。而して是民族の勢力を代表するものは魯西亞帝國なり。

魯西亞。

魯西亞人は、中世紀の初めに於て既に『スラヴ』民族の中堅たりき。ウラヂミール大帝の時にありては、中部歐羅巴に於て二万方哩、蒙古侵入の頃には四萬方哩、即ち現在獨乙帝國の四倍大の土地を占有せりき。是民族の性質及び風土の狀況は、市街生活に適せざりしを以て、十一世紀の初に於ても、既に二十四の都會

『ルーリック』

を有せしに過ぎず。最も有名なるものをキープ及びノウゴロドとす。後者は北方民族の最も有力なる市場なり。魯西亞王國の結成は、九世紀の頃、『ノルマン』人、ワレーゲル氏 (Varangian) によりて爲されたり。所謂『ルーリック』家即是なり。希臘教會の輸入は、十世紀の終にあり。ウラディミールの後を繼げるもの政を失ひ、王權分裂して小諸侯の確執割據を致せり。是内訌の最中に當りて、成吉思汗の大侵入あり。茲に蒙古民族の羈絆に苦むこと殆ど二百年。十五世の末、イヴン大帝の時に到り、魯西亞は始めて外邦の壓制を擺脫して其獨立を全ふせり。

魯西亞の人文は蒙古民族の暴力の爲に將に崩え出でんとせる嫩芽を蹂躪せられ、更に新に西歐文化の規模を探りて之を再造せり。是舊新文化の更代は魯西亞國民の爲に最も重大なる事實にして、今日魯國民が有する博大なる開化力は實に是事實に起因す。是を以て之を見れば、蒙古民族の襲來は『ネラヴ』民族の人文に一生涯を開拓し、其後年の發達を助成せるものと謂はざるべからず。

(三) 歐羅巴に於ける『ツラン』人種

蒙古民族の襲來と『ネラヴ』民族の人文。

歐洲に於ける『ツラン』人種の侵入。

印度歐羅巴人種の移動漸く靜ならむとするや、茲に三世紀より九世紀に至るまで、新に『ツラン』人種の大遷徙興れり。是人種は、後漢の時支那帝國を犯して退せられしより、轉じて馬首を西し、亞細亞の中原より歐羅巴に亂入せり。其足跡の印する處、市邑を焼き、人畜を殺し、其殘酷狂暴は、歐亞諸民族の慄然として恐れたる所なり。全歐羅巴は今の佛蘭西の地に至るまで其禍を受けたりしが、其事業は破壊のみにして、何等恒久の結果を貽さず。其結成したる唯一の國家は匈牙利あるのみ。

是民族の故郷は、ウラル山脈の兩側に於ける、テルガ及びオピの間の寒地なるが如し。其一脈『フン』族は、三世紀以後、南部魯西亞に入りてテルガ及びドナウ下流の地に住せり。九世紀に到り、他の一脈なる土耳其族は、裏黒二海の北部の平原に汎濫し、同じ族の一分脈は、裏海及びカウカソスの南を過ぎ、波斯及びユウフラート河畔に闖入し、進みて小亞細亞より、ビザンツ帝國(東羅馬帝國)を顛覆し、遂に土耳其、其てふ強大なる帝國を建立せり。前者は即ち一時歐洲諸邦を震懼したる『フン』族にして、後者は土耳其其民族中『クマニ』(Cumani)と稱せらるゝ者なり。

『フン』族。

『フン』族は通例『ツラン』人種中、土耳其民族に屬すと稱せらる。然れども確證の動
かすべからざるもの有るに非ず。其初期の移動も亦明ならざるなり。想ふに
彼等がウラル山附近の高原を去りしは四世紀の半ばならむ。三百七十五年、彼
等はテュルクが及びビドンを渡りて『ゴート』族を攻撃せり。東『ゴート』王國は一戦にし
て彼等の爲に仆され、『チェートン』民族も亦彼等の爲に驅逐せられ、黒海地方を捨
てドナウ下流の地より深く歐洲の内部に遁れたり。是の如くにして『フン』族は、
ドナウ以東、柴比利亞の廣原に至る渺漠たる土地を占有せり。

アッティラ治
下の『フン』族

『フン』族の有名なる酋長アッティラ (Attila) の治世は、四百三十三年より四百五十三
年まで繼續せり。其領地はパノニア及びダキアよりポヘミアの境界に及び、其
境界は佛蘭西に及べり。然れども其死後の王國は其起りしが如く一朝にして、
皆てアッティラ自らが征服したる『チェートン』民族の爲に打破せられき。六世紀の
半に到ては最早や一個の獨立民族としての『フン』族は其跡を絶てり。獨り土
耳其民族の一派『クマーニ』は十一世紀の頃、匈牙利に定住し、永く其子孫を是地に
留めたり。

『マギアール』
族。

匈牙利。

土耳其民族の中、『フン』族に次ぎて勢力を有せしは、『アヴァール』族 (Avar) なり。是民
族の歴史上に現はれしは五世紀の半にあり。六世紀に入りて、ドナウ河上に現は
れ、スラヴィア、東日耳曼、バイエルン、サクセン等を侵掠し、遂に匈牙利帝國を建立せ
り。然れども幾もなくフランク國民の爲に破られ、匈牙利帝國も九世紀の初、カ
ル、大帝の爲に滅されき。是、『アヴァール』帝國の遺趾に新に帝國を建てたるもの
は、『ブルガリア』人なり。然れども幾もなく、『スラヴ』民族の爲に亡され、十四世紀の
終に至り土耳其の版圖に入れり。

終りに記すべきは、『マギアール』族 (Magyar) なり。是民族は、土耳其人を除ては今日
歐羅巴に於ける唯一の『ツラン』人種なり。素、『マギアール』族に屬し、古史に所謂『ウグリ』
(Ugri) 又は『フンクリ』 (Hungri) と稱するもの是なり。彼等は九世紀の末、トランシル
ヴァニアを越て今の匈牙利の地に入り、殆ど一世紀の間、西は佛蘭西より、東はコン
スタンチノポリスに到る、殆ど歐洲の全部に出没し、遂に故の匈牙利に定住せり。
是民族は國民の概念に富み、『クマーニ』、『ブルガール』等同種の民族を糾合して、鞏固
なる團結を組織せり。當時之に顔顔し得るもの、東方歐羅巴にありて獨り、『スラ

「民族ありしのみ。之れは民族が殆ど一千年の間種々の困難に抵抗し、異人種の間で孤立して能く其獨立を保ちたる所以なり。

以上は西羅馬没落前後に於ける民族移動の梗概なり。ビザンツ帝國及び中世紀に於ける人文の變遷は章を追ふて之を述べむ。

第五章 ビザンツ帝國

ビザンツ人文の概見。——ビザンツ人文の代表者としての建築。——ビザンツの建築は獨立の様式に非ず。——其文學。——プロドムス氏の劇詩。——ビザンツ帝國の天職。

西羅馬帝國の崩解と新民族の勃興とが、歐羅巴人文史上に一生面を拓きつありし間に、希臘羅馬の古代文化が、依て以て混亂破壊の風潮と隔離して其命脈を維持し、當に來るべき捲土重來の時期を他日に期待せし一の土地ありき。東羅馬と稱せらるるビザンツ帝國即ち是れ。

ビザンツ人文の概見。

是帝國は、一般に言ふ時は、半ば希臘東洋的、半ば羅馬的文化の混成體にして、何等獨立自主の發達を營まず。凡そ一千年の間、古代文物の保存を外にして、寂莫枯槁の死相を現せりき。其財政、軍備、及び内治の組織は、主として成を羅馬に承け、更に多少基督教の傳播に伴へる東洋的臭味を帶べり。就中ユスティニアヌ朝(五二七—五六五)の建築物、法典の結成、朝儀、及び外交術の完備進歩を著しとなす。宗教は國家事業として取扱はれ、俗化は其免れ難き結果なりき。加ふるに「アリアニスムス」若くは八世紀に於ける偶像破壊の爭論の如き、幾多數義の紛争は累代絶えず。國民思想の傾向は政治的方面より退きて、漸く神學上の喧嘩口論に熱中するに至れり。是を以て當時最も昌へしは神學と說教的能辯術となり。法律及び歴史も亦之に次で多少研究せられき。

ビザンツ人文の代表者としての建築。

今ビザンツ人文の特性を示せる一例として其建築に就て一言せむ。西羅馬の没落するや、ビザンツ帝國は大に警戒し外は邊防を嚴くし、内は國治を務め一時は茲に古代の羅甸文明を復活するの勢ありき。然れども、未だ幾なら

ずして東洋に固有なる専制虚禮の弊風に染み、順に進歩の活力を沮喪せり。基督教も國民性と共に腐爛し、徒に權勢の争奪に忙しくして、毫も當初の生氣を存せず。ビザンツ全帝國は、虚勢空文の外皮の中に、衰弱虚脱の骨肉を包めり。是一般の傾向は亦明に美術の中に顯はる。

ビザンツ帝國の美術は建築を以て最となす。建築の中其の尤も模型的なるものは、『セント、ソフア』寺院なり。是寺院はユスチニアヌス帝の治世に成る。

ビザンツの建築は素獨立の様式を以て目すべきものに非ず。其穹窿は之を羅馬に取り、其様式は之を希臘に摸し、殆ど自ら機軸を出せしものならず。唯廣大なる幅員を有する穹窿が内部に一支柱なくして大空を掩覆するの一事、頗る其巧を稱すべし。然れども未だ美術として創作の工を言ふに足らず。『セント、ソフア』寺院の如き、是大圓蓋の周圍、更に又四個の半圓蓋あり、以て十字架の四枝を掩ふが如き、又其穹窿狀の總の兩個三個相駢列するが如き、錯綜複雜の巧を盡せりと謂ふべし。然りと雖も、希臘式の整齊閑雅の韻致無くして、寧ろ東洋流の瑰奇不自然の弊有りとす。毫も一氣の神韻恍として人の心思を奪ふが如き活

ビザンツの建築は素獨立の様式に非ず。

力を見るなきなり。一言以てビザンツ式の美術を評すれば、形骸の絢爛に拘泥して精神の高雅を尙はず。其政治宗教の上に表はれたる無趣味なる形式主義は、茲にも亦明に現はれたり。

其文字。

ビザンツの文學も亦其美術と均しく快濶進歩の風に乏し。其至醇なる創作として見るべきものは、宗教に關する情劇あるのみ。是れすらも其格調結構多くは希臘悲曲の摸倣に過ぎず。而かも其脚色の鋪張誇大をまねびて、未だ其精神の崇高雄偉に詣らず。其最も古きものは、テオドロル、プロドロムス氏(Theodor Prodrums)の作にして、希臘の戯曲家イウリピアイス氏に倣ひて、耶穌の傳記を叙せるものなり。聖母マリヤを以て其主人公となす。然れども全牀の上より之を見る時は、摸倣踏襲に忙はしく、徒に文字の彫琢に注意して、意氣感情兩ながら緊切ならず。却て短釘冗漫に流る。創作の活氣は殆ど見るべからざる也。左に耶穌の死に對するマリヤの悲嘆の一節を譯載して其一例となさむ。

あゝ、あゝ、吾は彼が貴き頭のうなだるゝを眺むるかな。あゝ、悲い哉、吾は今大なる譽れを得べかりし我子の屍を見むとは思ひかけざりき。あはれ彼は實

プロドロムス氏の劇詩。

に大なる譽を獲べかりき、されば聲を揚げて父なる神を呼び求めき。其強き聲音に地の巖は裂け砕け、十方世界は震ひ動きて其響を返したり。おゝ吾子よ、吾をして爾の神聖なる右手に接吻せしめよ。愛らしき手なるかな。憶へば吾は數、是手を執り、姫蕩の稷の樹に懸りたらむ如く、其上に吾身をもたせしこと幾度ぞや。眼の消え失せたる光、愛らしき口、おゝ是軟かなる唇のやさしき容よ。あはれ我子の顔の貴くも又麗はしきかな。

之を要するにビザンツ帝國の人文には自家の特色として見るべきもの無く、又古來人文の發達に何等著大の貢獻を爲さず。是帝國が史上に於ける職能は、一に古代文物の保存と、歐羅巴東方の藩屏たりしにあり。即ち西方歐羅巴諸國が外來の勢力に對抗して其獨立を保持し得るまで、ビザンツ帝國は歐洲東部の胸壁となり、年毎に増りゆく亞細亞民族の侵襲を支へしなり。西方諸國の基礎全く成就し了るに及びて、是帝國は茲に其職能を解きて滅亡し、多年其城壁裡に保存し來りし古代文物を西方諸國に播布せり。もしコンスタンチヌス帝が別に東羅馬の一帝都をボスフォラスの海峡に建設する微りせば、希臘以來の古代文

ビザンツ帝國の天職。

物は羅馬没落の終に來りたる暗黒時代の間に燬滅したり、近世期の邦國は更に人文史の大部分を其初めより新に反覆せざるべからざりしやも知るべからず。又ビザンツ帝國にして土耳其民族の爲に亡ぼさるゝなく、其獨立を永久に持續したらむには、古代文化の寶庫は空しく閉鎖せられ、西方民族は永く其澤に潤ふとを得ざりしならむ。此を以て是を見れば、ビザンツ帝國の建立及び没落は共に其時を得たるものと謂はざるべからず。遑莫ビザンツ帝國は如何にして滅びたるや。是事を述ぶるに先ち、吾人をして中世記に於ける人文變遷の大勢を觀察せしめよ。

第六章 中世

中世歴史の區分法。——三分法。——第一期。——第二期。——第三期。——中世史の二大事實。——法王權の發達。——法王權の始原。——東西教會の對峙。——西帝國の没落と西羅馬。——絶對的無過失。——カール大帝以後に於ける羅馬教會。——十字軍と羅馬教會。——獨立皇帝の戴冠と法王。——破門令。——破門令の勢力ありし理由。——國家と宗教との關係。——神聖羅馬帝國と天主教會。——兩者衝突の已むを得ざる所以。——羅馬帝國と基督教。——教

教の分離と競争。——國家の勝利。——其原因。——國家体制發達の實例。——羅馬教會とビザンツ帝國。——中世紀の哲學。——希臘以來哲學思想の變遷。——希臘哲學と基督教。——基督教哲學の起原。——「マトリスチック」學派——「スコラ」學派。——形式論理學と中世哲學との關係。——哲學宗教分離の第一歩としての「スコラ」學派。——哲學と宗教との關係は獨立國家と宗教とのそれの如し。——教育。——文學。——傳説的詩歌。——ダンテ氏の神曲。——其觀念。——中世道徳史としての神曲。——中世紀の美術。——建築と宗教。——繪畫。——中世建築の様式。——彫刻。——シャプルー氏。——各國繪畫の特色。——油畫の發明。——音樂。——封建制度。——封建制度の由來。——封建制度は市的國家と國民的國家との中間にあり。——十字軍以後封建制度衰弱の理由。——騎士氣質。——十字軍。

紀元四世紀の末葉に於ける「チュートン」民族の勃興より、近世に至る凡そ一千年間を、史家は中世紀の名を以て呼ぶを常とす。

是間を分割するの法は、其見る所に隨て史家の中に差別あり。或は三となし、或は四となし、或は五となす。カル、大帝迄を第一期となし、カル、大帝より十字軍迄を第二期となし、十字軍より「バツプススブルグ」家の「ルドルフ」迄を第三期とな

中世歴史の區分法。

三分法。

第一期。

第二期。

し、夫より亞米利加發見迄を第四期となすは、四分法なり。是中の第一期を更に兩分する時は、五分法となる。然れども人文史上之を三期に分つを最も妥當なりとすべし。是三分法に依る時は、第一期はカル、大帝の治世に至る。是れ即ち民族移動の渾沌たる時代漸く沈靜し、國家的組織の漸く確定したる時代にして、並に舊羅馬帝國と新日耳曼民族と、基督教國と異教國との争闘を見る。封建的貴族制度の成立も亦是時代にあり。

第二期は八百十四年に於けるカル、大帝の死後、所謂「カロリング」王國の分裂より、十三世紀の末に至る凡そ五百年間を含む。市及び地方的諸侯の權力の史上に現はれたるは是時代なり。又王權と貴族と、市民の間に互に勢力の消長あり。又帝國と法王との間に即ち政教二界の間に激烈なる權力の争あり。思想界にありては、夫の「スコラ」學派が教權維持の爲に其陳腐なる宗教的哲學を構成せしも亦是時代なり。今是間の政治歴史の大綱を擧ぐれば、カル、大帝没後、所謂「エルダン」條約(八百四十三年)後、西「フラング」の「チャーリング」家絶えて「ユー、カペー」の下に佛蘭王國起り、東「フラング」の「カーリング」家絶ゆるや、オットー一世の下に

獨乙王國は再び羅馬帝國と合せり。北方「チュートン」民族の教興は、英吉利及びノルマンディー侯國の建設となり、又伊太利に於ける法王權の發達は、破門令の下に各國王侯を偪伏し、剛岸なる獨逸帝ハインリッヒ四世の如きも、哀を法王クレゴリオ七世の足下に請ふの已むを得ざるに至れり。ノルマンディー侯、ギヨームの如きも、法王の賛同を得たるが爲に、寧ろ神聖戰爭を聞くが如き觀を以て英國を征したりき。又他方に於ては「セラセン」民族の勃興以後、小亞細亞及びパレスチナに於ける羅馬領は、悉く異教者の手に落ち、基督教徒の巡禮者は甚しく虐遇せられき。是を以て基督教國は、聖地恢復の目的を以て所謂十字軍を起し、前後回を重ねること七たび。其結果は法王及び羅馬教會の勢力を増進し、封建制度の衰微を致し、義勇任侠の所謂中世武士の氣風を奨勵し、學術技藝を進め、西歐殊に以太利諸市の繁榮を加へたり。

第三期は、十三世紀の末葉、即ち史上に所謂大空位時代より、宗教革命、即ち十六世紀の初めに到る。前後凡そ二百五十年に跨る。是時代に於ける重なる政治的事件には、獨逸帝國の衰頽に乗せる伊太利諸市の勃興あり。英佛の衝突、所謂

第三期。

年戰爭となるあり。又一方に於ては土耳其民族の膨脹は、ビザンツ帝國の滅亡となり「セント・ソフリア」寺は回々教の殿堂となれり。而して是間に於ける人文史上の大事實は、所謂文藝復興あり。又幾多の新陸地、就中クリストフ・コロンボによりて爲されたる亞米利加洲の發見は、世界の地理學的智識に一生面を拓發せり。

中世史の二大事實。

中世記に現はれたる歴史的事實の中に於て、最も重要なもの二あり。第一、日耳曼民族と舊羅馬帝國を組織せる諸民族との混合、及び其自然の結果として兩者相互の感化を來せり。即ち日耳曼民族は古來の社會を破壊したると同時に、羅馬人文の反動によりて自家固有の文物に大影響を受け、政治、社會、宗教の多くの點に於て戰敗者たる羅馬人は却て戰勝者たる日耳曼民族の教師となり。第二、羅馬帝國の没落と共に、一般社會の事物概ね其趣味を一變せる中に、獨り其舊態を保ちたる基督教は、歐羅巴に於ける社會的、精神的團結の中心となりき。是を以て法王權は其強大の頂點に達し、隨て茲に國家と宗教との衝突

を惹起せり。然れども政治的權力の増大と、之に伴へる國民的自覺の發達につれて國家の基礎及權能亦漸く鞏固となり、法王權は次第に其勢を失へり。所謂宗教革命は即ち國家が宗教に對する全然たる勝利の標記なり。是兩種の權力の消長は、中世人文史の中心事實なるを以て左に少しく之を精述せむ。

法王權の發達

今中世紀に於ける宗教と國家との關係を述ぶるに當り、先づ法王權の發達史を瞥見せざるべからず。

抑々羅馬の僧正は、素他の何處の僧正に對しても特に大なる權力を有せるものに非ざりき。是通常の僧正が後年羅馬法王と云ふが如き、一時は帝王を凌駕せる程の絶對の權威を占得するに至りしは、一見頗る奇怪なるが如し。曾て政權の迫害に反抗せし一僧正が、後には自ら大迫害の主力となるに至りし由來は概ね左の如し。

法王權の始原

羅馬僧正が有せる法王權の始原は、自ら使徒ペートル氏の相續者なりと稱せしにあり。ペートル氏は新約全書によれば天國の鍵を基督より受けたりと稱せ

東西教會の對峙時

らる。然れどもペ氏は十二使徒中、殊に優秀の地位を有せしにあらず。ポロ氏の如きは敢て一步も之に譲らざりしなり。故に是の如き理由のみにては、素より法王權を占得するに足らじ。其強力の第一の原因は寧ろ其支配したる都府の位地に職由せしもの如し。羅馬は古來所謂神聖の都府にして、其帝都東遷の後にありても其威嚴遙に他を凌駕するものあり。是の如き都府を管收する僧正が、他に超えて尊重せらるゝは寧ろ自然の勢なりとす。是を以て教義等の諍論起る毎に、各教會は其裁斷を羅馬僧正に仰ぐの風を成せり。夫の三位一體に關するアリウスの議論は、羅馬法王に其權力を擴張する機會を予へたる初めに於て、其後アタナシウスの如きも、法王ユリウスの保護を招請せり。是の如き事實よりして法王權は次第に其地歩を占め來れり。

『セラセン』民族の勃興と共にアレキサンドリア、カルタゴ等東方の諸教會の滅亡するや、基督教會中餘す所のものには羅馬及びコンスタンチノポリスの二あるのみ。後者は流石に東帝國の首都なるを以て、羅馬と顔顔して相下らず。六世紀の終りの頃、コンスタンチノポリスの僧正は大に西方歐羅巴に其教權を擴張

四帝國の没落
と羅馬教會。

シイルリクム、エピルス、マクドニアより延いて羅馬教會の壁を摩してチ、リアに達し、自稱して『天下の僧正』と云へりき。時の羅馬法王クレゴリオ氏は断然之を排撃し『天下の僧正』と云ふが如き名稱は、即ち是れ基督教の神聖を汚瀆する非基督教徒の所爲なりとなし、痛く之を批難せり。然れどもクレゴリオ氏の死後未だ幾ならず、是稱號は却て之を排斥したる羅馬法王によりて用ひられき。又他方に於ては、羅馬法王は熱心に傳道に注意し、新に改宗せる地方には必ず牧師を派遣せり。西帝國の没落は、殊に羅羅法王の教權擴張に無上の便宜を予へき。何となれば東帝國の帝座遼遠なるを以て、西方諸國の靜謐を維持せむが爲には東羅馬帝は出來得る丈け法王の歡心を得るの道を盡さざるを得ざりければなり。是を以てユスチニアン帝は、莫天の金品を法王に贈り、羅馬教會は一切基督教會の頭首たるべきことを宣言せり。之れ法王の力によりて『ゴート』族を以太利境外に驅逐せむことを願ひたればなり。羅馬人民も亦希臘人及び北方蠻族を嫌忌し喜びて法王の保護を向迎せりき。

是の如き事情よりして、法王の權力漸く加はるに隨ひ、法王は種々の名稱儀式を

絶對的無過
失。

カル大帝以
後に於ける羅
馬教會。

以て威嚴を高めんことを務めたりき。蓋し自然の勢と謂ふべし。其絶對的無過失を主張したるが如き其一例なり。然れどもカル大帝以前に於ける教權は遂に政權の上に出づる能はず。時の君主は常に法王を見るに臣下を以てし、其任命上位は一に帝王の認可を要したりき。公會を招集し、之に議長たるの權力は法王にありと雖も、概して言ふ時は政權に容吻するの權力を有せざりき。

往時コンスタチヌス帝がニカイア公會に於て『爾等は教會中の僧正なり。然れども教會外一切の僧正は則ち朕のみ』と述べし宣言は、依然として政教二者の關係を規定せりき。

以上はカル大帝時代に至るまでの法王權發達の一斑なり。然れどもカル大帝以後に至りては是兩種の權力漸やく其趣を異にし來れり。カル、が以太利に於けるロム、ベルソ帝國を亡ぼして之を法王に予へたるは、大に法王の政治的權力の増進を助けたり。進れども是大なる讓與にも係らず、ベピンもカル、も共に以太利全土の主權を掌握せしが、ロータイル一世の時に至りて全く法王に歸するに至れり。

十字軍と羅馬教會

九世紀より十三世紀まで、法王の權勢は何等顯著の變化を見ず。然れども十三世紀に至り、インノセント三世及びニコラス三世の時に至りて其大擴張を見き。即ちインノセント三世の如きはアノコナ、スポレット、アツシ、等の諸地を占得し、ニコラス三世は是等の土地の占得を羅馬法王の正當の權利として認めざるの故を以て、皇帝ロドルフス一世の戴冠を拒絶せり。而してニコラスは幾もなく從來帝位に附屬せる以太利の諸地、殊にロマグナ、ボログナを并呑せり。羅馬教會の權力は實に是二法王の下に於て殆ど其最高の崇嚴と富裕とを保ちたり。

是の始き事情の外、更に法王權の基を固うしたるものは十字軍なり。是れ法王は一方に於て是所謂神聖戰爭に従ふ能はざる侯伯より、軍資及び償金を徴收し他方に於ては從軍諸侯間に生ずる一切の事件の截斷を司りしを以てなり。然れども羅馬法王の野心は是の如くにして満足せらるべきものに非ざりき。彼等は進で他邦の主權に故障を挟み、更に帝國の國事に關涉し初めたり。彼等は素獨逸皇帝戴冠の特權を有せるを奇貨とし、帝國の内訌に乗じて帝位に即く

獨逸皇帝の戴冠と法王

破門令

べき人の撰擇に容喙せり。皇帝の候補者争て之を利用して其志を達せむと欲し、法王の利益を保障すべしとの誓約の下に帝冠を得むことを望むに至れり。是の如き事情によりて、法王ヨハン七世は、禿頭カル、及其二人の繼續者を帝位に即かしめき。是事實はやがて教權が政權を超越したるを示せし者なり。宗教史家シゴニオ氏は神聖羅馬帝國は是時を以て羅馬教會附屬の一侯國となれりと斷じたり。

爾來法王は名實共に天下の君主、帝國の判官となれり。グレゴリオ七世に至りて更に破門權を成立し、令して曰く、法王の命によりて破門せられたるものは、使徒の遺法に遵ひて一切他人より忌避せられざるべからず。故に君主にして破門せられたるものは一切世界の排斥する所となり、其臣下も之に離反せざるべからずと。是暴戻なる權力は何等公會の決議を経ることなく、獨斷以て之を決定せり。法王の代僧は獨逸皇帝の面前に於て實に左の如く公言するを憚らざりき。曰く、『吾は使徒の證權によりて肉躰精神二界に亘りて爾を制裁す。吾は爾の武器より勝利を取り去り、爾が現世に於ける一切の利福を褫奪す』と。

破門令の勢力ありし理由。

グレゴリオ七世以下の法王は皆是暴力を逞うせり。列國の君主亦時勢の必要に驅られ、已むことを得ず之に服従せり。十三世紀の初め、法王ホノリウス三世の如きは、自ら預言者エレミア氏か「吾れ爾を國民の上に置き、王國の上に置き、其生殺與奪の權を托す」と云へる言を以て、法王に擬したりき。十四世紀に於ては、法王ボニフェイス八世は、佛王フリツプと争論の際、揚言して曰く、耶蘇基督は羅馬教會に政權二種の劍を與へ、全世界の人類の均しく之に服従すべきことを命じたり。苟も是命令に反對し、若くは之を信認せざる者は、異端として批難せらるべく、一切救ひの道を遮絶せらるべしと。斯くて佛王猶其言を聽かざりしかば、法王は立地に之を破門せり。

今日の讀者或は破門令なるもの、勢力何が故に爾かく帝王の恐る所となり得しかを怪まむ。然れど當時の事情を審にすれば、其實に偶然に非ざるを悟るべし。破門令は即ち一切宗教的職能の停止なり。之れやがて當代の暗黒世界に於ける依信安立の唯一方便を褫奪するの謂なり。何物の恐怖か之に如かむや。當時の人は中心より永遠の幸福の實に是の如き外面的奉行に縁りて初めて享

國家と宗教との關係。

受し得べしと信じたりしなり。破門令は是を以て天國の失亡を意味す、誰か之を得むが爲に法王の驕慢を忍ばざらむや。佛王ロベルト事によりて法王の命を奉ぜざりしかば、法王はロベルトと共に佛蘭西全王國を破門し、生者には「サクラメント」の使用を禁止、死者には埋葬を停止せり。然れども國民は是驚くべき暴命に暫伏し、却て國王に離反せり。是時王の從者は屢に二三を除きて普宮庭を辭し、而して是二三の者すらも王の食卓に残りしものは之を犬に投し、王の手澤を存せる器物は、一切之に觸れざらんことに務めたりきと云ふ。亦以て破門令が如何に當時の人心に恐れられしかを想ふに足る。

然れども勢極まれば必ず變ず。ボニフェイス八世の頃よりさしも權威赫々たる羅馬法王の權力も漸く衰頽の氣運に向ひたり。道般の消息を解釋するものは中世紀に於ける國家と宗教との關係に存す。左に少しく是を説かむ。

抑々中世紀の間、西羅馬帝國崩解の後を承けて封建制度の分裂的傾向を統一せむが爲に、二個の結合的勢力起りたり。是れ即ち羅馬天主教會と所謂神聖

神聖羅馬帝國
と天主教會。

羅馬帝國なり。是二者は單に理論上より見る時は、彼は素宗教を旨とし、此は政治を事とすべきを以て、其間に權力の衝突あるべき筈無し。即ち宗教は内面的に安心立命の信仰を與へむことを務め、政治は外面的に社會民人の利福を目的とす。彼は精神界を支配し、此は物質界に主宰たり。彼は理想を尙び、此は現實を旨とす。其職能の限界のづから劃然として分るべきものあるが如し。然れども兩者各是人生の一半に満足せずして、其權能を全體の上に擴張せむとするに及びて、茲に其衝突を免れざりき。

然れども是の如き衝突の起るは當に起るべきの理ありて起る。強ちに兩者越俎の弊に歸すべからざる也。蓋し身心渾融して茲に初めて人を成す。已に成りたるの人を解析し、其一半を身とし、其他半を心と爲し得べきに非ず。人生萬般の活動は實に是二者の離るべからざる結合に因る。故に外面上異種の行動あるものは、内面上亦そのづから異種の安立を促さざるを得ず。内面上異種の安立を得たるものは、外面上亦そのづから異種の行動を起すべし。安立は宗教の關する所、行動は政治の係はる所、二者の因果は猶形影の相伴ふが如し。個人

兩者衝突の已
むを得ざる可
以。

に於て然るもの、個人の集合體なる社會に於て亦然らざるを得ず。渾然として別つべからざる人類の活動を別ちて、而して政治と宗教と各々其一半を割取せむと要す。言ふべくして行ふべからざるなり。是を以て宗教にして其本來の目的を達せむと欲せば、そのづから政治を冒犯せざるを得ず。政治にして其當初の意志を貫かむと欲せば、亦勢ひ宗教に干渉せざるべからず。二者は其性質上初めより衝突せざるべからざるの宿命を擔へるものなればなり。

そも、羅馬の帝政によりて代表せられたる古代的國家の華麗高慢と基督教徒の歴世禁慾的精神とは、自ら拮据相容れざるものありき。是を以て基督教徒は務めて異教徒の逸樂を避け、其文藝を排斥し、二者の間に激烈なる葛藤を醸したり。アウグスチヌス氏の言へるが如く、基督教徒には實に其劇場に脚を容れざりし故を以て迫害せられたる時代ありき。幾多殉教者の生血は是争鬭の熱火を滅せむと務めたり。帝國は時勢の必要に驅られ、自ら一步を譲りて基督教會と結合するの已むべからざるを覺りぬ。是れ一見すれば實に倏忽の間に成れる大膽無謀なる結合なりき。然れども當時已に崩解の危殆に逼りし帝國

羅馬帝國と基督教

の統一を維持せむが爲には、基督教會の力に憑りて各邦民族間に精神的統一を支撐するを以て唯一の方便となすべき事情ありしなり。然りと雖も時已に晩かりき。基督教會の力も老耗死に瀕せる羅馬を若やぐること能はざりき。かくて帝國は再び起らざるべく斃れぬ。然れども教會及び基督教徒は帝國の没落によりて啻り何等の損害を被らざるのみならず、却て利益を受けたり。多年自己を迫害し來りし權力の死滅を喜びたる基督教徒は、羅馬を陥落したる「ゴート」蠻族の酋長、アラリック氏を却て救濟者として歓迎したり。今や彼等は羅馬帝國の所謂神聖なる傳説をとり來り、自救の意義を以て禮に牽引附會するの自由を有せり。是に於てか帝王國の世間的權力の興亡を以て、自救の傳播に便利あらしめむが爲めの上帝の攝理に出づと爲し、政治を以て宗教の方便なりとするの意志を發表するに至れり。

カル、大帝以後、暫時の間は國家と教會と、皇帝と法王と、兩々相協和して互に起るの弊無きを得たりき。當時王侯各々國を樹て、政治的歐羅巴は、四分五裂の有様なりきと雖も、基督教の感化は遍く是等の邦國に布及し、隱然として其精神的

統一を維持したり。然れども教會は政權に對して何等直接の勢力を有せず、唯道德的はた宗教的の一面に限られたるを以て、所謂神政(Theokratie)の如きものを實現するに到らざりき。そも、羅馬教會の主なる教義は、第一四海同胞なり。第二萬姓服従なり。其世界の統率を目的とすることに於ては、正に羅馬帝國の遺跡を傳へたり。然れども一個の政治家、若くは戰勝者と同一の意義に於ては何等の權力を食らす。立法行政等現世的事業に關しては一に之を國家の掌中に委ねたり。

然れども是の如きは永く繼續し得べき状態にあらずき。一方に於ては教會及び僧侶は必ずや國家の權力に依頼せざるを得ず。即ち教會及び其一切の機能に物質的根據を與へ、又必要ある場合に臨みては、其權力を保護し、制裁を強行する所のものは國家に外ならず。故に政權の掌握者が其報酬として教會の事業に容吻し、僧侶より權利を受くべきは自然の事體なりとす。是を以て教會中の樞要の位地は多く地主、若くは他の教會の保護者によりて占領せられき。是の如く政權に依頼するとは教會の爲に最も不利益なるべきは明なり。是弊害

政教の分離と
競争。

を擺脫し、教會自ら國家と相並びて其獨立の權力を有せむとは、幾多法王の盡瘁したる所なりき。是れ二者の間に紛争の免れ難き所以の一なり。是際教會の陽に争ひたるものは、土地、歳入及び任命等の諸項に過ぎずと雖、其主張の根柢を叩けば、即ち是れ政權に對する教權の優勝的位置を争ひたる者なり。教會の威嚴は實に是一問題の上に懸ると思惟せられき。之れ當時宗教の權力及び意義は實に是等の外形的事物の上に本きければなり。かくて法王は吾人が前文に述べたるが如き事情によりて漸やく其勢力を收攬し、遂にクレゴリオ七世、若くはホノリウス三世に於て見る如き、殆ど無上の權柄威福を恣にせり。ハイノリツヒ四世が其皇后及び皇子と共に三晝夜の間、雪中跣足のまゝ、法王の階下に立たるは、實に是時よりとす。時の帝王侯伯は時勢の必要上已むを得ず、教會の跋扈を容認したれども、素より之に心服せるにあらず。宗教は單に精神的の方面に於て其の主權を保つ間は、人心の歸向を一にし、社會の分立を制止するの功少からざるべきを以て、國家は之を歓迎すべし。而かも武力の強なく、國土の富あるにあらず、而かも猥りに政權に干渉し、甚しきは一片紙を發して帝王の冠を落

國家の勝利。

其原因。

すの力あるに及びては、帝王若しくは爲政家たるもの豈夫れ平かならむや。是を以て法王權の極盛時にありても、時の侯伯は動もすれば教會に反抗し、其命令を蔑視せり。佛王フロリツフが法王ボニフェイス八世の令旨を奉せず、却て其是非を公會に訴へ、人をして法王を招致せしめしが如きは、クレゴリオ七世がハイノリツヒ四世をして謝罪の爲にアルプス山を越えしめしとは大に其趣を殊にし、法王權の漸く衰勢に傾けるを示せり。バイエルのルードカツヒが宗教の意義を制限し、『宗教は國家の榮譽と權力とを損害せざる限り、於て自家の榮譽及び權力を保つ事を得べし』と命令せしは、宗教に國家的性質を附與したるものなり。隨て國民、國家の差別を没却し、同一の服従を四海萬邦に課したる羅馬天主教會の權力を全然否定したるものと謂ふべし。近世紀の初めに於ける所謂宗教革命は、ルードカツヒが所謂榮譽と權力と無き宗教の設計を實現したる一大事實なり。宗教革命以後に於ける宗教は全く國家に服従し、其服従によりて購ひたる保護の下に其存在を繼續するに到れり。是の如く羅馬教會の權力の衰へたる内外の因縁は素より一にして足らずと雖

其實例。

ども、其主要なるものは國家的體制に發達に由らずむはあらず。實に中世紀の後半より近世紀の初期に至る凡そ五世紀は、古代國家の組織より近世國家の體制に遷る過渡の時代なり。是間に於て羅馬帝國の没落後に興起せる諸民族は、漸く其の渾沌たる社會を整理し、中央集權の勢力に藉りて漸く國家の基礎を鞏固にせむと務めたり。之れ各國期せずして其軌を一にしたる事實なり。例せば獨逸にありては、カル、大帝はカル、マルテルの後を承けて、『カロリングア』帝國を統一して、所謂神聖羅馬帝國の皇位を踐めり。次で十世紀の中頃に至り、オットー大帝出でて、『カロリングア』家の後を承け、三十年間の最も強硬なる政略によりて、先づ國內の大侯國を壓服し、以て帝國の統一を確定せり。是等の大侯國の主なるものは、フランコニア、バイエルン、スロピア等にして、何れも『カロリングア』家の衰弱に乗じて分裂獨立を企て、國家の統一を妨害したりしものなり。爾後『ホーヘンスタウヘン』『ハプスブルグ』諸家相次で帝位に當り、其間政道に汚隆ありと雖も、年を追て國家的體制の完備に近けることは最も明白なる事實なりとす。又佛蘭西に於ても、是時代に於ける君主政體の發達は最も史家の注意すべ

き所なり。十世紀の末葉に於けるロニー、カペーの時代にありては、所謂佛蘭西なるものは、パリを中心となせる一公國の名たるに過ぎざりき。而して是佛蘭西公國が他に比して權勢の發達上多少の利便を有したるの點は、猶羅馬教會が當初の發達に於けると均しく、偶々其君主が他諸侯の推す所となりて大總督の任に當り、而して能く其適任の人を出したるにありき。カペーに至り、遠大の志望を抱きて大に陰謀を逞うし、兵力を以て所在の侯伯國を併吞し、着々大王國の建築に其歩を進めたり。其結果として、極めて雜駁なる民衆を提げて和衷協同せる一國民を構成し、頑強にして分裂せる幾多侯伯の州郡を併せ、遂に當代歐羅巴に於て殆ど其比を見ざる程の強固なる中央集權の下に立てる一大王國を建設したり。之れ實に後年ルイ十四世をして『朕は國家なり』と言はしめたる佛蘭西王國なりとす。

是の如く中央集權の傾向の各國を通じて盛なりしは、畢竟各國民族の國家的生活の進歩上必然の結果にして、其根據は牢乎として人文全般の實勢力に本く。是國家的體制の發達は、即ち國家的自覺の近接にして、畢竟自主自立の觀念の進

渉なり。是時に當りて羅馬教會の如きもの、依然として政教二界の上に其絕對主上の權威を行はむと擬す、豈夫れ得べけむや。宗教革命は是氣運の高潮に乗じ、宗教界の内部より其人生に對する從來の根本的誤解を打破したるものなり。

羅馬教會と
ビザンツ帝國

想ふに人文史上に於ける職能に於て、羅馬教會は猶ほビザンツ帝國の如きか。ビザンツ帝國が、歐洲西部の諸國の混亂紛争して未だ國家の定形を成さざりし間、遠く東方に邦して靜に古代人文を保存せしが如く、羅馬教會も亦西北諸國の國家的軀制の未だ完備せざりし間、其教權の維持によりて諸々異民族の間に精神的一致を結成し、其分裂支吾を制限し、以て同一人文の潮流に浴せしめ、後年其協同的進歩の道に就くの準備を爲さしめたり。又法律の智識は教會の手によりて一般人民の間に傳播せられき。即ち羅馬教會は其宗法に於て羅馬民法の大半を包容し、殊に宗教裁判によりて廣く人民の耳目に達し、當代の普通思想の中に流入するを得き。更に又貴族的僧正の監督にかゝる裁判所の判決によりて間接に人民の知識となれり。而して其重要なる結果として、是の如き法律思

想の一致結合は間接に又直接に、政治的國家の統一に多少の効力を有せしや又疑ふべからず。之を要するに當代の宗教は或時期までは實に有益なる史上の事實なりき。然れども唯是れ國家の軀制未だ整はず國民自ら自主獨立の生活を營み得ざりし時期に於て有益なりしのみ。國家發達の事實を裏視し、妨害し之に衝突しても尙ほ且其舊時の權力を維持せんとするに及びて、宗教は茲に社會百弊の源となり、遂に自ら内部の破裂を招致せざるを得ざりき。是れ實に自然の勢なりとす。

中世紀の哲
學。

然れども羅馬教會は中世人文の中心勢力なり。故に哲學、文學、美術等一として其影響を受けざる者無し。

中世紀の歐洲哲學は、一言は基督教の哲學なり。真理其物によりは、寧ろ基督教に忠なる者なり。事實に對して公平無私なる客觀的考察を施すに非ずして、初より基督教の教義を神聖にして犯す可らざるの眞理なりと立し、而して其教義の維持及び傳播の爲に理義を傳會するものに外ならず。故に換言すれば中世

希臘以來の哲學思想の變遷

紀の歐洲哲學は概して僧侶の哲學なり。今其由來を尋ねるに、吾人が先に述べし如く、希臘哲學の初めは専ら客觀世界の攻究を事とし、宇宙の成立變遷を説明するを旨とせりき。然れども、龍辨學派以降、哲學の研究は漸く主觀的となり、外界の思索を後にして、人生實際の問題を先にせり。是傾向は「ストア」「エピクテール」諸派に到りて其極端に達し、哲學上の問題は殆ど人生の價值問題 (axiologisches Problem) を意味するものとなれりき。是に於てか主觀及び客觀の兩世界は、全く隔離せられ、精神と自然との間に劇然たる鴻溝の越ゆべからざるを見るに到りぬ。何となれば當時の哲學者は、人生の幸福を以て偏に獨善克己に存せりとなし、其の内外兩界の調和の上に存すべきことを思はず。彼等は永遠なる真理の存在を認めざるに非ずと雖も、それは超絶彼岸の世界にあり。人力の得て關與する所に非ずと信ぜしなり。是に於てか不幸なる人生てふ感情は、癒すべからざる無効の渴仰と共に、油然として一般人心の中に起り、茲に主觀と客觀、内界と外界、精神と自然との融合一致を冀望するに到れり。希臘哲學の後殿とも見るべき、新「プラトーン」派は、プラトーン氏の

希臘哲學と基督教

基督教哲學の起原

「パトリステック」學派

理想的實體と、猶太教の「メシアー」の思想とを結合して、新に分出論を唱へ、理想界と現實界との調和を企てたり。然れども未だ以て是渴仰を満たすに足らざりき。恰も好し基督教は是飲陥を補充せむが爲に興起したり。「人は神となり得べし」。是の基督教の根本理想は、やがて當代人心の渴仰に對する天國の福音なりき。厭世獨善の生活を推奨せる從來の哲學に慊焉たらざりし思想界は、麋鹿の溪水に就くが如く、翕然として之に赴けり。是に於てか基督教の哲學起る。基督教の哲學の主要なるものは、十一世紀に起りたる「スコラ」學派となす。是より先き三世紀より八世紀の頃に至るまで、教會長老の唱道したる、所謂「パトリステック」(Patristic)と名くる學派ありきと雖も、特に言ふに足らず。其目的は偏に依信によりて基督教以外の宗教と、基督教とを調和するにあり。クレメンヌス (Clemens, 一一一死) オリゲネチウス (Origenes, 一八五——二五四) 及び「神の都府」の著者を以て名高きアウグスティヌス (Augustinus, 三五四——四三〇) の諸氏を是派の重なる學者となす。

「スコラ」學派

「スコラ」學派に至りて初めて儼然たる哲學組織を見る。是學派の目的は、一言すれば、哲學的考察によりて、基督教の教義を説明するに在り。換言すれば、依信と知識との調和に在り。以爲らく一切基督教會の教義は、素神の啓示に係る。神聖にして吾人の批議を容るべきに非ず。唯吾人の務むべきは、吾人の理性を以て如何に是教義を解釋すべきかにありと。是學派の始祖カンタベリーCanterburyの僧正アンセルム氏Anselm 1033—1109が有名なる『吾は知識の爲に信す』(Credo ut intelligam)の一言は、即ち是學派の套語とし見るを得べし。アリストテレーシAristoteles氏の論理學が中世哲學者によりて特に研究せられしも、亦是學風に因る。蓋しア氏の論理學は、思想活動の形式を研究する演繹法論理學なり。演繹法論理學の目的は、豫め真理として假設せられたる二個の前提より、如何の結論か推渡せられ得べきかを考究するにあり。前提其物の眞偽は毫も其問ふ所に非ず。是種の論理學は、『スコラ』學派の哲學研究法として最も恰當なるべき者なり。何となれば、是學派は豫め基督教會の教義を動かすべからざる眞理と立し、而して是眞理より如何の正當なる結論の推渡せらるべきかを考察するに在りければなり。

アリストテレーシ氏の形式論理學と中世哲學との關係

哲學と宗教を分離する第一歩としての「スコラ」學派

哲學と宗教との關係は猶國の家と教會との如し

り。
是の如く「スコラ」學派の目的は、宗教に合理的説明を附與するにあり。是れ表面より見れば宗教々義に確乎たる根據を與ふるが如しと雖も、裏面より見れば哲學と宗教との分離の第一歩なりと謂ふべし。蓋し理性の自由は人心内面の必至なり。永く教會外部の權力若くは古來の傳説によりて拘束せらるべきものに非ず。「スコラ」學派が一面に於て理性の自由を容れ、而して他面に於て教義の神聖を以て之を束縛せむと要す。是れ即ち破裂の因縁を構成したるもの外ならず。審に遺般の消息を尋ねれば、吾人は宗教と國家との消長を規定せる同一の原因は、亦宗教と哲學との關係に於ても活動しつつあるを發見すべし。そを如何にと言ふに、蓋し「パトリステック」學派Patristicにありては、宗教の權力は無限にして、哲學の權力は皆無なり。信πιστιςは即是れ知γνωσιςなり、とは、是學派の根本的思想なり。是時に當りて哲學は毫も其思索の自由を有せず、全然己を虚くし宗教に向ひて絶對的服従を爲さるるかべらず。是宗教と國家の關係に於ける羅馬教會全盛の時代に比すべきなり。法王グレゴリオ七世がハインリッヒ四世をして、

三晝夜間雪中に立たしめたるは是頃なり。「スコラ」學派興りて、教會の教義は尙ほ昔日の神聖を維持したりと雖も、全く哲學思想を箝束せず、教義を立證する爲めには、若くは之に有害ならざる限りに於ては、其自由の活動を許したり。之れ即ち一步を哲學に譲りたるもの。宗教は茲に往年「パトリステック」學派に見しが如き絶對的權力を失墜せりと謂ふべし。之れ宗教國家の關係に於ける國家の獨立的傾向の勃興に相當す。即ち佛王フロリツフが法王ボニフェース八世の破門令に反抗し、法王をして憤死せしめたる時代に適應す。十六七世紀の交に至り、「スコラ」學派は遂に其の内部より崩解し、哲學は全く宗教の束縛を擺脫して茲に「ペーコン、デカール」諸氏によりて爲されたる近世哲學の生起を見るに至れり。之れ羅馬教會が國家的自覺の發達に刺激せられて其内部より破裂し、所謂宗教革命以後、全く國家の權力に服従せると全く其軌を同ふす。兩々相比照し來れば、國家と哲學とが人文史上同一の大勢、同一の精神に驅られて各同一の方面に發展し來るの情狀は、略明に看取することを得べし。

中世の教育

教育も亦初めは全く僧侶の手によりて爲されたりしが、十一世紀の頃「スコラ」學派の神學漸く擴まりてより、一の大學は初めて巴里府に起れり。其教科は神學、宗法、醫學、及文藝の四に別る。是中文藝は主として文法學、修辭學、及び哲學の三學より成り、算術、幾何、音樂、天文の四科之に附屬す。大學一は巴里府に起りしより、其例に倣ふるもの諸邦に起りき。其尤も有名なるものは、英吉利のオックスフォード、及び以太利のボログナ大學となす。西班牙のサラマンカ以太利のサレルノに在のもの、之に次ぐ。

是の如く大學の教科も主として宗教に關し、一般科學に就て見るべき者尠し、是中ボログナ大學は法律に秀で、サレルノ大學は醫學に名あり。神學及び「スコラ」哲學は巴里を中心とせり。希臘及び希伯來に關する知識、及びプラトーン、アリストテレス諸氏の研究は、十四世紀以前には西歐諸邦に知られざりき。若し夫れ實驗的自然科學に到りては、當時尙未だ呱呱の聲をだに聞かざりき。

歴史に關する著述は乏しからず。然れども一般に言ふ時は單純にして遺漏多し。是等は多く羅旬語に成れる州郡、都府、寺院の記録、もしくは創世紀を以て初

中世の文學。

まれる年代記なり。十二世紀以降、各國々語に成れる稍系統ある史乘を見る。

中世紀初代の思想界は、神學問題に占斷せられ、苟も文字ある者、翕然として是に赴きしを以て、純文學の製作甚だ少かりき。只各邦民族の傳説に關するものあるのみ。而して是等の傳説的詩歌は、概ね其根源を古代日耳曼民族の傳説、神話、及び歴史に採り、而して各國の國性民情に隨て之を鑄鑄したるものに係る。古代の神話を巧に史上の事實と抱合し、敬神、冒險、戀愛の情事を貼綴したる技工は、永く後世の珍となるべき者多し。是等傳説的若くは民族的詩歌の重なるものは、獨逸にありては『ニーベルンゲン』歌、『グールドルン』歌、及び『ホルグナラント』歌、英吉利にありては『アーサー』王の諸敘事詩、西班牙にありては『キッド』等なり。殊に『キッド』は『ローマンス』語に書かれたる傳奇中の最も古きものなり。其他、教會寺院に關する譚詩は數ふる違あらず。劇詩も亦中世紀の末葉に至りて漸く世に出でき。

是の如く中世紀の詩歌は一にして足らずと雖も、多くは古代口碑に襲傳せるも

傳説的詩歌。

のにあらざれば、『ニーベルンゲン』歌に於て見る如く、幾多の古歌を輯めて之を敘事詩に陶化したるもの。其作者の如きは素より知るべからず。文學史家の所謂民族的詩歌なるものに屬す。然れども、後年に到りて人工的詩歌漸く諸邦に表はれたり。其尤も長大にして且顯著なるものをダンテ氏(Dante, 一二六五—一三二一)の神曲とす。

ダンテ氏が一篇の神曲は、嘗り中世紀の産出せる最大最高の文學なるのみならず、或意味に於ては中世紀の精神的生活を顯はして最も明瞭を極めたる者なり。中世紀は、其末路に臨み、此一大詩人の口より恰も七百年間の懺悔を聞きたるの趣あり。左に少しく是を説かむ。

ダンテ氏の神曲。其觀念。

神曲は地獄界、淨罪界、及び天國の三部より成る。要は意を自己の幻影に托して彼岸の他界を描くにあり。初めの二部に於ては、詩人ギリウッス氏を導者とし、最後の一部に於てはダンテが幼年よりの戀人にして夭折したる佳人ベアトリツェを先達とす。一篇現示する所の觀念は、罪惡の擺脫と天國の獲得と

にあり。人間は上帝の意志に随ひて圓滿の狀態に到着せざるべからず。而して彼が上帝及び基督と融合し得る所以の道は、贖罪と淨穢とにあり。然れども人生行路難し。幾多の障害は常に途によりて待つ。煩惱の鐵鎖は彼の脚を纏ひ、罪業の深穽は彼が軀を陥れ、其希望をして幾度びか蹉跎たらしむ。快樂、名譽、貪慾等もろくの獸情は、或は豹となり、或は獅子となり、狼となり、吾人の靈魂を過失、疑惑の深林に誘ひ、永遠の死滅を遂げしめむと務む。是時に當りて吾人を救ふものは獨り上帝の恵と教會の力とあるのみ。然れどもは無上の恵に與らむと欲せば、人は亦無上の苦痛と勞役とを忍はざるべからず。神曲の一篇は這般の觀念を超越の他界に體現し、讀者をして神越意往、恍惚として歸るを忘れしむ。

ダンテ氏が他の詩歌に於けるが如く、是一篇も亦常に理想的戀愛の高調に伴はる。其事を叙し、情を抒ぶるに當りてや、巧に古代及び封建期の風尚を貼観す。殊に全篇を通じて、讀者が豊富なる古代の智識を預想せるを以て是を見れば、當時一般社會の教育も亦略、想見するに足る。

中世道徳史としての神曲。

神曲は又一部の中世道徳史を以て見るとを得べし。ダンテ氏は當代の虛偽、暴力、浮靡を抉摘して毫も忌憚する所なく、而して去て遙に上世の醇風美俗を讚美せり。フロレンスは曾て質朴正義の地として知られたりき。然れども今や自己の不義の露はれむことを恐れて婦人の懺悔を禁むるの僧侶あり(二、二三、百)。曾つて市民の血液は身懸輿童に至るまで清かりき。而かも今や異民族の混合と共に身心共に墮落の深淵に陥れり(三、十六、六七)乞食の子孫は今や富豪となれり。彼等は弱き者には蛇の如く瘴惡に、財囊の前には蜘蛛の如く平伏す(三、十六、一一五)。ボログナの町は拜金奴に充ち、ルツカの腐敗は名狀すべからず(二、十六、二一)。佛蘭西とエチオピアは貨幣の鑄造を以て惱まされ(三、十九、一切歐洲の都邑は毒と嫉みとに充ち(二、一四、四三)あらゆる基督教國の罪毒は殆ど天に滔らむとす。是の如きはダンテ氏か眼底に映じたる十三四世紀の歐羅巴なりき。亦以て當代生活の一斑を伺ふに足る。

中世紀の美術

中世紀の美術も亦主として宗教によりて規定せらる。即ち當代の最も有

にあり。人間は上帝の意志に随ひて圓滿の状態に到着せざるべからず。而して彼が上帝及び基督と融合し得る所以の道は、贖罪と淨穢とにあり。然れども人生行路難し。幾多の障害は常に途によりて待つ。煩惱の鐵鎖は彼の脚を纏ひ、罪業の深穿は彼が軀を陥れ、其希望をして幾度かか陸陀たらしむ。快樂、名譽、貪慾等もろくの獸情は、或は豹となり、或は獅子となり、狼となり、吾人の靈魂を過失、疑惑の深林に誘ひ、永遠の死滅を遂げしめむと務む。是時に當りて吾人を救ふものは獨り上帝の恵と教會の力とあるのみ。然れどもは無上の恵に與らむと欲せば、人は亦無上の苦痛と勞役とを忍はざるべからず。神曲の一篇は這般の觀念を超越の他界に體現し、讀者をして神越意往、恍惚として歸るを忘れしむ。

ダンテ氏が他の詩歌に於けるが如く、是一篇も亦常に理想的戀愛の高調に伴はる。其事を愈し、情を抒ぶるに當りてや、巧に古代及び封建期の風尚を貼襯す。殊に全篇を通じて、讀者が豊富なる古代の智識を預想せるを以て是を見れば、當時一般社會の教育も亦略、想見するに足る。

中世道徳史としての神曲。

神曲は又一部の中世道徳史を以て見るとを得べし。ダンテ氏は當代の虚偽、暴力、浮靡を抉摘して毫も忌憚する所なく、而して去て遙に上世の醇風、美俗を讚美せり。フロレンスは曾て質朴正義の地として知られたりき。然れども今や自己の不義の露はれむことを恐れて婦人の懺悔を禁むるの僧侶あり(二、二三、百)。曾つて市民の血液は息縁輿童に至るまで清かりき。而かも今や異民族の混合と共に身心共に隨落の深淵に陥れり(三、十六、六七)を食の子孫は今や富豪となれり。彼等は弱き者には蛇の如く、瘴惡に、財囊の前には蜘蛛の如く平伏す(三、十六、一一五)。ポロンナの町は拜金奴に充ち、ルッカの腐敗は名狀すべからず(一、十六、二二)。佛蘭西とエチオピアは貨幣の鑄造を以て惱まされ(三、十九)、一切歐洲の都邑は毒と嫉みに充ち(二、一四、四三)、あらゆる基督教國の罪毒は殆ど天に滔らむとす。是の如きはダンテ氏か眼底に映じたる十三四世紀の歐羅巴なりき。亦以て當代生活の一斑を伺ふに足る。

中世紀の美術

中世紀の美術も亦主として宗教によりて規定せらる。即ち當代の最も有

建築と宗教

力なる二宗教即ち基督教と回教との差別より、美術は截然たる二種の特色を有しき。又諸種の美術中建築のみ重要な位置を占め、彫刻繪畫の如きは其内外を裝飾する附屬物に過ぎず。是亦宗教の勢力にして是時代の一特色なり。當時の建築は、殆ど全く美術其物の爲よりは、殆ど全く宗教の方便に屬し、むしろ東洋古代の肥號的堂塔に比すべきものなりき。其様式は全く宗教的感情の發表にして、『ゴチック』塔の矗立千丈、亭々として一指直に蒼天を摩するものは、永遠絶の彼岸に對する中世紀的渴仰の好記號たり。

寺院の建築は、カル、大帝の時に創まる。其の様式の主なるものは、『ローマニック』及び『ゴチック』なり。前者は古代羅馬を學び、後者は南佛蘭西より來る。彫刻と繪畫とは全くビザンツ風に靡けり。彫刻は久しく振はざりしが、十三世紀の初め頃より漸く其復興を見る。ニコロ・ピサノ氏(Niccolo Pisano)及び其子ギオワニニ氏(Giovanni)與て最も力あり。繪畫は曠世の巨匠ギオワニニ、シマンノ氏(Giovanni Cimabue)によりて美術史上に萬丈の光焰を放ちき。抑、羅馬帝國の末路、社會の軀制土崩するや、美術の嗜好は墮落し、其法則は破壊せら

繪畫

中世美術の様式。

れ、又往日の醇粹を見ず。全體の審美的調和に對しては全く其眼瞳を失へり。多くは彼の一偏を探り、此の一劃を削り、前裁補綴して、成す所法なく、趣なく、宛然寄木細工の觀ありき。柱、及裝飾の種々の様式は、見るに隨て雜然として混淆せらる。夫の五柱式『トスカニア』、『ドーリア』、『イオニア』、『コリント』及び羅馬、即結合式)の發展せるは文藝復興期にあり。中世紀の初期にありては、殆ど獨立の様式の何等新機軸を出せるもの無し。民族大移動の時代にありて、古代美術は屢にビザンツ城中に屏息して其餘命を保ちたりき。十一世紀に至りて、獨乙に起りたる建築及び彫刻は、新民族の美術的製作の嚆矢とす。

今中世美術の様式を略言せむに、コンスタンチヌス以來、羅馬古代美術の後を承けたる基督教的美術は二種の様式に分れたり。其一是『バシリック』式、若くは羅甸(又は『ロマニック』式)にして、殆ど古代羅馬の建築の奴隸的模倣に過ぎず。其特色は圓窓の完成にあり。其一是ビザンツ式、若くは新希臘式と稱せらる。之れ遙にコンスタンチノポリスに遷されたる古代羅馬式が、東方諸邦の影響を受けて一種特異の形式を成したる者、其特色は玉葱狀の圓蓋と、『ゴチック』的四面塔との

結合にあり。
 是外に亞刺比亞式あり。是れ先の二者とは全然其趣を異にし、他に比すべきものを見ず。其特色は無数の細長柱、馬蹄形の窓、圓蓋等にあり。
 以上の三式を融化したる一種の様式は「チチリア」を初めとして普く中世の末期に行はる。所謂「ノルマン」式と稱するものは是なり。又殊に注意すべきものは所謂「ゴチック」式に見る所の尖頭圓窓式、もしくは古代獨乙式なり。之れ東洋の勢力を離れて日耳曼民族が創始したる唯一なる美術的産物なりと云ふも不可無きが如し。

彫刻。

彫刻は中世にありては特に言ふに足らず。唯其末葉に到りて、獨逸に起りたるものは古代の典型に泥まず。直に自然を學びて而かも優雅なる理想的潤色を遺却せざるところ、永く後代の襲珍に値す。蓋し三世紀より十三世紀に至る一千年間は、塑像極衰の時代にして、十三世紀より十七世紀に至る四世紀は其再興期と稱せらる。然れども之を希臘の古代に比するに、遂に遙に遜色あるを免れざるものゝ如し。

繪畫も亦中世の初期にありては、零丁として見るに足らず。希臘教會の傳承せるものは、純然たる類型的畫像のみ。自然の快活なる研究は全く失念せられ、偏に古代美術の殘典遺型に依傍して、模倣是れ務めたり。是を以て美術は單に技巧の上に留まれるの觀あり。壁畫は久しく中絶せしが、十世紀以來再興せられたり。

シマプー氏。

然れども歐洲繪畫の局面を一轉したるものは、シマプー氏及び其弟子ギオット氏(Giotto)を推さざるべからず。實にシマプー氏の死後三世紀間、以太利美術を彩りたる繪畫の花は、歐羅巴美術史上最も光榮ある時期の隨一なり。其變遷の階段、流派の幹枝、及び大匠巨工の名稱は茲に述ぶるの追なしと雖も、マサチオ(Masaccio)、ヒラン、フィリッポ(Enza, Filippo)、シニョレリ(Signorelli)、ギオヴァンニ・ベリニ(Giovanni Bellini)等諸氏の大名は、十六世紀に於けるラフ、エロ及びミケランジェロ二氏のみ先驅として、永く記憶せらるべき名なりとす。西班牙の繪畫は其國民の混亂を反映して趣味の統一を欠けり。後フロレンス派の以太利美術は、殊にルーベンの勢力によりて少からざる影響を及ぼしき。佛蘭西には九世紀の初め已

各國繪畫の特色。

油畫の發明。

に繪畫の流行ありき。十四世紀に至りて羅馬の勢力はフネグノン府の媒介によりて、佛蘭西に入り、加ふるにフランシス一世の以太利畫家を招聘するあり。是に於てヘンリー四世の時に至りて國民的特質を具へたる様式起り、以太利の擬似を脱して茲に佛蘭西派の一流を樹立せり。獨乙にありては、肖像畫はカルル大帝の時より行はれたり。然ども壁畫は建築の様式是に適せざるが爲に、以太利に於ける如く盛に行はれず。裝飾的畫樣は頗る發達せり。油畫はチーアランド人に學ひて十四世紀の末葉より漸く行はる。總じて獨乙美術の固有の特色は、寧ろ理想に走り、閑雅優美の表象に務む。其寫す所の人物は、溫柔無我、能く敬虔謙讓の意を現はせり。チーアランドの繪畫は概して寫實に長ぜりと雖も、空想に乏しく、隨て高尚なる韻致を欠く。歴史上尤も注意すべきはヨハン・フン・エック氏 (Johann van Eyck) によりて爲されたる油畫の發明なり。是新畫法世に出で、より、感情の深刻物色の逼真又往日の比に非ざるに到れり。音樂は法王グレゴリオ七世以後、教會の儀式に使用せられき。十一世紀にギド・アレチノ氏 (Guido Aretno, 九九五—) 出でて一定の譜式を作り、十世紀にドンスタ

音樂。

ン僧正 (Archishop Dunstan) は複聲歌の法を創めき。又寺院の儀禮よりして後世演劇の濫觴たる神秘劇生じたり。又宗教と關係せざる音樂には「ミンチ」歌人、及び「トルバドール」あり。主として南部佛蘭西に行はれき。之を要するに、中世は古代と近世との間に於ける過渡時代なり、變遷時代なり、建築時代なり。政治に、宗教に、哲學に、文學に、其他一切社會の現象は、何れも時とは流轉して一も後代の丕基を爲したるもの無し。人文史家ハナツゲル氏は是時代の特質を示めして「何物もあらざる凡ての物のなる時代」(eine unferhige Welt, in der nichts ist, alles wird) となせり。蓋し知言と謂ふべし。

封建制度。

然るに茲に中世史特有の產物として指摘すべきものあり。何ぞや封建制度是なり。惟ふに家長を以て國王と仰きたる上古草創の時代より、國家社會の組織殆ど完備せるに庶き近世に至るまで、政治上の發達は連綿として甚だしき破綻を生ぜず。政治上の變遷は斬新急劇の理論に應じて輒ち興るものに非ず。社會狀態

封建制度の由

封建制度は市民的國家と國民的國家との中間にあり

の進歩に伴ふて、徐々に發達し來れるなり。中世の封建制度と雖も偶然卒爾にして起りしものに非ず。

上古にありては、血族の關係は單純明瞭なりしならむ。然れども星移り、世進むに隨ひ、人口の増殖と共に宗支本末の差別漸く曖昧となり。幾多の小家族は遂に一大社會の中に埋了せられ、其主權は家長的君主より移りて社會全體の上に歸するに至る。帝王の世襲は尙ほ家長制度の餘勢なりと雖も、是れはた其公共的性質に於て古の家長の專制私斷と同じからざるものあり。降て希臘羅馬の市的國家となるに及びて、所謂市民は、血族てふ思想に代り、國家は社會中心力となり。公吏の人民に臨むや、自己の名を以てせず、國家の名に於てせり。羅馬帝國は即ち是れ羅馬市の帝國にして、之を司配するものは羅馬市民に外ならざりき。

市的國家は古代政治界の最後の統一的形式なり。羅馬帝國の末路、日耳曼民族の勃興と共に、歐洲の國家は茲に其面目を一新し、所謂封建制度なるもの起る。封建制度は實に中世の一大現象にして、古代の市的國家と、近世の國民的國家と

十字軍以後封建制度の理由

の間に立ちて、其推移の媒介をなせり。初め「チニートン」民族の羅馬帝國を侵掠するや、國民は軍旅を成して移動し、軍旅は即ち國家軍旅の元帥は即ち國王たりき。是國王と部下とは、其征服せる土地を分領し、所有者の世襲を認めたり。所謂私領と云ふものは是なり。又國王及び大なる部下が、自己の私領の幾分を割きて之を其從者に與へ、以て臣下の禮を取り、軍に従ふべきを誓はしめたり。是を食邑と云ふ。十一世紀の頃に及びて、歐洲諸國は殆ど全部を擧げて是制度を採用したり。是制度に於ける君臣の關係は極めて嚴格なるものなりき。君に仕へて取て違はず。義に臨みて死を辭せず。殊に戰陣に従ひて其君主を保護するは、最も重大なる義務とする所なり。

是制度は十字軍以後漸く衰へたり。是れ主として國家中央集權の結果として、從來國王と人民との間に立ちて其恣睢を極めたる封建貴族は、頓に其勢力を拘束せられたるに因る。其他市府の發達の貴族の壓制を防ぎたる、又十字軍の結果として貴族中に血統絶えたるもの、國王に併有せられたる、又火藥の發明が封建武士の特長なる城堡甲冑の效用を減殺したる、何れも封建制度の衰頹を助

騎士氣質。

成するに於て多少の力ありき。封建制度は社會秩序の紊亂の中に、詩人小説家の題目となりて、永く後世をして羨仰嘆美せしむる一種特異の現象を出したり。所謂騎士氣質是なり。素是れ直往猛進、名を重じ命を輕ざる『チュートン』民族の氣風を經とし、之に是民族の殊性と稱すべき婦人を敬重愛撫するの慣習を緯とし、更に基督教的博愛慈善の精神を以て是を潤色したるもの、僞儒濶達にして柔情硬骨並び立つの間、一種の氣韻擲すべきものあり。當代の武士は是氣質の脩養を以て教育の大事となし、諸侯伯の城寨は實に騎士教育の學校たりき。又士氣を鼓舞せむが爲に試合盛行はれ、勝者は貴女の手より其賞品を受くを以て無上の光榮とせり。又名譽を重ざるの餘り、死を賭して相争ふこと罕ならず。後世決闘の風是より出づ。然れども封建及び騎士制度の弊害亦一にして足らず。十字軍以降、是制度の衰運に向ひし頃殊に甚し。然れども近世國家の中央集權と共に、漸く其の跡を絶つに到れり。

十字軍。

中世紀の末葉に於て人文史上最も大なる勢力を有するものを十字軍とす。永く羅馬はた歐羅巴的勢力と、モハムメッドはた亞細亞的勢力との間に屏息したる半死のヒザンツ帝國は、是強大なる宗教的國民運動の大波瀾の中に解散せられたり。東洋の歐洲人にとりて、新文明及び新智識は、歐羅巴の沈靜なる思想界を刺撃し、其人文の進歩に新動機を予へたり。殊に注意すべきは新宗派の勃興なりとす。就中尤も興味あるは僧侶にして同時に武士なるものの宗派を組織せしことなり。即ちアマルフ、ポタン人は一千四十八年、『ヨハンニタル』派を起し、エルザレムの没落後はプロレマイスに住し、後キーヘル、ロードス諸島に移り、輒近に至るまでマルタ島に其餘裔を留めたり。マルターゼル騎士と稱するもの即ち是れなり。一千百十八年ユーゴ、ゴットフリドの二僧は新に『テムプレ』の一派を立てき。是派の經歷は、其初め燦然たる光榮より慘憺たる末路にいたるまで、驚心駭目のこと多し。後世傳奇家の好題目となれり。是れ等は何れも十字軍の結果にして、『サラセン』民族に對する基督教國の一面の反抗なり。

『サラセン』民族は、中世紀の後半に於ける一大勢力にして、歐洲人文に最も強烈なる刺撃を與へたり。乞ふ章を換て其歴史的關係の顛末を述べむ。

第七章 亞刺比亞と十字軍

『セム』人種の運命。——モハムメッド氏以前に於ける亞刺比亞。——モハムメッド氏以前に於ける『コーラン』の頁、劍。——基督教に對する彼の態度。——回々教の傳播。——其二原因。——モハムメッド氏の號令。——當代の基督教國の狀態。——基督教の腐敗。——亞刺比亞民族の戰勝。——基督教國の大危機。——モアアチールの戰爭。——東方諸邦に於ける亞刺比亞人の戰勝。——亞刺比亞人と科學。——西班牙の文物。——歐洲文明に寄與せられたる亞刺比亞文明。——亞刺比亞の文學美術。——回々教と建築。——商業の獎勵と多妻主義。——『カリフ』の善政。——亞刺比亞民族の衰弱。——『セルジュニーク』族。——十字軍。——其顛末。——十字軍の歐洲文明に及ぼしたる影響。——十字軍と文藝科學。——十字軍と基督教。——十字軍と政治社會。——結論。——三大一神教の比較。

アッシニウリヤの古『セム』民族の帝國が一度び波斯の『アールヤ』帝國に併せられ、

『セム』人種の運命。

モハムメッド氏以前に於ける亞刺比亞の人文。

二度びアレキサンドロスに征せられ、三度び羅馬及びビザンツの司配の下に服従せしより、『セム』人種は久しく歴史上劣等の民族として常に他邦の羈絆を甘受せりき。然れどもあらゆる事情の下にありて、尙其人種的特性を維持したる彼等が、宗教的熱誠によりて世界に雄飛すべき時代は終に來りぬ。是大任を負ひて驟起したる者は亞刺比亞民族(もしくは『サラセン』民族)となす。

『チニートン』『スラヴ』及び『フン』の諸民族に次で、世界歴史の舞臺に上りたるものを亞刺比亞人となす。抑々亞刺比亞の地たるや、古より未だ曾て他邦の干渉を受けず。アレキサンドロス及びプトレミイの諸帝王を初めとし、ボムヘーウス、アウクスツスの諸戰勝王も、未だ是大廣原に盈尺の領地を有せず。獨りトラス、ヤヌス帝は其脚地を茲に有せしも、僅にペトライア(Petrae)の一部を出でず。七世紀の亞刺比亞人は、殆ど全く自然民族に等しく、何等人文の注意すべき無かりき。幾多の部落あれども、之を統率する中央政府なく、人民は多く拜星教を信し、其歴史は神話のみ。唯猶太教及び『バイブル』は夙に輸入せられ、基督教の中にて

は、アリウス、チストリウス氏等の諸派、即ち基督正教の所謂外道なるもの、難を避けて茲に其教を傳へたり。されば是派の基督教が回々教の興起及び傳播に力ありしことは、容易に推測し得べし。

是の如き野蠻の狀態にある民族をして、中世々界史の一大勢力とならめたるものは、實に回々教の教祖モハムメツド氏なりとす。

モハムメツド

モハムメツド氏は羅馬帝ユスチニアノの死後四年、即ち紀元五百六十九年、亞刺比亞のメツカ府に生る。其國民をして殞星偶像の禮拜より獨一無神の讚美に赴かしめ、古來各國に度外視せられたる蠻民より、一躍して歐洲文化の中心を震盪する所の大勢力となり、今日尙ほ其餘威をコンスタンチノポリス城頭の半月旗に留めしめたるもの、實に是モハムメツド氏なりき。彼が宣傳したる單純なる一神教は、神學の空論に倦厭せる基督教國民を風靡し、其精神的領土の大半を壟斷したりき。耶蘇基督の生地エルザレムも亦永く基督教徒の有にあらざり。西部歐羅巴は辛うじて其羈絆を免るゝを得き。

其教義。

「ムハンマドの教義」

モハムメツド氏の教は實に單純なり。彼れ宣傳して曰く、「世には唯一の神あるのみ、而してモハムメツドは其預言者なり」と。彼の教は唯是のみ。而して彼は是を宣傳するに劍を以てせり。其教を奉ぜよ、然らざれば屬國となりて年貢を納めよ。然らざれば只劍あるのみ。彼れの説法は唯是のみ。彼は獨一無神の認識の中に、永遠の眞理を確信したるの外、何等煩瑣の哲學を談せず。翻て實行によりて社會の改善を目的とせり。彼は世道の頹廢、人情の澆淳に臨みて、却て博愛慈善を奨め、禁酒、斷食、祈禱によりて最も嚴格なる修養を勵みたり。世は宗門名義の争に厭きぬ。彼は是に教へて曰く、有徳の人は救はれざること無し、各門の争に拘泥するは禍なる哉と。彼は是の如くにして其教を宣傳せり。

基督教に對する彼の態度。

基督教に對する彼の態度は如何なりしか。彼は初めは故らに異を樹つることを避けたりしが、其教の漸く擴張すると共に、衝突は遂は免るべからず。彼の第一基督教に反對した其點は、其三位一體説にありしが如し。彼は實に獨一無二の神あるを信じたり。三位は彼に於て三個の神のみ。其一體たるの理に到りては彼はアリウス氏と共に解し能はざりしなり。彼れは又是理によりて聖母

回々教の傳

マリアの崇拜を拒否し、猶太人がエツラを神の子なりとするを痛罵せり。『コ
 ラン』經中、是種の非難を到る處に見る。曰く『實にマリアの子なる耶蘇基督は神
 の使徒なり』。曰く『故に神及び其使徒に信ぜよ。然れども世に三神ありと言
 ふ勿れ。謹で是を思ふ勿れ。是の如くせば爾等に益あらむ。神は唯一の神の
 み。神豈でか一子を有し得べき』。又曰く『最後の日に到らば、神は耶蘇に問ひ給
 はむ。オ、マリアの子耶蘇よ、爾は曾て人に向て「吾れと吾母とは神の外の二神
 なり」と訓へしことありやと。其時耶蘇は必ず答へむ「あゝ神よ、吾れ豈でか是の
 如きことを言ひ得べき』か』。彼の信仰は専ら直截簡明を旨とし、務めて晦澁難
 解の理義を避けたり。是れ恰も哲學神學の空論争に失望せる當代人心の渴仰
 に適ひき。

遮莫回々教は抑々如何にして歴史上、那の如き大勢力を有するを得たりしか。
 基督教は其聖母の所在なるパレスチナより追はれ、三位一體説の出生地なる埃
 及より追はれ、最初の教會の建設せられたりし小亞細亞より追はれ、歐洲傳道の
 媒介者たりしカルタゴより追はれ、永く地中海の東南岸に其根據を失ひたり。

之れ政治上の権力の擴張に伴ふ。抑々又是政治的勢力の大擴張には如何の源
 因ありしか。

『コ、イ、ラン』が年貢か、然らざれば、劍』。是れ亞刺比亞人が布教の方法なりき。彼等
 は是方法によりて一世紀以内にて當代世界の大半を征服したり。西は亞弗
 利加、西班牙、南部佛蘭西、及び地中海の諸島。東は波斯より信度河に到るまで。
 北は小亞細亞以外の亞細亞に在る羅馬領等、一切回々教の軍陣に降れり。猶ほ
 『ゴート』『フンダル』諸族が數々西羅馬を危うしたるが如く、彼等は幾度かコンス
 タンチノポリスの城門を叩きたりき。一百年の間、基督教は亞刺比亞人の名に
 戦慄せり。

其二原因。

今其原因を尋ねるに、回々教は其傳播に内外二重の利益を有したり。即ち之を
 内にしては、亞刺比亞人の戰勝的國民の資格を備へしこと。及び之を、外にして
 は基督教國の社會的状態の腐敗、是なり。

モハムメツド氏によりて覺醒せられたる亞刺比亞人は、種々の點に於て戰勝的
 國民の資格を具へたり。其要領を擧ぐれば、

モハムメッド
氏の號令。

(一) 其宗教殊に其獨一眞神の教義を確信せること。
 (二) 其統一者にモハムメッド、アムル、シヤレツド、オマール諸氏の如き熱誠堪
 能の材ありしこと。
 (三) 國民的統一の觀念の新に勃興せしこと。
 (四) 現在世及び未來世の應報を望みしこと。
 (五) 生死に關して宿命説を信ぜしこと。

等なるべし。『コーラン』が年貢か、將た劍か。是一言の中には、實に亞刺比亞人をして世界の戰勝者たらしむるに足る者ありしなり。モハムメッド氏は其部下に教へて曰く、我同胞にして、戰に臨まずして、其籠を掘るものは禍なる哉。爾は果して死を避け得ると信ずるや。何にぞ生死の宿命已に定まれるを思はざる。爾は戰鬪の熱火を恐るゝか、地獄の更に尙も熱きを知らざるや。爾は逃げむと欲するか。見ずや天國は爾の前にあり、地獄の焔は後にあることをぞ。亞刺比亞人は是の如き精神に鼓舞せられ、其『コーラン』が年貢か、將た劍か』を叫びしなり。柔儒に流れたる基督教國民は、如何にして是の如き國民に對抗することを得べ

當代の基督教
國の狀態。

基督教の腐
敗。

きぞ。

爾て基督教國當時の社會を見れば、回々教の擴張の實に偶然に非ざるを見
 る。名は基督教國たり。然れども彼等の間に宗教は已に其命を失ひ、残れるも
 のは神學哲學の神秘難解なる爭論のみ。希臘語の精核を以てして尙ほ其理を
 明にしがたきもの、豈でか大多數の文字無き人民に解し得らるべき。而かも彼
 等は是解すべからざる教義の中に安立救濟の信仰を發見し得べしと教へらる。
 彼等はた之を奈何にし得るものぞ。彼等は僧侶等の製造したる教義を遵奉す
 るに非ざれば、天國に生るゝ能はずと教へらる。其個人的道徳の脩磨の如きは、
 全く宗教の事に非ざるを見たり。羅馬、コンスタンチノポリス及びアンキサン
 ドリア教會の僧正は、あらゆる不正卑劣の手段を用ゐて教權の上下を争へり。
 宗教は今や精神の司配者にあらざりて、政權争奪の俗務と何の擇ぶ所無きに至
 りぬ。僧侶は其宗教上の位置と職能とを利用して私慾を求るに日も亦足らず。
 而かも義人の苦み、良心の自由に對しては一も言ふ所無かりき。苟も一個の宗教

亞刺比亞民族の戦勝。

たるもの、是の如き状態にありて豈でか能く其依信を維持し得べき。ナザレの耶蘇氏か其教を傳へけむ時勢は正に是の如くなりき。而して今や曾て安立救濟を予へむが爲に起りたる基督教の社會は更に却て他に向て其安立救濟を仰ぐべき勢を示めしぬ。モハムメツド氏の劍は是虚隙を衝き、轟然として基督教國に闖入せりき。幾多神學者の紛争の間に『サラセン』民族が鐵と血とを以て宣傳したる『世界唯一神あるのみ』の聲は、實に空谷の甕音に等しかりき。

勢既に是の如し。モハムメツド氏死して境土未だ乾からざるに、回々教徒は早くも其故郷の境域を超て西の方埃及に入り、暫時にしてアレキサンヅリアを陥れ、亞弗利加大陸より全く基督教を放逐し、長驅してツナラルタルの海峡より西班牙に入りぬ。當時西班牙半島を司配したる『ゴート』族は、基督正教を奉じ、外見上儼然たる國家を爲したり。然れども、其實當時日耳曼民族の一部に行はれたる王位の撰擧の爲に、貴族間に激烈なる競争を惹起し、國民は實際に於て元首を有せず。政令常に統一を欠けり。久しく壓制に苦みたる下層人民、及び猶太人は歡呼して『サラセン』民族を逢迎し、目するに彼等の救濟者を以てせり。殊に平

基督教國の一大危機とポアチールの戦争。

和日久しきが爲に、軍備は弛怠し、城寨は荒廢し、武士は概ね僧侶の權勢の下に屏息せり。されば亞刺比亞民族は是弱點に乗じて破竹の勢を以て侵入し、八年の後、アステウリアス(Asturias)の小王國を省きて、全半島の『ゴート』國民は悉く其征服する所となれり。七百二十年、彼等はヒレニ一山脈を超て北の方佛蘭西に入り。是れ實に基督教國の一大危機なりき。若しポアチール(七百三十二年)の大勝利徴せば、全歐羅巴は半月旗下の屬邦となりしやも亦測るべからざりしなり。然れども當時フランク王國は、是『一大危機』の眼前に通れるを悟らざりしものゝ如し。内訌頻りに起りて權勢の争奪已まず、アクキタニア侯國は、獨力亞刺比亞民族の衝に當り、十年間の苦戦の後、遂に其亡ぼす所となりしが、王マールテルは曾に是を救はざりしのみならず、却て其没落を助成せりき。ポアチールの戦勝は、素よりマールテルの功なりと雖も、基督教國存亡の危機を自覺して其勢力を集中したりと云はむよりは、寧ろ敵軍たる亞刺比亞軍の驍達に歸すべきもの多し。是の如くにして是歴史上最も重大の關係ある事實は、殆ど偶然に於て成就せられたり。又奇なりと謂ふべし。是一戦に破れてより、ポアチール以北又回

東方諸邦に於ける亞刺比亞人の戰勝。

教徒の足を容れず。彼等はコルドブに退きて茲に久しく其榮然たる「カリフ」(Caliph)の司配を繼續せり。

亞刺比亞民族の權力は同時に東方に擴張せり。即ちモハムメッド氏没後十二年を出でずして、彼は波斯シユリア及び亞非利加に於て三萬六千の市邑城寨を降し、四千の寺院を破壊し、代ふるに回々教の堂塔を以てせり。ダマスカスは一年間の攻圍に陥り、東羅馬帝ヘラクリウスはアチナティンの戰に於て五萬人を喪へり。エルザレム、アンチオック、アレツホ、タイル、トリポリの諸大市亦墮て陥落せり。『カリフ』繼承者の義オマールは亦駱駝に乗り、メチナより來りてエルザレムの占領式を執行し、茲に神聖なる都府は異教者の手に歸せり。

今や東方諸邦を占領したりたる亞刺比亞人は、古來其間に普及せる希臘的文化の影響を被りて、其知的生活を催起し、更に進みて世界人文の發達を助成するの基を啓けり。是れ中世人文史上最も注意すべき事實の一なり。

由來亞刺比亞人は「セム」人種の一派として決して學藝に短なる民族にあらず。

亞刺比亞人と科學。

西班牙の文物。

往昔アツシユリアの文化は夙に光彩を古史上に放ち、殊に科學及び建築に於て獨得の長所を誇れり。幾何學、天文學、解剖學、醫學、及び科學は是新亞刺比亞の文化によりて復活し、其「ムニア」的建築はピザンツ式と抱合して、一種特異の風格を開展せり。是民族が知識を重ずるの風は、左の如き俚諺を見ても明なり。曰く、「學者の一滴の墨汁は義人の血と等しく貴し」。曰く、「正しく筆を用ひたる人は、劍の下に仆れたる人と等しく天國に生るゝことを得べし」。曰く、「世界は四個の物に支持せらる。一に賢者の學識、二に豪傑の正義、三に善人の祈禱、四に勇者の剛毅」と。亞刺比亞は是の如き精神を以て學術を攻究せり。其の一時歐洲學術界の教導者となりしも深く怪むに足らざるなり。

中世の初期にありて中部歐羅巴の古代文化の源泉はコンスタンチンポリスに非ずして實に亞刺比亞人の占領したる西班牙なりき。古代の文學、哲學、美術、科學は基督教國に先ちて既にあらゆる回々教の都府に榮へたり。アラトーン、アリステレス諸氏に關する歐洲人の最初の知識は、實に其亞刺比亞譯によりてありき。今亞刺比亞文化の西洋學藝に寄與せる主なるものを擧ぐれば、概ね

歐洲文明に寄
與せられたる
亞刺比亞文
明。

左の如し。

- (一) 現今歐洲詩歌の形式にして亞刺比亞より來れるもの尠からず。然れども一般文學に關しては精確なる科學的攻究に忙はしき回教的學者は、何等顯著の創作を出さざりき。
- (二) 哲學は主としてアリストテレス氏を研究せり。アリストテレス、テオフラストス諸氏の知識は、亞刺比亞羅甸の對譯を通じて初めて基督教國に知られたり。
- (三) 亞刺比亞學者の尤も得意なるは形而上學よりは形而下學にあり。就中醫學、天文學、數學、地理學に於ては世界の師たり。サマルカンドの觀測臺は遙に歐洲最古のものよりも古し。
- (四) 亞刺比亞人は發明者として知らる。紙の發明は印刷の効力を倍加し、所謂『アラベスク』式裝飾の發明は、近世幾多の様式の基礎となれり。蒸留術、藥材、其他武器、農具等に關して種々の發明あり。又彼等は『ゴチック』建築式の尖

亞刺比亞の文
學美術。

回々教と建
築。

頭空窿を西部亞細亞より、火藥及び『ユムバス』を支那より輸入せりと稱せらる。

科學は是の如く發達せりと雖ども、其文學美術は特に稱するに足らず。多少民族固有の詩歌を有せりと雖ども、モハムメッド氏以後に至りては、韻律の未技に奔りて自然の感情を失へり。然れども抒情詩は其あらゆる種類に於て發達し、詩人の數亦甚だ多し。獨り叙事詩及び劇詩は殆ど絶無なり。唯其小話傳説の中間、可憐なるものありて歐洲諸國の語に譯せらる。其最も有名なるものを『千一夜譚』とす。美術の中に多少見るべきものは、建築術あるのみ。是れ他の諸種の美術は國教によりて嚴禁せられたればなり。而して是建築術も亦全く回々教の精神を體現せり。蓋し回々教は基督教と均しく一神教なり。然りと雖ども神及び彼岸の觀念等に就ては、東洋諸國に固有なる具象的、はた感覺的性質を帯び、基督教の一向抽象的なるを稍其趣を殊にす。故に其建築の様式も亦一面に於ては尖塔高閣の中に宗教的渴仰を現はすと共に、一面に於ては瑰奇綺麗なる裝飾によりて、現世的慾望を示めし、枯淡冷酷なる外觀と、豊富なる内部の饒

刻と、兩々相對して最も明白なる反比を見る。其構造は『ミラブ』と稱する廣大なる禮拜堂と、『キブラー』と稱する廢經堂との二部より成れり。禮拜堂の門戸は常に回々教徒の聖地とする所のメツカに向ふを則とす。

商業の奨励と多妻主義。

回々教が短日月の間に爾かく傳播するを得たるは、兵力素より其の主因たりと雖も、他に二三の事情の是を補助せるものあるを忘るべからず。商業の奨励と多妻主義とは其主なるものなり。當時東羅馬と波斯との間には二帝國積年の交戦の爲に、互市貿易殆ど杜絶せられき。是を以て東洋及び亞非利加の商業は、そのづから亞刺比亞人の手に落ちたり。モハムメツド其人も、其初めは實に一個の商賈なりき。チグリス河上のバグダツド府は、實に『カリフ』の首府たりしのみならず、支那、西藏、印度及び中央亞細亞地方の商業の互市場なりき。爾來兵勢の振張と共に貿易自ら盛に行はれ、其國民的宗教たる回々教も亦隨て廣く傳播するを得たり。

多妻主義は戰勝の地盤を固むる上に於て更に大なる効果を有したり。是主義

の實行の結果として、家族の増殖は實に驚くべきものあり。或は一人にして百八十の兒女を有せしものありと云ふ。是人口の急速なる増加は、通常の場合に於けるよりも遙に短日月の中に幾多の事業を成就し得べかりしこと、素より論を俟たず。是等の兒女は均しく亞刺比亞民族の血統を誇揚し、夙に其國語の中に養成せられ、其思慮、感情亦全く亞刺比亞的となれり。是國語の普及は、亞刺比亞人の意を用ひたる所にして、或『カリフ』の如きは、希臘語の使用を嚴禁し、代ふるに亞刺比亞語を以てすべきことを命令しき。是等の事情は回々教の弘布を助成するに於て尠からざる勢力を有したり。

『カリフ』の管

『カリフ』の或者は、善く其國を治め、其後世歐洲の政治上に貢獻したる好事例はた少しとせず。西班牙に於ては、基督教徒は或範圍の中に信教の自由を保ち、『カリフ』の主權の下に合議制を有したり。又亞刺比亞人が彼等より徵收したる租税も亦決して過酷なるものに非ず。埃及に直税制度を創始したるものは、『カリフ』アムル・イ・氏なり。西班牙の猶太人は『ギシゴート』民族の下にあるも遙に幸

亞刺比亞民族の衰弱。

福なりき。然れども『カリフ』は政体上素無限の勢力を有するを以て、位其の人を失すれば、動もすれば、専制政度の極弊に陥るを免れず。加ふるに領土收入の増殖と共に、純粹なる亞刺比亞民族の分散を來し、其必然の結果として封内の統一を失ひ、茲に漸く其衰勢を表はすに到れり。凡そ一百年の間亞刺比亞人はあらゆる『サラセン』軍隊の中堅となり、其勢力の主腦を成し、が以後漸く傭兵組織を採用し、奴隸軍をだに編制し、其上長士官にも亦他民族を用ふるの已むを得ざるに到れり。是の如くにして亞刺比亞軍隊は漸く強健なる國民的觀念を失ひ、徒に私己の利益を計りて茲に其分裂を見るに至りたり。這般の事情略、羅馬帝國の末路と相似たり。

西班牙先づ叛き、亞非利加是に繼ぐ。各地の頭領は相顔顔して下らず、各『カリフ』の全權を掌握せむと擬す。バグダット府の『カリフ』は主權一たび地に墜ちて復振はず。政治的實力は其臣下の手に歸せり。後に所謂『エミル、ハル、ホム、ラ』なるもの即ち是なり。西班牙に於ける回々教徒の勢力も亦十世紀の下半より漸く衰頹し、十一世の初め其『カリフ』『オミアッド』家の滅亡と共に、分裂して復た合は

『セルマニク』族。

ず。十三世紀に到りカステリア、レオンの王フェルディナンド三世大に回々教徒を破りセ、ピリヤ、コルドバを陥れ、アラゴン王、葡萄牙王も亦半島の東西に領土を擴め、回々教徒は置にグラナダの一國を有ちぬ。『サラセン』民族は是より永く歐洲歴史の要素たる能はざりき。

バグダットの權力漸く衰ふるや、東洋に視はれたる基督教の新仇敵あり。是を土耳其民族中の『セルマニク』族となす。東羅馬帝國及び亞刺比亞民族の衰頹に乗じて小亞細亞を掠略し、基督教徒の聖地なるエルザレムを占領せり。初め是地の亞刺比亞民族の手に落つるや、基督教徒の聖墓に來拜するもの概ね優待せられき。然るに土耳其人代て是を取るや、寺院を破却し、禮拜者より過酷の税金を徴收し、虐遇到らざる所無し。是に於てか聖地恢復の目的の爲に『神聖戰爭』起る。十字軍即ち是なり。

十字軍。

十字軍は一千〇九十六年より一千二百七十年に到る。前後七回に亘る。茲に其原因及び結果の要領を擧げむ。

其願末。

聖地エルザレムに達する自由の通路を開かむとするの願望は、素より十字軍の主因なり。然れども當時の情勢を察するに尙ほ他に三個の原因ありしが如し。

第一の原因は軍事的なり。蓋し尙武は「チユートン」民族の特性なり。是特性は一度び「ノルマン」人の勃興に醒め、二度び「アール」民族との闘争に勵まされ、茲に基督教國の公敵たる土耳其民族に對して更に十段の敵愾心を振揚せり。第二の原因は當時基督教徒の厭世的思想なり。天國は苦行と禁慾によりて初めて達し得べしと訓へたる羅馬教會は、東方聖地の巡拜を以て殊に救済を享くるの途なりと慇懃せり。今夫れ聖地の恢復の爲に盡瘁する所の勞力困難、危難は最も是目的に適合せるものと思惟したりしや、素より其所なりと謂ふべし。若し夫れ第三の原因は、宗教、政治的なり。十字軍は二個の世界的宗教の最終の決闘に外ならず。從來の四世紀間は基督教は歐羅巴に於ては常に防禦の地位に立ち、亞細亞に於ては常に其編絆を受けたり。地中海は殆ど全く半月旗に風靡し、コンスタンチノポリスはた將に新興回教國民の爲に顛覆せられむとす。是際

一大打撃の敵敵を破砕する無くむば、基督教の運命未だ容易に知るべからず。是れ當時歐洲各國民の均しく憂慮したる所、十字軍は是思想の高潮に乗じて勃發したりしなり。今其委曲を畧し、左に其歳時を掲げむ。

- 第一十字軍 一〇九六——九九九
- 第二同 一一四七——四九
- 第三同 一一八九——九二
- 第四同 一二〇二——〇四
- 第五同 一二二八——二九
- 第六同 一二四八——五四
- 第七同 一二七〇

十字軍は其初期の目的を達せざりきと雖ども、其歐羅巴文明に及ぼしたる影響一にして足らず。其主要なるものを擧ぐれば、第一知識的及び社會的、第二宗教的及び第三政治的の三種に歸すべし。

十字軍は東方の遠征によりて幾多の民族と接觸するの機會を與へたるを以て、

十字軍の歐洲
人文に及ぼし
たる影響。

十字軍と文藝
科學。

大に歐洲人の知識を増殖し、諸種の學藝を習得することを得たり。是を以て世界及び人生に關する知識の上にも亦一生涯を開き、學界の視圈頓に革まれり。數學、天文學、理化學、動物學、及び醫學は亞刺比亞文明の餘澤を傳へて、從來未だ曾て見ざる所の完全の度に達せり。羅旬『セミチック』諸語の研究亦起り、後年官廳學の基礎を成せり。文學も亦新に活氣を起し、殊に歴史に關するものは舊來の傳奇以外に幾多新奇の題目を輸入せり。地理學は科學となり、美術も亦其面目を新にせり。『ゴチック』式は是時代の產物なり。社會に關しては、慈善事業は愈々盛大に赴き、個人の尊重漸く加はれり。近世人文の發達は是氣運に負ふ所決して少しとせざるなり。

十字軍と基督
教。

十字軍は宗教上亦偉大の勢力を有したり。即ち東西兩教會の分離を完成し、宗教裁判の制度を復活し、從軍者の財産を買収することによりて、教會の富を増殖し、法王の權力を擴張し、更に幾多の軍隊的宗派を起したり。

十字軍と政治
社會。

若し夫れ政治上に關係しては、十字軍は殆ど四世紀の間、東羅馬帝國の滅亡を沮遏し、そをして歐羅巴東部の藩屏たらしめたり。以太利及び西歐諸邦が回々教

徒の侵襲を免れたるは、十字軍實に是が間接の原因なり。内部に於て其勢力殊に顯著なるは、封建制度を弱め、國家の中央集權を助成せしこと是なり。又十字軍は自由及博愛の精神を鼓吹せり。是れ多年共同の苦辛は各國人民の間に四海同胞の念慮を惹起したればならむ。佛王ルイ七世(一一三七—一〇八〇)は萬人の同元を認め、且各人天賦の自由は罪惡によりての外は決して褫奪せらるること無かるべきを布告せり。一千二百五十六年、ポログナ府は、其城壁内に住する一切の人民に自由を與へ、『自由なる市に於ては自由なる人の外は住居すべからず』と宣言せり。一千二百八十八年、フローレンス市亦是例に倣へり。英國も同一の思潮に掃蕩せられ、從來地方に於てのみ行はれたる代議制は國事に應用せらるゝに到れり。所謂大憲章は是傾向の產物に外ならざるなり。

吾人は是章の終に臨み、從來歴史上に起りたる三大一神教に就きて簡單なる比較を述べむ。

猶太教は『エホヴァ』を以て國神とする所の國民的宗教なり。其神政はパレスチナ

結論。

三大一神教の比較。

をして一の堅強なる宗教的國家たらしめしが、其俗化と共に漸く儀禮の外形に拘泥し、人心内部の教化を事とせざるや、茲に基督教徒興りぬ。基督教は其信仰及び道德の教義に於て主として猶太教に本き、更には是を醇化し、國民的城壁を打破して世界的精神を興へ、四海萬民に向て等しく救済安立の大義を宣傳せり。回々、教は歴史上基督教の仇敵なりと雖も、實は共に同一なる一神教的信仰の上に立てるものなり。唯是を傳播するに兵力を以てし、其宿命の依信と、其神及び彼岸の觀念の感覺的なるの點とに於て、東洋的精神を有したるの差あるのみ。其一時原燎枯草を燐くが如き勢を以て傳はりしは、其兵力と、其單純なる教義が基督教の腐敗に乗したるとの致す所なり。然れども、兵力に維持せらるゝ宗教は、兵力と共に衰へざるを得ず。亞刺比亞民族の衰微と共に、全く歐洲に其勢力失へるは、蓋し自然の勢なりとす。十字軍は中世紀の後半に於ける歐洲國民の大運動なり。素是れ回々教に因りて惹起せられたるものなり。陳套腐爛に陥りたる中世歴史の一大掉尾として、是間おのづから近世人文の曙光を望み得べきものあり。亞刺比亞民族の歴史的意義は、西班牙にあらず、埃及にあらず、ペク

ダツドにあらずして、寧ろ是十字軍に存するものい如し。

第八章 文藝復興と宗教革命

近世的人文の新傾向。——文藝復興の眞意義。——中世紀人文の概見。——自覺的自由。——中世紀に於ける古代文藝の研究。——文藝復興期に於ける亞刺比亞的西班牙の影響。——文藝復興とコンスタンチノポリスの陥落。——以太利に於ける文藝復興。——フロレンス市。——文藝復興と羅馬教會。——羅甸語と羅馬教會。——トーマス・アケムピス氏の『基督の模倣』。——羅馬教會に對する反抗。——文藝復興期の以太利文學。——ギチアルヤニー氏とマキアヴェリ氏と。——道念の欠乏。——文藝復興期の美術。——中世紀の美術と文藝復興期の美術と。——宗教に對する美術の態度。——美術史上第二の黄金時代。——美術の分離と結合。——建築。——繪畫。——ラフ・エル氏。——文藝復興は將に來らむとする一大活劇の序幕のみ。——古來歴史上に於ける以太利の地位。——以太利以外に於ける科學的知識の進歩。——宗教革命。——羅馬教會と獨逸民族。——贖罪販賣。——サント・ドミニコに於けるメルテルの抗議。——羅馬教會の死活問題。——ナルムスの國會。——プロテスタント。——アウグスブルクの平和。——宗教革命と基督教。——宗教革命後の宗教と國家との關係。——結論。

近世的人文の新傾向。

基督教及び日耳曼民族の歴史上に現はれてよりこのかた、十五世紀の後半より十六世紀の四分の三に到る迄の百餘年の間ほど、人文發展の上に重大なる意義を有せる時期はあらじ。是れ何等振天動地の大活劇の面目を驚かすものありしに非ず。過去の社會に對して何等急劇の破壊無く、隨て一朝新奇の事物の倏忽の間に一生面を拓發せしもの無し。而かも天下の大勢は冥々の中に暗移默徙し、漸く人生世界を觀するの風趣を異にし、隨て國家、宗教、及び個人の關係に就て全く前代の思想を革むるに到れり。是頃向は從來の如く神學的ならず、稍、多年因襲の傳説、及び證典を輕蔑し、寧ろ自然界の觀察に基きたる、個々人の思想、及び實力に憑依するの風あり。是れ所謂近世的人文の特徴にして、其曙光を示めしたるものは即ち文藝復興なり。

文藝復興の眞意。

中世紀人文の概見。

所謂文藝の復興は是新傾向の精神に非ずして其記號なり。夫の前進せむと欲するものは必ず先ず後顧す。古文學の復興亦是に外ならざるなり。そも、中世紀の一千年は、幾多人生の問題に對して一も確的なる解答を與へず。人心は宗教に拘束せられて其活動の自由を得ず。一切幸福は他力を仰

で初めて得べしとせられたりき。人は皆覆面の中に生息す。彼等は快活なる眼を放ち、面々相對して世界の美を認むる能はず。眞し認むるも、彼等は故らに面を背けて是を忌避し、翻て罪死、裁斷等の憂鬱なる宗教的考察に耽りたり。現世の幸福は希望するに足らず、吾人の理想的生活は彼岸にあり。美は陷穽にして快樂は罪惡なり。人は墮落して世は腐敗せり。一切現象世界は所詮流轉、無常、疑惑の巷にして、確實不動なるものは獨り死あるのみ。是の如きは中世の宗教觀なりき。

自覺的自由。

中世紀に於ける古代文藝の研究。

文藝復興は是覆面を褫落し、是昏迷を排除して、示めすに實在の世界及人間を以てし、人皆其本に歸りて自己獨立の立場を占得すべきとを訓えたり。所謂近世史は是時を以て初まりぬ。史家シモンゾ氏の言に曰く、「文藝復興の歴史は、即ち歐洲民心に現はれたる自覺的自由の到達の歴史なり」と。蓋し知言と謂ふべし。

中世紀の間、古代人文は實際上殆ど全く遺却せられたりき。其初期にありては、カシオドルス(Cassiodorus 四八〇—五七五)、ボエチウス(Boethius 四七〇—五二

四、等三四の學者の希臘の科學及美術を鼓吹せしものありしが、羅馬教會の權勢を占むると共に、一切古代の學藝は異教の文物として排擠せられたり。是を以て古典は多く遺失せられ、其貴重なる美術は自然の頽廢に任せられ、其殿堂は多く破却せられたり。さしも輪奐の宕壯を極めたる羅馬の公堂は地上に委棄せられ、其殘墟は牧場となれり。羅匈語は腐敗して其舊時の典雅を有せず。一切獨創の思想は教會の爲に拘禁せられ、人知は聖書の中に限られたり。カル、大帝治世の文物は一旦にして跡無く、『ホーヘンスタウフェン』家時代の燦然たる學藝はた一夕の榮に過ぎず。羅馬法典の研究は政治の必要に驅られて起りたり。然れども未だ以て是法典の由來せる古代の文明を喚起するに足らず。哲學は『スコラスタック』學派の壟斷する所となり、其目的は基督教會の教義を確立するにあり。アリストテレス氏は曲解せられ、眞理探究を訓へたる其形式的論理學は却て、思想發達の一大障害となれり。當時の思想にはまゝ幽玄高遠なるもの無きに非ず、然れども功罪遂に相償ふに足らず。獨斷と形式と偏頗と固陋と、是れ中世哲學の特徴なりき。

文藝復興に於ける
亞刺比亞の影

是の如きは中世紀一般の思想なりき。是精神的暗黒時代に一道の曙光を放ち、文藝復興の大運動を預告したるものは亞刺比亞的、西班牙の文物なりき。吾人が前章に於て述べたる如く、西班牙は亞刺比亞民族が歐羅巴に於ける唯一の領地なり。彼等は茲に地中海東岸の諸邦より承傳したる古代文物を移植し、幾多の學會を立て、更に熱心に是を涵養せり。北方歐羅巴の學者所在風を傳て茲に游學せるもの尠からず。是に於て亞刺比亞人は古代學藝の公平なる研究者、出版者、傳播者として歐洲の教師となれり。加ふるに十字軍の一好果として、西歐羅巴と希臘及び亞刺比亞諸邦との間に交通の利便を得たりしかば、希臘語は茲に新に歐羅巴人の注意を惹起し、アリストテレス氏の典籍は先づ争て研究せられたり。是に於てか學校及び學會は到る處に建設せられ、國民文學も亦其萌芽を發せり。十二世紀の半ばに到りて、ボロクナ及びオックスフォード大學は開始せられ、巴里及びサラマンカの大學亦次で起りき。巴里大學は一時一萬五千の學生を有したりと云ふ。交通は愈開け、隨うて僧侶は漸く學問の專有權を失ひ、快活自由の思想家は諸邦に輩出せり。佛のアベラルド (Abelard) 一〇

九七—一四二)アルベルトス・マグヌス(Albertus Magnus 一一九三—一二一八)英
 のローチヤー、バーコン(Roger Bacon 一一一四—一九四)諸氏は正に文藝復興の先驅と
 云ふべし。アペラルド氏は『スコラスチック』學派に反對して、傳説經典の信憑す
 べからざるを公言し、道理の權利を主張せり。バーコン氏は初めて實驗的、即ち
 歸納的研究法を唱道し、實驗を以て證典及び論理學の上に置き、即ち是れ眞理探
 究の最も確實なる方法なりと断ぜり。

十字軍の齎らしたる希臘の知識は比較的僅少なりき。文藝復興の大思潮に最
 近の動機を與へしものは、土耳其民族によりて爲されたるコンスタンチノポリ
 スの陥落にあり。幾多學藝の士は難を避けて西の方以太利に走り、茲に其安全
 なる生活を求めたり。文藝復興が先づ以太利に起りしは主として是による。

是れ亞刺比亞民族が西班牙に移植したりしものよりは其幅員に於て遙に廣大
 なるものありき。

今以太利に於ける文藝復興の由來を尋ねるに、ペトラルカ氏(Petrarcha 一三〇

文藝復興とコ
 ンスタンチノ
 ポリスの陥落

以太利に於け
 る文藝復興の

四—七四)の時代にありては、未だ僅に其萌芽を發せしのみ。是れ是時人が「以太
 利を擧げてホメーロスを解するもの十人無し」と歎せるにても知らるべし。而
 して當時希臘文學の傳はらざりしことは、同じ人が「あはれイウリピテニス氏若
 くはソフオクレース氏の寫本が若しも航海者の手によりて發見せられたらむに
 は」と浩嘆したりしを似て推測するを得べし。然れどもダンテ、ボカチオ及びペ
 トラルカの三大詩人が其清新雄大の詩想と、該博豊富の學識とによりて、夙に古
 代文學の知識を輸入しつゝありしことは疑ふべからず。

希臘古典の研究は、以太利に於て紀元一千三百九十五年を以て初まれりと謂ふ
 べし。是れコンスタンチノポリスより派遣せられたる希臘人クルニコラス氏(Chris-
 tianos)が羅馬に於て希臘語を教授したる年なり。幾ならずして航海者アウリ
 スバ氏は三十八種の希臘語の原書を齎せしが、中にはフラトロン、ピンダル諸氏
 の著書あり。是等の書典を羅匈語に翻譯するに當りて、初めは多少羅馬教會の
 反對ありしが、後には法王イウゲンニウス四世自ら其保護者となれり。次で土耳
 其民族西侵の勢漸く加はり、コンスタンチノポリスの運命亦預知し難からざる

フロレンス市。

に及びて、希臘の學者の以太利に移住せるもの跡跡相接し、古典の研究は茲に年を追ひて漸く榮え行きぬ。其地理上の中心をフロレンス市となす。

フロレンス市は古來學藝の地にして、夙に以太利のアテーチと稱せられき。十四世紀の頃、已に一萬の見童は讀書力を有し、其中六百は論理學を解し、且羅甸語を談ぜりと傳ふ。其市長メヂチ家は、常に文學美術の保護者を以て自任し、殊にローレンソ、デ、メヂチ氏(Lorenzo de' Medici 一四四八—九二)は其祖父コスモ氏の志を紹介、盛に古代の文藝を奨励せしかば、一時文物粲然として見るべかりき。

是に於てか真正なるプラトーン氏の哲學は、アレキサンダリアに於て猶太教と抱合して起りたる新「プラトーン」派を壓倒し、醇粹なるアリストテレイス氏の學說亦多年「スコラスチック」學派に誤られたる偽學說をして顔色無からしめたり。希臘哲學が眞に理解せられしことは、當時の大書家ラフ、エル氏の「アテーチの學派」と題する一編、是を示して明なり。是書頗は、プラトーン氏及びアリストテレイスの二哲が、共に渾圓球上に在り、彼は天を仰き、此は地に俯するの狀を寫す。二者の學風を體現して遺憾無しと謂つべし。

文藝復興と羅馬教會。

羅甸語と羅馬教會。

是古學の復興の爲に第一に影響を被りたるものは羅馬教會なり。希臘文學の輸入は、歐羅巴一般の人心に向ては、殆ど一個の新世界の發見と等しき者あり。基督教史の一半は實に是新文學の輸入と共に初めて知られたり。彼等が絶對的神聖として畏敬したる羅馬教會は、由來一個の教會に過ぎざること、是教會が無上證典として支撐する所の教義は、希臘文學の中に其根據を有せると、亞刺比亞人が媒介者たるの故を以て甚だ多く尊崇せられざりしアリストテレイス氏の實に紛々たる「スコラスチック」派の哲學者を超越せる一大碩學なること、更にアリストテレイス氏以外幾多の學者、詩人、美術家の著述製作の珍藏十幾すべきもの遙に中世の羅甸文學に優れること。今にして初めて知られたる這般の事情は如何に當代の耳目を驚動せしか。其一時希臘語及び是に附帶して希伯來語が非常の熱心を以て遍ねく研究せられたる事實によりても、思ひ半に過ぐるものあらむ。

是時に當りて羅馬教會が是古語の復活を沮遏せむと勤めたるは寧ろ勢の自然

のみ。抑も羅匈語は從來神聖の言語と稱せらる。羅馬教會の統一は實に主として是に依りき。將た又羅馬の一府が歐羅巴の中心となり、其一般普遍なる國際的關係を維持するを得たるは、實に是「神聖なる言語」の力其多きに居りき。故に羅匈語の流行は教會權維持の第一の條件なり。隨うて其廢棄は即ち其の衰頹なり。換言すれば、羅匈語が歐羅巴を通じて行はれざるの時、は即ち羅馬教會の權力が地中海の一半島裏に限られたるの時なり。羅匈語廢れて希臘語及び希伯來語の研究是に代り、同時に歐羅巴各國に於ける國民文學の興起は、是れ即ち羅馬教會の分裂を意味す。是を以て國民文學は獨逸に於てはルーテル氏を以て起り、英吉利にありては井クリツフ氏を以て始まりき。而してルーテル氏、井クリツフ氏、共に所謂宗教革命運動の主人公なりき。

是羅馬教會に對する當代人心の態度を現はして尤も明晰なるものは、トーマス・ア、ケムピス氏(Thomas a Kempis)氏の『基督の模倣』に若くは無し。其主旨は僧侶教會の干渉を受けずして、吾人の信仰を高ふし、徳行の完美を期するにあり。即ち、各人をして自己の僧侶たらしめむとするにあり。是書一度び出で、大に當代社

トーマス・ア、ケムピス氏の『基督の模倣』

羅馬教會に對する反抗。

會の喝采を博し、聖書を除きては最多數の讀者を得たりと傳ふ。亦以て一般人心の轉向する所を察するに足るべし。

羅馬教會は時事の日に已に非なるを見て、百方古文學の復興を遮斷し、以て人心の統一を計りたり。彼等は希臘哲學の研究を以て基督教の神聖を潰すものとなし、威赫誘惑殆ど施さざる所無かりき。然れども時已に遅かりき。加ふるに科學的知識の進歩は、基督教の根柢たる奇蹟に向て一層満足なる立證を要求し、種々の方面より教會を苦めたり。時の人叫で曰く、今や血證死を以て眞理の證據と信じ得べき時代は已に過ぎ去れり。血證死は當り教義の眞理なるを立證するに力無きのみならず、却て其疑惑を増すものに非ずや。見よ何處にか幾何學的今題の眞理を證せむがに死を甘じたる幾何學者ある。眞理は犠牲を要せず。只明白確なる合理的證據を要するのみ。聖書中の奇蹟果して是の如き證據あるかど。教會答へず。却て是を擯けて異端となせり。斯くて不信と懷疑とは冥々地に人心の根柢に蔓延せり。是の如く、文藝復興と希臘語、希伯來語の研究と、及び之に伴へる羅匈語の衰微と

は、國民文學の興起、國家中央權の發達、自然科學の進歩、及び印刷等諸般の發明と共に羅馬教會の權力を減殺し、其統一を打破し、茲に宗教革命の基礎を成せり。

文藝復興期の
以太利文學。

文藝復興時代の以太利の文學は、其種類數量の豊富に於ては其例を前代に見ず。然れども其性質に於ては未だ深く稱するに足らず。古代文藝の賞鑑斯の如く盛に宗教及び科學の批評研究亦斯の如く進めるを想へば當代の文學は寧ろ大に吾人の預期に反せりと謂はざるべからず。眞に後代の珍藏に當るものは僅に十指を屈するに足らず。中に就きギチアルズ、ニー氏(Quicciardini, 1482—1545)の以太利史、マキアエリー氏(Machiavelli, 1469—1527)の諸著は、歴史的文學の録々たるものなり。殊にマキアエリー氏の『君主論』は、其道念の高下、理論の是非は暫く論せず、當代の產物として永く後世に傳ふべし。其説の要に曰く、君主たるものは仁慈情誼を要せず。正義敬虔を必とせず。彼れ若し是等の徳性を具備し、常に是を顯はさば、却て常に其身の累を爲さむ。然れども彼は少くとも是等の徳性を有せる如く装はざるべからず。其初めて一國に君臨するの際に於て

ギチアルズ
ニー氏
マキア
エリー氏

殊に然りとす。若し事情にして容さば、正義を守ること必ずしも不可ならず。唯機に臨みて如何なる不正不義をも遂行するの覺悟無かるべからず。是を以て賢主は其身に危害あるに非ざれば決して其言を履まず。其徳を守るは畢竟己に利あればなり、『君主論』第十八章也。其冷酷無情偏に權謀を弄して正義を顧みず。刑法を劍とし、權力を甲とし、他に對するに専ら利害を打算す。是れ後世の永く『マキアエリー』と名くる所の政策なり。蓋しマキアエリー氏の意は是の如き君主の眞に希望すべしと謂ふに非ず、唯當世以太利の情勢に處して國家の強盛を計らむが爲には正義慈善の必ずしも憑依するに足らざるを諷したるのみ。又以て當代社會の道徳を想見すべきなり。ボイアルドール(Boiardo, 一四三四—一四九四)『アリオスト』(Ariosto, 一四七四—一五三三)及びタッソー(Tasso, 一五四四—一九五三)の各は詩人として永く世界の文學史上に光彩を放つべし。ボイアルドール氏の『オルランド、イナモラト』(Orlando Innamorato)及びアリオスト氏の『オルランド、フエーリオン』(Orlando Furioso)はカル、大帝部下の勇士が、基督教徒と回、々教徒との戦争に於ける奇怪なる功名譚を潤色せるものなり。前

者は稍、嚴正なる道義的觀念を有す。然れども、後者は浮靡なる想像に富み、輕妙
 沛脱の文字を有す。タツソニー氏の『エルザレム回復譚』は、第一十字軍を見ること
 瀕ほホメーロス及び非ルギリウス氏がトロヤの戦争を見たるが如きもの、而か
 も其氣格文辭、遂に遙にアリオストー氏に及はざるが如し。然れども今日尙ほ
 其名聲を墮さず、歐洲諸邦は何れも之を翻譯し、其出版年ごとに新なり。是等は
 以太利文壇の精粹なり。

道念の欠乏。

然れども當代以太利の文學は其詩と史とを問はず、散文と律語とに論無く、道念
 の缺乏は一般の通弊なり。蓋し當時の所謂『ロウマニスト』學派か復活したる古
 學は、主として『エロキール』派にして『ストア』派に非ず。詩文の士は概ね宮庭の籍
 紳なり。佚樂世を樂むの風、獨り盛にして、謹嚴己を持するの徳、遍く廢れたり。
 權勢に阿り、名利に附きて以て耻とせず。アリオストー氏は甘して法王の女婢
 を崇拜し、マキアエリイ氏はフローレンスの市長を逢迎し、タツソニー氏は再び放
 たれて俛首低耳以て蓄歎を求めたり。一代の文豪詩傑にして尙是の如し。其
 他斗筲の輩の淫靡卑猥に流れしもの深く怪むに足らざるなり。蓋し文藝復興

文藝復興期の
美術。

中世紀の美術
と文藝復興期
の美術と。

の眞意義の現はれたるは歴史にあらざ、詩文にあらざ、實に其美術にあり。

文藝復興期の一般の思想と共に、其美術も亦古代傳説及び宗教の繫縛を脱
 し、個人的想像の自由なる發揮を遂げぬ。

中世の美術は一に教會の隨使に任じ、自家獨立の脚地を有せざりき。故に一切
 の製作は教會の名に據りて立ち、美術家の個人的名稱は多く溼滅せり。其題目
 及び内容は一に傳説によりて決定せられ、美術家の唯一の職能は唯刀鋸の技巧
 にありき。然れども今や則ち然らざるなり。其しや美術と教會とまだ全く分
 離するに到らずと雖ども、美術家は起然として傳説、聖典の外に立ち、其宗教的題
 目に関しても、一に自家の思想によりて解釋し、且古來陳套の資材に新生命を與
 ふるの自由を得しなり。自然は彼等に對しては最早や卑しむべきものにあら
 ざりき。彼等は快活なる精神を披拂して自然世界の美を包容し、荒唐不自然な
 る從來の美術に、更に一段の寫實的分子を貼視せむと欲しき。是れ中世紀の未
 た曾て見ざる所なり。是に於てか人跡解剖、遠近投射の研究漸く行はれ、光線空

宗教に對する
美術の態度。

氣の影響より、色彩濃淡の完美を極めたり。人跡を以て汚穢の肉塊と觀じたるの風、全く地を拂ひ、自然物中の最も高尚なるものとして、其面妙相好は遍なく賞鑑せられたり。優雅なる人物畫、及び風景畫は盛に行はれ、世界は茲に一種愉快の氣を以て充されたり。是れ中世の人が自然人間を賤視し、偏に渴仰慈悲の眼を放て、遠く超絶の彼岸を憧憬したるも、何等の相違ぞや。是に於て中世紀に於ける抽象的、記號的、理想主義、仆れ、自然主義は、旭日中天の勢を以て、當代の美術界を風靡したり。

宗教に對する美術の態度の一變せることは、最も注意すべし。今や美術家を動かすものは、宗教の教義證典に非ずして、人世の眞と美となり。是に於てか使徒も、預言者も、聖人も、共に普通の人間として描かれ、聖母も、耶穌も、ヨセフも、ヨハナも、共に各々尋常家庭の人物に外ならざりき。美術にありては、神聖もなく、異端もなく、天と地と融合せり。ミケランジェロ氏の天帝は、頑強肥滿宛然として我仁王の如きものなりき。

是自然主義は、極論に走るに及びて、遂に其弊無きを得ざりき。然れども是風潮

美術史上第二
の黄金時代。

美術の分離と
結合。

の頂點に於て、以太利は希臘のペリクレス時代の外に、美術史上に比類無き黄金時代を現出したりき。是れ凡そ一千四百二十年より一千五百二十年に到る前後一百年の間にして、即ち文藝復興の初期よりラファエルの死に到る。是時代にありては、中世以降行はれ來りし各種美術の調和一致は依然として存在せりき。然れども幾もあらずして、近世思潮の勃興と共に、是調和一致は破解せられ、建築、彫刻、繪畫の三者は各自獨立の發展を求むるに到れり。是れ文藝復興の必然にして、又有害なる結果なり。實にや美術各種の分離、其物は實に悲むべき現象なり。然りと雖ども中世紀の間、繪畫と彫刻とが如何に永く建築の約束を受け、爲に其自由の進歩を遂げざりしかを想へば、是分離は必ずしも痛嘆のみすべきに非ず。恐くは是離別は永久のものにあらずして、一時のものならむ。

彫刻と繪畫と建築との三者が、個々相獨立して其内部の自由なる發達を成就したらむ後、更に其結合を再びするの時あらむ。雖か近世美術の獨立自存の觀あるは寧ろ是最後の結合に到達する必要なる準備に非ざるを知らむや。

左に各種美術の狀況に就て一言せむ。

建築

文藝復興期の美術中、最も早く古來の典型を逸出したるものは建築なり。是れ一は其様式に多少新奇の分子を加ふるも、建築其物の性質上、異端を以て非難せらるゝを免るゝに依る。又一は從來建築に一定の法則欠けりしにも依るなるべし。當時の建築は方處に依りて一ならず。ビザンツ式は南部以太利に流行し、『コチツク』式は主としてアルプス山以北に限らる。羅馬に『サンタ・マリア・ソブラ・ミナルツ』の一寺院ありと雖ども、其原型を去ること甚だ遠し。『ロイヤルク』式のみ廣く羅馬に行はれき。文藝復興期式の先驅をなししは、一千三百年に竣功せるフローレンス市の洗禮堂なるべし。同所の聖『ローレンツォ』の寺院は有名なるブルナチリシイ氏(Brunelleschi 一三七七—一四四四)の設計に係り、一代の模範となれり。ミクランヂェロ氏曾て人の其埋葬地を問ふに答へて曰く、『吾をして永くブルネレシイの建築を冥想し得しむる處』と。有名なる建築家ミシエレット氏も亦ブルナチリシイ氏の聖『ローレンツォ』を以てミクランヂェロ氏の聖『ペーテル』の寺院にも優れりとなせり。當時の様式は主としてフックスツス時

繪畫

代の軍事工學家ブツルギウス氏の法則に本けり。宮殿は全く羅馬化し、寺院も亦其穹窿高塔を外にしては、多く古羅馬の公堂の式に法れり。是所謂『ペシッカ』風は、今も尙ほ西歐基督教國に見る所なり。是新様式流行の中心は羅馬にして、ブラマンテ氏(Bramante 一四四四—一五一四)より初まり、ミクランヂェロ氏(Michelangelo 一四七五—一五六四)に到りて其完美の域に達せり。後者の作に係る聖『ペーテル』の寺院は實に建築美術の最高の發達を表示し、文藝復興期が永く万世に誇示し得べき所のものなり。ミクランヂェロ氏と時を同ふしてバラダイオ氏(Palladio, 一五一八—一八〇〇)あり、エニス、エロナヂエノ、諸地を飾れり。彫刻に於てもミクランヂェロ氏は、設令ひ希臘の古名家に勝らずとするも、其風格技巧優に後世の師表たり。其作の最も著はれたるものを『タヒテ』、『モーゼ』、『夜』等と云す。

若し夫れ繪畫は遙に希臘に優る。シムナー氏(Cimabue, 一二四〇—一三〇二)實に是新派の曉星たり。氏が聖母の像を描くや、靈畫超越の神眸を以てせず、却て尋常一様的美婦人を以てしたるは、當時の人目を駭かしたる者なり。氏が後年

新派を破天荒たる所以實に是に存す。其弟子ギオットー氏(Giotto 一二七六一—一三三七)其流風を傳へて益々時尚を革新し、マサチオ氏(Massaccio 一四〇一—一四八〇)に出で、光線、陰影、色彩の妙を以て前人未到の地を拓けり。其摹寫眞に逼り、點染亦精緻を究む。自然主義は氏に於て長足の進歩を爲せりと謂ふべし。若し夫れ精神の幽趣を傳たへ、形骸以外趣味の津々たるものはフラ、ランヂェロ氏(Fra Angelico 一四四七—一五六三)の特長なり。プラチカンの僧院に於けるミケランヂェロ氏の繪畫は其觀念の壯絶に加ふるに規模の廣大を以てす。美術史上亦不朽の大觀たり。然れども是等は遂にラフハエル氏(Raphael 一四八三—一五二〇)に及ばず。

ラフハエル氏

ラフハエル氏は嘗に又文藝復興期の最大美術家たりしのみならず、實に古今の史上を通じて第一流の畫家なり。其聖母の像の如きは、生來奕々として眞に逼るの間、神韻漂渺として空靈超絶の趣を失はず。實に美術製作の至高の發達を標記するものたり。氏の繪畫は其精を言へば鏘鏘も荷もせず、而かも大局の上と言ふべからざるの妙味あり。且尤も驚嘆すべきは常に一層高上の理想に精進し

て念々已まざるにあり。天若し時を假さば、其究竟の發達の那邊に到るべかりしや、殆ど知るべからざるなり。ラフハエル氏と時代を同うせるものテイチアノ(Titian 一四七七一—一五七六)、リオナルド、ダ、ビンチ(Lionardo da Vinci 一四五二—一五一九)及びコレッツキオ(Correggio 一四九四—一五三四)諸氏あり。何れも百代の巨匠なり。若し一人是の如きものあらば、優に美術史上に誇耀すべき一時代を成すに足るべし。今や况や是等稀代の名家世を同じくして以太利に集るをや。是れ當代の美術が空前絶後の盛觀を呈したる所以なり。是の如きは文藝復興期に於ける以太利美術の概況なり。

然れども人文史上より觀する時は、美術は寧ろ當代一切の事物に貫通せる近世的大精神の一面の發表に外ならず。喩へば將に來らむとする大活劇の序幕のみ。十五六世紀の交に當り、是大精神を蘊藏したる要素は獨り古代文藝の復活のみにあらず。印刷術の發明の智識專有の弊を打破して一般人心に偉大なる影響を及ぼすあり。亞弗利加、亞細亞、兩大陸の探検と亞米利加新大陸の大

文藝復興は將に來らむとする大活劇の序幕のみ。

古來歴史上に於ける以太利の地位。

以太利以外の於ける科學的知識の進歩。

發見とは、從來の才智を革新し、隨うて諸般の科學的研究に新動機を予ふるあり。又先に數述べし如く、中世の封建割據の制度漸く衰へて國家の軀制漸く整備するあり。是等の事情は交貫連結して、冥々地に歐洲の思潮を回轉し、遂に發して宗教革命の大活劇を演出するに到れり。而して是大運動の中心は實に以太利にあり。

熟案するに以太利は古來歴史上に一種特異の位地を有したり。即ち曾て古代羅馬の宗教的羅馬に遷りたる橋梁を爲し、是邦は今や反對に宗教的羅馬をして却て古代羅馬に退轉せしめたり。以太利は歐洲最古の文明國にして、隨て其思想の發達に於ても常に全大陸の先驅たりき。封建制度初めて衰へ、自由個人思想の發達したるは是邦より。文藝復興は是を以て先づ以太利に行はれ、漸く延いて西北諸國に汎濫せり。是れ多年無意識に思想の自由の爲に煩悶したりし歐洲の民心の爲には一條の導火線に均しかりき。

當時諸國に於ける科學研究及び發明の勃興は、實に驚くべきものありき。望遠鏡は一千二百五十年に『コムパス』は一千三百〇二年に、紙及び硝薬は一千三百二

十年頃に印刷術は一千四百三十八年に、何れも發見せられ、從來寺院僧侶の寶物たりし、ギルキリウス、ホメーロス、アリストテレス、プラトーン諸氏の典籍は自由の市に求むべし。亞米利加新大陸は、一千四百九十二年に發見せられ、喜望峯は一千四百九十七年に回航せられ、コペルニクス氏(Copernicus)一四七三—一五四三は一千五百〇七年大陽系の研究を創め、一千五百三十年地球の自轉を證明せり。十五世紀の宗教界は、サデナローラ氏(Savonarola)一四五二—一九八の血を以て終りしが、十六世紀は更にルーテル氏を迎へたり。ハイム、ベーコン、ホッブズ、デカルト等の哲學者は是間に輩出し、『スコラスチック』學派の殘虐を去りて、近世哲學を起したり。是時に當りて佛蘭西、西班牙、英吉利、埃地利等に於ける封建制度は、全く其勢を失ひ、何れも専制王國となりぬ。是氣運に乗じて起りたるものは即ち宗教革命なり。

宗教革命。

宗教革命は文藝復興と共に中近二世の過渡を標示せる一大事實なり。其因果の顛末は即ち近世史解釋の爲に必須の鍵輪なり。左に其大綱を述べむ。

羅馬教會と獨
乙民族。

時遷り世進み、國家及び個人は漸く自家存在の眞意義を自覺し初めたり。中世の末葉に於ける一切の事物は、將に來らむとする大革新の準備の爲に方に色めき來れり。滄らざるものは獨り羅馬教會のみ。今や新智識の勃興に際して使徒時代の舊態を維持せむと欲す、豈夫れ得べしや。夫の化肉トランスメンテーションの如きもの如何にして實驗科學の首肯する所たるを得べき。『スコラスチック』學派の神學及び哲學は、尙ほ諸邦の大學に行はれたり。然れども有識者は素より是を信ぜず。古文學の復活に伴へる批評の鋭鋒は正に宗教の方面に落ち來れり。羅馬教會の根本的改革は遂に避くべからざるなり。

宗教革命の中心は獨逸にあり。由來獨逸民族は歐洲の中に就て最も敬虔の信念に富む。中世の間は殆ど一意羅馬教會の旨を奉躰し、睽違不信の行爲は他國民に比して遙に慙かりき。サデナローラ氏がフロレンスに於て彈劾せられ、フロラのジョアシム氏(Joshim)——一二〇二死死が其「不滅の福音」を著して三位一躰説を改造し、英吉利のウヨルフ氏(Wyolf, 一三二四——八四)が法王を非基督教徒と痛罵したる時に當りて、獨乙民族は尙ほ寧ろ羅馬教會に同情を表

贖罪販賣。

井ツテンベル
に於ける
ルーテル氏の
抗議。

はしたりき。今や彼等は、決然として衣を振て起ちぬ。其堅實なる所信を、確乎たる意志とに據りて、是大運動の中堅核子たりし風度は、歴史上の一大偉觀なり。而して其陣頭に立てるものをマルティン・ルーテル氏(一四八三——一五四六)とす。

十六世紀の初め、レオ十世法王となるや、羅馬教會の富財は匱乏の極に達せり。乃ち説を爲して曰く、是れ末世にありて人類の罪惡が尙ほ救濟せられ得るは、一に教祖取蘇の無邊の功德と、幾多聖者の善積せる善行とに職由す。是功德善行の時蓄は使徒ペートル氏及び其相續者の管理する所なり。是時蓄の分配を待て各人は初めて其罪惡を消滅し、以て天國に到るを得べし。而して其分配を享受するの法は、淨財を喜捨にするにありと。是に於てか所謂贖罪の販賣は僧侶の手によりて廣く行はれき。既犯未犯、死者生者の一切の罪障は金錢の力によりて消滅し得べしとせられたり。是生死靈魂に關する神聖なる一大事が、黃白によりてを有せらると云ふが如きは争でか當代の識者に聽かれむや。是に於てルーテル氏は有名なる九十五箇條の告文を井ツテンベルの寺門に掲げ公

ルイテル氏と羅馬教會。

々然として贖罪贖賣の聖教の本義に悖戻せることを辨明せり。是れ宗教革命の發端なり。

是痛快なる反抗は一世の耳目を聳動し、多年教會の非行に苦めるもの響の如くルイテル氏の聲に應じたり。法王も遂に黙視すること能はず、氏を羅馬に召喚せり。ルイテル氏深慮是に應せず。事を僧正に具陳して裁斷を求めたり。僧正ルイテル氏をして其所説を撤回せしむ。氏斷然として聽かず。潜に井ツテンベルヒに退き、靜に大勢を觀察せり。斯くて彼は異端として彈劾せられぬ。然れども彼れ少しも驚かず、沈毅堅忍以て其所説を宣傳せり。幾もなく危害の身邊に迫れるを看取し、其意見の是非を公會の判斷に所へたり。蓋し公會は從來の慣例上、法王權との衝突を裁決する唯一の方法なりければより。彼は更に同時に淨罪界、懺悔、赦罪に關して從來の教義に反對の説を發表したり。

ルイテル氏は是處置はやがて法王の至上權に對する公然たる否定にして、兼て教會僧侶の傳説を排斥し、個人的判斷の、絶對的真理を主張したる者なり。從來教義の解釋は法王の權内にあり。然れども今や人生の指導者は聖書に非ず、法

羅馬教會の死活問題。

王に非ずして個人なり。聖書は全く自家自由の思想によりて解釋せらるべしとせられたり。是れ即ち羅馬教會權の死活の危機なりと云ふべし。

是に於て法王はルイテル氏に嚴令して其一切の著述論策を燒棄せしめ、若し従はされば直に破門に處せむと威嚇し、同時に令を獨乙の侯的に傳へて其捕縛及び處刑を命じたり。ルイテル氏少も怯まず、却て法王を彈劾して基督の罪人となし、遍ねく基督教國の君主に檄して、其暴虐を膺懲せむとを求め、更に群衆歡呼の間に宗法の書典及び破門令を火中に投じき。是れ實に一千五百二十一年一月なり。彼は愈、勇を鼓して教會の弊害を極言し、一々神學の誤謬と政略の過失を指摘せり。獨乙帝カル、五世は是改革の氣焰を沮遏せむことを務められたも、時既に遲し。當時の有力なる學者は多くルイテル氏に加擔せり。

是に於て帝國國會は遺般事跡を決せむが爲にザルムスに招集せられルイテル氏も亦召喚せられたり。然れども彼の志の遂に奪ふべからざるを見るや、カルル怒て國外に追放せり。然れどもザクセンの撰侯彼をワレトフルロの城内に庇護せり。彼の屏居の間、改革の氣勢愈々揚り、其勢瑞西に及び、ツヰンクロー氏

ザルムスの國會。

「プロテスタント」

(Zwingli, 一四八四—一五三一)を先導とせる一團の改革家は遂にルーテル氏に反響せり。

獨乙帝カル、は更に一千五百二十九年を以て國會をスパイエル府に開き、改革の憂延を防止せむとせり。然れども當時ルーテル氏の主義は廣く侯伯國の間に浸潤せしかば、是等の諸侯及び諸市は共に是處置に反抗せり。「ブテ、スタント」の呼稱茲に始まる。其翌年アウクスブルクの國會開かるゝに際し、改革派はルーテル氏及び其助手メラノヒトンの編述せる後人の所謂アウクスブルク認書なる事を呈出し、大に羅馬正教の過失を痛論せり。然れども是國會は全然是を排斥し、且其説の大部分を彈劾せしかば、新教派(改革派)は茲にシニマルカルドに集まり、新に攻守同盟を締結せり。是を宗教改革の組織完成の時期となす。事是に到りて戦争は遂に避くべからず。然れども一千五百五十五年のアウクスブルクの平和によりて、改革派は全く羅馬教會の束縛を脱し、獨逸人は獨乙國內に關する一切の宗教的事件を料理するを得ることとなりぬ。是より後六十四年にして、一大宗教戦争再び破裂せり。是れ所謂三十年戦争なり。是の戦争は一

アウクスブルクの平和。

千六百四十八年に於ける、エストフハレンの和議に終りぬ。是和議によりて、獨乙に於ける新舊二教は孰れも同等の權利を得、多年の確執は茲に其終局を告げぬ。是れを日耳曼民族に於ける宗教革命の大都とす。

宗教革命は種々の事情によりて其預期の目的を果さざりき。然りと雖ども基督教の組織、教義及び其れと國家との關係に於て一生涯を開拓せり。文藝復興によりて其端緒を開かれたる近世歴史の根據は茲に到りて略々確定せり。今そが基督教に及ぼせる影響を擧れば、教義に就ては、新教派は聖書を以て唯一の證典とし、從來一切の傳説、解釋、命令を抛却せむことを主張し、ルーテル派は唯其聖書に矛盾せる部分のみを棄てむと欲し、又カルビン派は聖書の命令せざる一切のものを否定せむと主張せり。是三派の執る所多少の差ありと雖も、聖書を唯一の證典とし、從來の傳説に拘泥せざるの點に於て其軌を一にす。而してマリア及び天使の崇拜は均しく罪惡として非難せられたり。教會組織に關

宗教革命と基督教。

宗教改革革命後の宗教と國家との關係。

しては、新教徒は、法王の主上權は素より從來の宗法を擧げて是を非認し、且僧侶の無妻制を非難せり。彼等は又法王の使徒相續を否定し、且身を僧籍に置くのも政治上の主權に服従すべきとに於ては、毫も俗人と異なる所なしと論ぜり。若し夫れ禮拜に就きては、從來羅旬語によりて爲されたる祈禱にも是より後其國語を用ふると爲り、説教は廣く行はれ、讚美歌及び音樂も亦盛に行はれたり。是等の改革に於て新教徒は多少ルーテル派と異なる所あり。然れども其大體の精神に於ては素より相同し。ルーテル派は今日も尙ほ自ら呼ぶに新教徒を以てせず、『エフハンゲリスト』を以てせり。

宗教と國家との關係も、宗教改革以後は從來も全く其趣を異にせり。抑々近世の國家が中世のと異なる點凡そ二あり。其一は國民的意識の發達なり。是れ以太利、獨乙、英吉利、佛蘭西に於ける國民文學の發達を催起せると同一の原因によりて興りたるものなり。而して從來羅馬帝國の餘波を承けて各國民の間に存在せし世界的王國の觀念は漸く消滅し、一切の文物主として國家及び國民の利福の上より打算せらるゝの傾向を成せり。教會も亦是影響を受け、

從來の世界的なるもの、漸く國家的性質によりて潤色せられ、國民的宗教の觀念隨うて興起せり。其の二は中央集權の進歩なり。各國の境域内に於ける大小の侯伯は、漸次其勢力を失墜し、其土地は帝王の併呑する所となれり。又常備軍の設置と共に、中世以來の騎士制度ものづから衰微せり。是等の事情は、何れも國家統一の事業を助成したる者なり。

是一般の傾向につれて國家の宗教を見ること又昔日の如くならず。嘗に昔日の如く相提携扶持せざるのみならず、陰然是を敵視し、内外より是を拘束し、以て自家の目的に服従せしめずむば止まざるの勢を示めせり。教會は一見すれば全く自由なるが如し。然れども其僧侶は國家監督の下に其教育を受けざるを得ず、其の保護事業は國家の意志を逢迎するに非ざれば享受することを得ず。見るべし、近來國家宗教との關係は、其中世に於けるものと全く顛倒せることを。是の如きは宗教革命以後、英佛獨諸國に於ける基督教會の狀態なりとす。

以上略々文藝復興と宗教革命との顛末を叙し了れり。是を要するに是二

大事實は、一面に於て、中世主義の滅亡を示めし、他面に於ては、近世思想の方針を指定せり。中世に於ける宗教的形式主義は自然科學の進歩諸々の地理的發見、國民的意識の覺醒、及就中文藝復興によりて其崩解の端緒を啓きぬ。是自由個人の精神の凝結する所、宗教革命となりて茲に其打破を完成せり。是宗教專制一度破壊れてより、歐洲の文物は俄に生氣を回復し、哲學、文學、美術の各方面に向ひて活潑々地の發展を遂げたり。是等の事情は次章に於て述ふる所あるべし。政治上殊に注意すべきは羅馬教會の勢力を失ふと共に、歐洲歴史の中心は南部羅馬民族を去りて北の方日耳曼民族に移れること是なり。

第九章 近世

エストフレン平和以後の歐洲。——自然科學の進歩。——天文學の勢力。——哲學。——經驗派。——ベークン氏の説。——推理派。——アカーント氏。——經驗派と推理派との比較。——二派の主要なる哲學者。——兩派の批評。——カント氏の哲學上の位置。——カント氏の説。——文學。——英吉利。——獨乙。——感情派文學の興起。——感情派文學と基督教徒。——發展派。——自然派。——「自然に歸れ」。——ルソー氏の説。——自然派の旗章。——尙古派。——尙古

エストフレン
平和以後の
歐洲。

派と文藝復興との比較。——#ンケルマン氏とレツシング氏と。——グーテ氏とシルレル氏と。——自由詩人としてのシルレル氏。——「イフロッグニ」『フッスト』。——美術。——彫刻の衰頹。——繪畫の全盛。

宗教革命の餘波、三十年戰の局を結びたるエストフレンの和議に於て其勢を收めしより、久年の戰爭に悩みたる歐洲國民は各、其内治の改善に力め、以て多年の宿痼を療養し、其利福を増進せむことに汲々たり。佛蘭西に於ける保護貿易の如きは其一例なり。交通機關の迅速なる發達も、亦是氣勢に伴へるものなり。海に航海の業盛に行はれ、陸には道路の建造殆ど完美を盡し、世界各國は漸く互市貿易の媒介によりて舊時の城壁を撤開せり。是商業の發達は、北方諸國の權勢をして遙に南部を凌駕せしめたり。其最も進歩せるは和蘭にして、英吉利、西班牙是に次ぐ。獨乙の商業は十八世紀の中頃まで極めて微々たる者なりき。是各國々力の増殖と共に文藝藝術亦大に振へり。帝王權は常備軍の力によりて益、其頂點に達し、往々にして強固なる專制政治を再現せるを見る。幾多

の戦争は王位の争奪の爲に行はれ、又一國獨り強大となりて他邦に危害を及ぼすの虞ある時は、列國同盟して其跋扈を防遏し、以て各強國の間に權力の平衡を維持せむことを力めぬ。例せば佛蘭西は久しく澳大利を凌駕せしが、西班牙王位繼承の戦争によりて、權力の平均は英國の手によりて回復せられたるが如し。是間其政治上の大事事件は、瑞典の没落、魯西亞及び普魯西の勃興を最となす。英吉利の海上に主權を占めたる、其亞米利加の殖民地を失へる、亦一方の大事事件なり。十八世紀の末葉に近きて、千七百八十九年の大慘劇を預告せる一種の革命的思想が、文學及び政治の上に汎濫せる、亦大に注意すべき事實なりとす。是をユーストフ、レンの和議より佛蘭西革命に到る百四十年間の梗概とす。

自然科学の進歩

自然科学の進歩は是時代の一特徴なり。今天文學に就て是を言へば、先にユヘルニクス氏が從來のプトレミイ説の誤謬を發見して、地球中心説を破りしより、ケプレル氏の遊星の軌道及び運行に關する所謂「ケプレル」則の發見あり。次で以太利人ガリレオ氏はケプレル氏の説を紹述して地動説を唱へしが教會

天文学の勢力

の迫害を被れり。然れども是精神は近世に入りて愈々熾盛となり、ニュートン氏(Newton 一六四二—一七二七)に到りて初めて宇宙引力の大原則を發見し、斯學の上に一大刷新を施せり。數學に關してはニュートン氏及びライブニッツ氏は同時に微分法を發見し、瑞西の數學家オイレル氏(Euler 一七〇七—一七八三)亦幾何學に幾多の新説を加へ、又器械學に就きて種々の發明あり。英人デビル氏(Napier 一五五〇—一六一七)は、函數法を發見して大に數學上の計算を簡易にせり。其他物理學、化學、動植物學、醫學等にありても、碩學大家の新機軸を出せるもの、一にして足らず。其二三を擧ぐれば、獨乙人ケリツク氏(Gerihole 一六〇二—一八六)と英人ボイル氏(Boyle 一六二六—九一)とは排氣器を設計且完成し、米人フランクリン氏(Franklin 一七〇六—九〇)は電氣を發見し、瑞典人リンネウス氏(Linnæus 一七〇七—七八)は植物學に組織を興へたり。殊に近世物質的文明の進歩に大關係を有せるは蘇格蘭ワット氏(一七三六—一八一九)の發明に係る蒸氣機關となす。是等自然科学は思想解放の第一の結果にして、又其進歩は曠て益、是自由の傾向を催進せり。就中近世國民の人世觀及び世界觀に大影響を及ぼしたるものは、

天文學を以て最となす。蓋し吾人の棲息する世界を以て宇宙の中心に存在する不動の天體とせる舊來の天文學は、中世の沈滞枯死せる宗教的形式主義を維持するに於て少からぬ力を有したり。今や地球は却て太陽の周圍を回轉する一游星なりと證せらる。是地球中心説の仆るゝと共に、人間中心説も亦隨て破れ、茲に世界人生に對する觀念は根本より刷新せられたり。是に於てか從來宗教の訓る所は多く架空の妄想なりしこと、漸やく知られ、隨て其他の自然科学の研究に最も活潑なる動機を與へぬ。是を要するに、天體運行説の確立は、同時に國民の生活及び思想の運動改革を喚起せり。

哲學。

哲學上の進歩も亦自然科学に劣らざりき。中世の『スコラスチック』哲學の宗教革命と共に斃れてより、歐洲の哲學は茲に全く新たなる根據の上に再造せられざるべからざりき。而して是新たなる根據の上に二種の哲學現はれぬ。一を經驗派とし他を推理派となす。

經驗派。

經驗派の成立は自然科学の發達と最も密接なる關係を有す。主として英吉利

ベーコン氏の

に行はる。フランシス・ベーコン氏(Bacon)一五六一—一六二六實に是が發起者たり。氏以爲らく、中世以降の哲學は要するに空論のみ、名目宗門の争のみ、『スコラスチック』學派の哲學者はアリストテレス氏の論理學を其金科玉條となせりと雖ども、是れ素思想の形式的法則を吾人に訓へ得るのみ。吾人の研究せむと欲する事實、其物の眞偽に就ては何等の判定を爲し得べきものに非ず。從來の哲學が數百年の諍執を累ねて而かも遂に一の得る所無かりしは、畢竟眞理其物に就て根本的誤解に陥りたればなり。是誤謬を脱するの道二あり。第一、客觀的には、一切知識の根據を經驗の上に立て、自然科学の研究の結果に就て絶対的敬意を表せざるべからず。第二、主觀的には、吾人の精神より前代の傳説、若くは證典に對する盲信憑依の念を洗刷し、虚心平氣、以て經驗的事物に接せざるべからず。眞理に達するの道唯是經驗に由るの外無し。而して其研究の方法は須らく歸納的なるべし、從來の哲學の如く演繹的なるべからず。アリストテレス氏の形式的論理學は寧ろ推理の誤謬を發見するに力あり、眞理の探究には別に歸納的論理學を要す。是經驗派的精神は、普くベーコン氏以後に於ける英

推理派。

國の哲學者を影響し、後年カント氏の批評哲學の興起するまで、大陸に於ける推理派と兩々相對峙せり。
推理派は從來の傳説證典を拋棄し、全く自由の精神を以て眞理を討究せむとしたり。然れども其見地の根據は二者相反す。佛人デカルト氏 (Descartes 一五九六—一六五〇) を以て是派の始祖となす。

デカルト氏

デカルト氏の哲學は、獨乙の「神秘學派」の説を承け、純粹なる思想の中に眞理を求めむとせり。其説の略に曰く、眞正の知識は確乎不動の基礎に立たざるべからず。是基礎を求めむが爲には、吾人先づ一切の事物を疑ふべし。一切の事物にして疑ふべくむば是れ世に信憑すべき知識無きなり。もし何等か疑はむと欲して遂に疑ふべからざるものあらば、哲學は茲に其成立の基礎を求め得べし。今吾人の疑はむと欲して遂に疑ひ得ざるもの、一あり。何ぞや、我の存在是なり。何となれば斯の如く一切の事物を疑ふ所の主體は、實に我に外ならざればなり。是故に「我れ考ふ故に、我れ存す」(Cogito ergo sum) と云命題は一切眞理の基礎たる

經驗派と推理派との比較。

二派の主要なる哲學者。

べきものなり。デカルト氏は一命題より、吾人の精神の性質及び眞理の條件等を打算し、神の存在を立證し、身心二者の二元論を唱へ、是二元の關係の説明の爲に、後來幾多の哲學者を惹起せり。

デカルト氏以後の哲學者は其説に於て必ずしも一ならず。然れども純粹の思想の中に眞理を求め、全然經驗的知識を蔑視したるの點に於ては諸家其軌を一にす。經驗派は吾人の觀念を以て一に經驗の所得なりとし、推理派は精神本來の所有となす。彼は以て外より感受したるものと爲し、此は以て内より生出したる者となす。彼は吾人の認識を以て感覺の産物となし、此は思想の生見なりとなす。此争は殆ど百餘年の間、英吉利の經驗派と大陸の推理派との間に決する所あらざりき。今二派の主なる哲學者を擧ぐれば左の如し。

經驗派(英吉利)

推派(大陸)

ヘロニム(既出)

デカルト(既出)

ホッブズ(Hobbes 一五八八—一六七九) スピノザ(Spinoza 一六三二—一七〇四)

ロック(Locke 一六三二—一七〇四) ライブニッツ(Leibniz 一六四六—一七一六)

兩派の批評。

トーム(Hume 一七一—一七七六)　ナルフ(Nolte 一六七九—一七五四)

然れども是二派が何れも極端に走りて、中庸の眞理を逸したることは、後年に至り漸く學者の注意する所となれり。若し經驗派の言ふ如く、吾人一切の概念は單に經驗より生ずるものならむには、常に經驗以上に何等の哲學の成立し得ざるのみならず、經驗的哲學其物も亦均しく成立し得ざることと爲るへし。何となれば經驗は素と個々の感覺に就て吾人に訓ふる所あれども、主觀以外に於て何等普遍の眞理を確定し得べき者に非ず。隨て依て以て何等哲學の成立し得べき謂れ無ければなり。故に經驗派は、其反對説たる推理派を仆さむと欲せば、亦自ら仆れざるを得ざるべし。是を以て是派の哲學は遂にヒューム氏の懷疑論に終りたり。合理派に於ても亦同じ。是派の説によれば、觀念の明瞭と確實とは眞理の規準なり。然れども是規準の信憑し難きことは、同一合理派の中にスピノザ氏とライブニツツ氏の如き氷炭相容れざる意見を有せるものあるを見ても知らるべし。スピノザ氏は萬有一昧論を執り、ライブニツツ氏は元子論(即多元論)を説く。彼は凡神論にして、此は個體論なり。蓋し哲學の第一に説明

すべきは實在世界にあり。全く經驗を離れたる純粹なる思想は、何等實在の知識を與へ得るものに非ず。實在は經驗し得べきも、思考し得べからざるなり。是に反して經驗哲學は、經驗を過重し理性を過輕せり。以爲らく經驗は一切知識の根源なり。理性の職能は只感覺を受納するにあり。吾人の觀念は只感覺によりて立證せらるゝ限に於て信憑し得べしと。是れ全く理性の能動的一面を遺却せる説なり。

推理説は是に反して、經驗を過輕して理性を過重せり。以爲らく、感覺は唯事物の皮相を示めす。其實體は獨り是を認識し得べし。理性が感覺より受納したるものは虚偽なり。唯そが是を考察したる處に初めて眞理あり。故に經驗は寧ろ眞理の敵なりと。是亦經驗の性質を誤解せるものなり。

是二派の紛争結で解けざること久しきや、眞理は是兩極端の中間に存すること漸く注意せられたり。然れども是中間を何處に求むべきか、是れ次に來るべき最も困難なる疑問なりき。多くの學者は是疑問を解釋せむが爲に起りしが、何れも淺薄皮相の折衷主義に終らざるは無かりき。ナルフ氏の如き其一例なり。

カント氏の哲學上の位置。

カント氏の説

是二派の説を根本より調和し、説明し得る所の一層高上の原理を發見し、以て近世哲學に一振盪を加へたるものをカント氏(Kant 一七二四—一八〇四)となす。且カント氏以前の哲學者は、其合理派たると經驗派たるとに論無く、一個の重要な論點を抛却したり。彼等は認識の根據を或は理性の上に、或は經驗の上に置けり。然れども認識、其物の性質及び範圍に關する諸問題に想到せざりき。抑も吾人の認識は如何なる點まで信憑し得べきや。是れ一切哲學上の議論に對する先決問題たるべきものなり。是れカント氏が從來の學派を獨斷派と名けし所以なり。氏は是新問題を把りたる結果として、從來の諸學派と全く別種の態度を取れり。所謂批評主義是なり。彼は是批評主義によりて久しく推理派と經驗派との間に横はれる宿疑の根本的解釋に到達せり。吾人は茲にカント氏の説を述ぶる追無し。詮する所、氏は吾人の認識に先天的根據を與へたり。以爲らく形式と内容とは吾人の認識の二要件なり。理性は形式を與ふ、然れども其の内容は是を經驗に待たざるべからず。經驗は内容を供ふ、然れども理性によりて統括せらるゝに非ざれば、散漫にして未だ認識の對

象と爲るに足らず。是二者は吾人の認識の成立上唇齒輔車の關係あるものなり。而して是形式は吾人の理性が先天的に、即ち一切經驗に先ちて、有する所の能動的職能なりと。是批評哲學は三個の書に依りて發表せられき。即ち純粹理性批判は理性の實在理性批判は道徳性の判性批判は審美性の何れも先天的形式を説明せり。前者は一千七百八十一年に、中者は一千七百八十八年に、後者は一千七百九十年に表はる。カント氏以後歐洲の哲學界に永く實驗派と推理派との幼稚なる紛争を絶ちぬ。是の如きは宗教革命より十八世紀の終りに到るまでの歐洲哲學の大勢なり。

翻て是を文學に見る。宗教革命の最も著しき結果の一は先にも説きし如く國民文學の成立にあり。

先づ是を英國に觀むか。是より先き文藝復興の餘波は、是島國に「サクソン」的天才を復活し、次で以太利詩人の勢力はサレノ、スペインセル諸氏より遂にシエーキスピア氏を出し、茲に世界文學史上の一偉觀を現せり。更に宗教革命の風潮之に加

英吉利。

文學。

獨逸。

はるや、發してパンヤン氏の『天路歷程』となり、結びてミルトン氏の『失樂園』となり、共に基督新教の爲に萬丈の光輝を放てり。然れども革命の氣勢漸く收まり、所謂『ラシヨナリスム』(推理論)の時代に入るや、文學も亦乾燥枯淡の理義に陥り、詩文は想よりも形を尙び、情よりも理を旨とせり。是に於てかドライデン、ポーア一輩は盛名を詞壇に馳せぬ。獨逸に在りてはデナイシウス(Denisius 一六一〇死)チンクレンツ(Jinkela 一五九一—一六三五)諸氏の所謂學、詩より、十七八世紀の交に至りては、文壇殆ど詩歌の醇雅なるものを見ず。民族固有の詩歌は多く煙滅し、學識を銜ふもの獨り跋扈せり。是れバスタロヂー氏の先驅として有名な教育者コメニウス氏(Comenius 一五九二—一六七二)が羅句語の普及を主張せし時代なり。少しく降りてゴットシエンツ氏(Gottsched 一七〇五—一六六六)とボドメル氏(Bodmer 一六九八—一七八三)との間に佛蘭西文學に就て諍執ありし頃より、歐洲文壇の生氣漸く活動し初め、推理派文學に對する反動として所謂感情派の文學は是頃より漸く起れり。是感情派衰へて次に自然派起り、自然派廢れて次に尙古派代り、遂に今世紀の初期に於ける所謂中世派(ローマンチック)の勃興

を見るに到る。道般の歴史的發達は是時代に於ける歐洲人心の推移を表現して頗る趣味あり。左に是を畧述せむ。

先にも言ひし如く、所謂推理派的精神の一世を風靡するや、文學も亦其影響を被り、思想の幽玄、哲理の深奥を以て其極致と爲せり。是に於てポープ氏一流の哲學的、はた教訓的詩歌起り大に行はれぬ。然れども人生の多面、多趣、且多岐なる、是推理的一面のみを以て満足せらるべきに非ず。道理と共に感情を有する人心は、漸く是無味なる理談の外に、おのづから情緒の渴仰を満たすに足るべき文學を求めぬ。是に於てか、天然、祖國、友誼、戀愛、任俠等、凡て人生の情的活動を表はせる資材は新たに詩歌の内容となり、直情徑行、ひたすら天真の流露によりて慰藉を求むるの風に傾きぬ。是に於てか從來の教訓哲理を旨とせるもの、若くは中世武士の冒險譚の代りに、材を社會家庭の歴史に求むる小説詩歌は漸く行はれぬ。是種の文學にありては從來の荒唐不替若くは鋪張夸大の想像全く廢れ、其點染摹寫する所専ら人生世態の實相にあり。其事實も亦王侯國家の大

事よりは寧ろ市井日常の生活にあり。是騎士的傳奇より市民的小説に移りたるものは、初めて是を英國文學に見る。是れ是國には大陸諸國の如く戦亂多からず、隨て市民的生活の發達比較的に早かりければなり。「我家は是れ我城廓」とは英國當時の俚諺なりき。文學史上是傾向を代表せるものはフールド、テック、(Fielding 一七〇七—一七五四)ステルン(Stern 一七一三—一六八)、及びゴールドスミス(Goldsmith 一七二八—一七七四)の諸氏とす。ペルシー氏が英國民族の古謡を蒐集したることも、亦是風潮を表はせり。

是等感情派の文學一度び傳はるや。大陸の人心は其久屈の勢を展べ、均しく手を擧げて其真情流露の響きを歓迎せり。獨乙にありて殊に然りき。クロツプストック氏(Klopstock 一四二四—一八〇三)實に是が先驅たり。氏の大著は主として宗教的詩歌に存せりと雖ども、其抒情詩は慥に感情派の産物なり。意越神往の餘、間々神經的なるものありと雖ども一として熱情の聲ならざるは無し。感情派の文學は基督新教徒の間に昌へしこと、是れ注意すべき事實なり。是派の詩人が主として其の詩材を新教僧侶の家庭にとりたる、亦怪むに足らざるな

感情派文學の
興起。

感情派文學の
基督新教徒。

り。例せばゴールドスミス氏の『エイクフェールドの牧師』の如し。其主人公たる牧僧を描くにも作者は極めて自由の觀察を用ひ毫も其缺點を假借せず。是牧師は其淺薄なる學識を衒ひ、其妻は料理の技巧を、其娘は容貌の秀麗を誇れり。妻と娘とは高く自ら標置し、意外の出世榮達を夢想して自ら失敗を招き、牧師亦其虚飾の爲に誤らる。斯くて一度び窮境に陥るも終に其終を善くす。是一牧師の家庭に於ける一起一伏の間事或は笑ふべく、或は怒るべく、或は悲むべく、恨むべし、人情の發揮具さに其精微を究む。蓋し感情の自由なる活動は儀禮禮典の中に拘束せられたる舊教徒の間に見得べからず。否、舊教徒は實に感情派の敵なりき。

是の如く感情派は推理派の反動として起りたりと雖ども、二者素其根本思想に於て相容れざるものに非ず。其尙ぶ所彼は理に傾き、此は情に偏せり。然れども凡ての形式主義に反して、人性の自由なる發展を推奨したる點に於ては、共に近世の初めに於ける所謂「ヒューマニスム」の精神に本く。故に是二者は素と相反對すべき者に非ず。却て互に相補充すべきものなり。是二者を結合して一躰

發展派。

となし、以て近世思潮の完成を企てたるものをヘルデル氏(Herder 一七四四—一八〇三)及びルソー氏(Rousseau 一七一二—一七八八)となす。

ヘルデル氏の説は假に發展派と名くべし、要は人性各部の圓滿なる發展を以て人生の理想となすにあり。是説は近世の理想的倫理學派の源頭にして、一面はダルボン氏以下の進化説に基し、他面はグリーン氏以下の自然論を起し、哲學史上其勢力尠からず。然れども當代の社會を動かしたるの點に於ては遂に遙にルソー氏の自然派に及ばず。

自然派。

其説の當否は暫く言はず、其社會人心に及ぼしたる實際上の勢力を以て是を言へば、ルソー氏は實に近世の一大人物なり。其説の旨とする所は、ヘルデル氏と同じく、素と推理派と感情派との統一に存す。然れども其立場は全然異なり。今簡短に氏の主義を表はさば、『自然に歸れ』の一語に歸すべし。

自然に歸れ。

『自然に歸れ』是れ當代の紛々規律なき思想界にありては、實に野に呼べる人の聲なりき。デカールト氏以來の哲學は、徒に組織學系の時と共に加はるゝみ。人は將に幾多の新學説と新學語とに忙殺せられむとす。而して眞理は遂に見

ルソー氏の説

るべからざるなり。倫理の標準は學説の浮動と共に一定せず。而して宗教は其新舊を問はず、是を統一するの力無し。文學界に於ける感情派は、益々是紛糾に油するのみ。社會の人心方に噴遠乖離を極めたり。是の如きは大陸殊に佛蘭西に於ける思想界の状態なりき。是時に當りて人生の大原理を唱破して、思想及び道德の統一を叫びたるものは、實に是『自然に歸れ』の一語なりき。あゝ其説の何ぞ一に直截簡明なるや。

ルソー氏の説の最も明白に表はれたるは『エミール』(Emile)の一書にあり。以て爲らく、人は須らく其天性に隨ふべし。其一切の行爲は本能に導かれて初めて善なるを得。夫の學識禮文によりて其本能の活動を阻遏するものは、禍なる哉。人の世に生れたるや、働かむか爲なり。考へむが爲に非ず。教育にありても、生活にありても、其唯一の主義は須らく『自由』なるべし。凡そ何人も其生れながらの自然に放任せよ。然らば則ち一個の獨立善良の人たるを得べし。又其教育主義に曰く。教育にありては躰育を先として心育を後とすべし。行爲は常に思考よりも重ぜざるべからず。故に兒童には先づ農藝工作を訓ふべ

自然派の旗
草。

し。一切の書籍に手を觸れしむる勿れ。兒童は自ら發見し。且自ら學習すべきなり。世の所謂教育あるものは是れ他人の奴隸のみ。眞正の教育は凡て自主自由の發達に依らざるべからず。故に唯一の教師は經驗のみ。是極端なる自然主義は佛國當代の思想に大影響を及し、は素より論を待たず、悉いて後年大革命の遠因となれり。曰く一切の歴史的發達を蔑視す。曰く先哲教聖の典型を打破す。曰く専ら個人の經驗的知識に信憑す。是れを自然派の旗章となす。其根本精神に於て自然派は文藝復興及び宗教革命の事業を繼續せるものと云ふも敢て不可なきなり。

尙古派。

自然派の所説は主として倫理教育の方面にあり。是傾向の文學上に顯はれるものを所謂尙古派(Klassicismus)とす。自然派が理想とする所の自然人は實際^{ナチュラリスム}上得て是に摸倣すべからず。然れども是派によりて影響せられたる時の文學は出來得る限に於て近世に違からむとす。是に於てか尙古派は希臘を崇拜す。

尙古派と文藝

文藝復興の時代も亦尙古派と均しく希臘を理想とせり。然れども彼にありて

復興との比

は、只古代の皮相を摸倣せるに過ぎず。置に韻律言語の形式を取り、其哲學宗教の一邊を伺ひて以て希臘の人文を收容し得たりとなせりき。然れども此にありては則ち然らず。徒に己を虚うして他を崇ばず。全く自家獨立の見地によりて古代の思想を解釋し、其特殊の性質を失はずして、而かも能く古代の風尚を同化せり。是尙古派文學は獨乙を中心として歐洲各國に行はれき。其最盛期は即ち獨乙文學の黄金時代にして、グーテ氏及びシルレル氏は是時代を代表して永く史上に不朽の大名を刻したり。而して是最盛期に達するに先ち、一時古代文藝の摸倣を事とせる一派ありしは、蓋し事物の發達上ちのづからなる勢ならむ。井ンケルマン(Winkelmann 一七一七—一七八)レンマン(Lessing 一七二九—八一)諸氏は是に屬す。

井ンケルマン氏
グ氏。

井ンケルマン氏は希臘美術の熱心なる研究者たると共に嘆美者なり。其古代美術史一卷は、畢竟希臘美術の讚辭に過ぎず。其美術論の如きも、全く批判の標準を希臘の遺型に求めたり。其説に以爲らく、美に理想あり。是理想は一ありて二無し。渾然として分つべからず。其相は平等、其軀は遍通。何等個物性の

是を妨ぐるなし。喩へば水の如し。水の純良なるものは、無味、無色、無臭なるが如く、美の尤も圓滿なるものは、何等特殊の形相を有せず。個性は、缺點も、しくは、罪惡の存在を意味す。希臘美術は尤も是個性の發現に乏し。是れ即ちそが後世美術よりも高尙圓滿に近き所以なりと。是説は内容の表出を非美なりとする美學に所謂形式主義若くは抽象理想派に屬す。所詮は希臘美術より打算し來りたる者なり。

是希臘文藝の崇拜に於て、レツシング氏も亦敢て、ヤンケルマン氏に譲らざるなり。其美學及び詩論に於ては、アリストテレス氏の舊套を脱せず。其趣好の理想亦全く希臘的なり。氏は常に中世の所謂「ミンネ」歌人が春より麗はしき物を知らざりしを嘲り、口を極めて古代文學の沈靜典雅の風趣を稱賛せり。氏は、ヤンケルマン氏と共に一切の美は形式に存せりとなし、而して形式の美は線條輪廓の美に外ならずとせり。是故に氏は中世畫家が色彩の外に形式の一層高尙なる美を解し得ざりしを笑ひ、且油畫を評して是れ美術退歩の徴なりと斷ぜり。是れ皆ヤンケルマン氏に於けるが如く希臘美術を典型としたる論なり。

レツシング氏は一個の思想家として何等の新機軸を出さざりき。然れども其批評は獨乙文學の發達に偉大なる勢力を有しき。即ち當時ゴットシェット氏一輩が専ら佛蘭西文學に心酔し、其崇拜踏襲を是れ事とせる時に當り、氏が其文學書翰に於て唱導せる國民文學論は、氏は以後に於ける獨乙文學の基礎を確定し、其氣運を一轉せり。是點に於ては氏は獨乙國民文學の建立者として、又ゲーテ、シルレル二氏の先驅として、文學史上に重要な地位を保てり。

ゲーテ氏(Goethe)一七四九—一八三二とシルレル氏(Schiller)一七五九—一八〇五とは獨乙文學の全盛期を飾れる二個の紀念碑なり。尙古派の文學亦是二大詩人に於て最も圓滿なる發達を見き。今兩者の特性を比較せむに、ゲーテ氏は客觀詩人にして、シルレル氏は主觀詩人なり。前者は廣く胸襟を披きて萬象に對す。喩へば一面の明鏡の如し。世界の空相人生の奧秘、凡て映せざる無し。後者は深く理想の心境に往住し、其觀ずる所の一切は、理想的色彩を帯びざるは無し。故に其詩は技巧を尙ぶ。ゲーテ氏は感興自在にして筆墨是に伴ふ。真情露はし來りて直ちに人の肺腑に訴ふ。シルレル氏は則ち先づ是れを自家趣好

ゲーテ氏とシルレル氏と。

自由詩人とし
てのミルレル
氏の

の理想中に鍛錬し、洗練し、典雅なる古型によりて是を再現す。故に情火燃へず、動もすれば冷刻なる思索に陥る。而も一脈幽玄の詩趣、是に依傍すれば人をして神往せしむ。シルレル氏は技巧詩人なり。技巧詩人として其鑑賞を學識ある人士に待つ。ゲーテ氏の歌ふ所は主として人間自然の感情なり。是を以て『プロメテウス』『フハウスト』は孤負狷介の人、毫も修攝を加へず。シルレル氏の間を見るや。常に一種高尚なる價值を附す。故に其歌ふ所は理想的人物なり。是自然の情狀より人間を抜き去りて、一種超絶の世界に徜徉せしむることは、彼が詩歌の第一義なり。故に其劇詩の主人公は、多くは英邁の人物、其動作は是英邁なる人物が現實の境遇に抵抗し、若くは是を擺脫して其理想的願望に到達せむとする所の煩悶なり。是意味に於ては彼は一個の自由詩人と稱し得べし。例せば『盜賊』『フェエスコ』『ソルレンスタイン』『テル』皆是れ當代國家の羈絆に對する抵抗を描きしに外ならず。『オルレアンの少女』亦是れ祖國の自由を得むが爲めの熱情を寫せし者なり。

ゲーテ氏の傑作は『ヘルマン、ウント、ドロテア』『イフゲニー』及び『フハウスト』の三

『イフゲニー』
『フハウスト』
『フアン』

を推すべし。是れ皆獨乙文學研究者の愛讀して描かざる所なり。是中に就きて『イフゲニー』は婦人の、『フハウスト』は男子の、最高の理想を描寫せり。彼は純潔無垢、靜平安樂、一切の弱點と欠乏とを離れたる女子として描かれ、是は新教的精神を挟みて常に現在に満足せず不安且不定、念々不斷の精進の爲に自ら窮困する男子として寫さる。其感情の深激、意欲の高大、殊に後者を以て優れりとす。ゲーテ氏か入生觀は是一篇に於て現はれたり。そも、志大にして力是に副はず。人間の知能は盈尺の間に限らる。六尺の身は塊然として是土に留まれども、天高く地濶く、限りなき是渴仰の思を如何にすべき。『フハウスト』は是有盡の身軀を以て無限の寶庫に投じ、其處に悠久の安樂を求めむと欲しき。然れども其夢想せる眞と善美と遂に獲べからざるを見るや、彼れは茲に翻然として大悟しぬ。其理想如何に高くとも、畢竟是れ自己の影象、自己の觀相に外ならず。是れ『フハウスト』一篇の大觀なり。

故にゲーテ氏は安立の地を神に求めず、却て是を自家胸中の本性裏に求めたり。是境地に達せむが爲に彼は何等の天恵を須要とせず、一向自力によりて精進す

べしとせり。而して是を指導するものはベアトリチエのダンテ氏に於けるが如く、『フハウスト』にありては少女クレツヘンなり。かく婦人の力を尊重することばグーテ氏の一特色にして、彼が『イフヘグニー』に於て圓滿なる聖女と體現せしも、至醇なる人間の獨り女性によりて到達せらるべきを信じたれなり。

『フハウスト』がたどりたる理想的精進の途中に於て、邪惡の一面は惡魔『メホストフエリース』によりて表はさる。他方より見る時は、是れ十八世紀の罪惡の體現として見るを得べし。執拗、狹量、信仰真心を冷笑し、禮文、道義を嘲罵す。是れ即ちアルテール、ルソー、諸氏の倫理思想に非ずや。

シルレル、グーテ二氏を初めとして、十八世紀の劇詩の一欠點は、其人物の性格が考察感想に傾きて、動作に乏しきにあり。是れ是世紀の思想が、殊に其末葉に到りて、個人を過重するの風ありしに職由す。是欠點はシルレル氏以後の第一人と稱せらる、グリルバルツェル氏(Grillparzer 一七九一—一八七二)までも及ぼせり。其傑作『ザッポー』の如きは是例なり。

尙古派の文學は、十八世紀の末期に及びて一大新思潮と更迭せり。是思潮は佛

美術。

蘭西大革命以後の社會狀態に由りて惹起せられたるものにして、十九世紀前半に於ける一大勢力なり。所謂中世派(Romantic)是なり。

美術は文藝復興によりて十六世紀の間は前代未聞の全盛を致せしが、建築及彫刻は十七世紀より十八世紀に到るに及び漸く衰退に赴きぬ。其醇雅靜和の好尚、漸く廢れ、華麗浮靡、偏に激烈なる感情の表出を重するの風之に代りぬ。獨り繪畫は、以太利、佛蘭西、和蘭、西班牙の各國に盛に行はれ、能く先人未だ到らざる境地を開拓せり。

繪畫の勢盛なるに隨ひ、彫刻は自家の原則を棄て、却て繪畫的とならむとせり。浮彫先つ是目的の爲に創められ、所謂自由彫刻是に次ぐ。是に於て技工の規準は全く蔑視せられ、偏に目前の感動を與へむことを務めぬ。是れ其の衰頹せる所以なり。感情派と自然派とが一時文學界に流行せし如く、是時代の彫刻は、ひたすら精緻なる寫實によりて感情の表出を發現せむことを旨とせしかば、筋肉の張弛伸縮を寫すこと其度に過ぎ、衣服裝飾亦浮麗纖巧を究む。一見甚だ絢爛

彫刻の衰頹。

の美ありと雖ども人間自然の美容は遂に求むるに由無し。夫れ唯衣裳の紋飾、五情の發動を美となす。彫刻に固有なる典雅なる儀容、靜明なる風趣殆ど地を掃へる、亦宜なりと謂ふべし。彫刻家の有名なるものは、以太利にありては、ローレンツォ・ベルニニ(Lorenzo Bernini 一五九八—一六八〇)及び其亞流・アレンツァンドロ・アルカルディ(Alessandro Algardi 一五七八—一六五四)。佛蘭西にありては、シモン・ギラン(Simon Guillain 一五八一—一六五八)、フランソワ・マリヤン(Francois Girard 一六二八—一七一五)。和蘭にありては、フランツ・ヤクメノイ(Franz Duguesnoy 一五九四—一六四四)。獨乙にありては、アンドレアス・シュローター(Andreas Schluter 一六六四—一七一四)諸氏なり。

彫刻をして腐爛墮落に陥らしめたる同一の傾向は、繪畫に對しては、却て驚くべき幸運を與へぬ。是れ感情派及び自然派によりて代表せられたる時代精神を寫すに最も適恰せるものなればなり。當時歐洲の社會は普ねく戰亂に疲れ、人民は所謂近世的專制政治に苦めり。繪畫獨り是間に立ちて其全盛を究めたるの事實は、人文史上尤も注意すべしとなす。

繪畫の全盛。

從來繪畫は殆ど以太利に限られたるの有様なりしが、是時代に入りてより和蘭、西班牙、佛蘭西より英吉利の諸國に至るまで、普く流行せり。獨り獨乙にありては、三十年戰の創痍未だ癒えず、美術の發達亦隨うて尤も幼稚なりき。地理上の範圍と共に、其觀察の眼界亦擴張せられぬ。一方には舊教的傳説の中に無限の源材を得ると共に、他方には近世の新教的精神によりて、汎く實在世界の一切を包容し、天然の大觀より日常の小事に至るまで、一として資藉するを妨げず。禽獸及び無生物の如きも驚くべき巧緻を以て摸寫せられき。從來の歴史畫の傍らに新に風景畫、風俗畫等も亦加へられぬ。殊に注意すべきは、彩色法の進歩とす。而して是等の諸方面に通ぜる一大精神は實に寫實主義にあり。

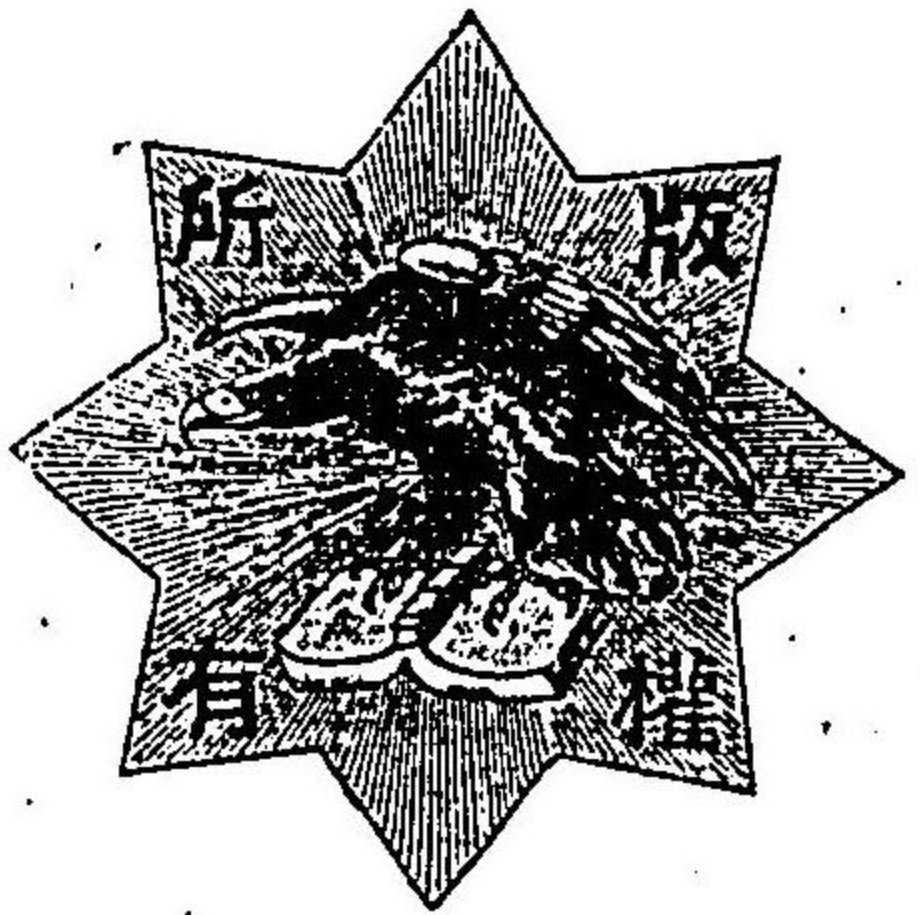
是時代の最も有名なる畫家を擧ぐれば左の如し。以太利にありては、曰く、アンニバル・カラッチー(Annibale Carracci 一五六〇—一六〇九)曰く、ドメニチーノ(Domenichino 一五八一—一六四一)曰く、キョー・ハニー(Guido Reni 一五七五—一六四二)ミケランジェロ・メッキー(Michelangelo Amerighi 一五六九—一六〇九)。西班牙にありては、曰く、セラメター(Don Liego Velasquez De Silva 一五九九—一六六〇)

曰クトリツヨ(Bartolomé Esteban Murillo 一六一七—一六八二)。和蘭にありては、曰
 へンローレンス(Peter Paul Rubens 一五七七—一六四〇)曰へんバート(Bartholomäus van
 der Helst 一六一一—一六五〇)曰へんアンファン(Anton van Dyck 一五六九—一六四
 一)。佛蘭西にありては、曰へんジャンサン(Nicholas Poussin 一五九四—一六六五)。英
 吉利にありては、曰へんジョナサン(Josiah Reynolds 一七二三—一八九二)等の諸氏なり。

提 要
 世界文明史終

明治三十一年一月十二日印刷
 明治三十一年一月十日發行

世界文明史並製
 定價金參拾五錢



著 者 高山林次郎
 發行者 大橋新太郎

印刷者 愛敬利世
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發兌元

東京市日本橋區
 本町三丁目

博文館

高等師範萩野由之先生著 (沿革地)

中等 日本歴史

全二冊 洋装背皮 正價金壹圓拾錢 郵税十錢六

附録

御歴代略表、天皇御系圖、諸國封建沿革略、大連三氏略系、藤原氏略系、平氏略系、源氏略系、鎌倉將軍略譜、北條氏略系、足利氏略系、足利將軍略譜、徳川氏略系、徳川將軍略譜

著者の我國史學に深きとは世皆已知る。本書は筆を日本の地形、建國の體裁、政治の變遷に起し、進みて太古史、近古史に及び、遂に廿七八年戰役、臺灣鎮定を終る。而して各史編未附するに、制度風俗の沿革を以てす、文辭明快、敘事富麗、而して特に前版の註漏を正し、最も現今の中等教育程度に適合ならんことを意を用ひられたるものなれば、中學教師範學校其他中等教育程度の學校教科書として、最も適當なる書なり、其紙質の良好、印刷の鮮明、製本の堅牢なる、亦前版に比して更に一層の改良を施せり。本書は各府縣中學校、師範學校等五十餘校の教科用書として既に御採用の榮を得たり

柏軒 松井廣吉先生著

新撰大日本帝國史

全壹冊 大判洋裝 紙數五百八拾頁 正價金四拾錢 郵税拾錢

日本歴史中、最も多く賣れ行きたるは實に本書なり。今や又大訂正を加へて益々完全のものとし、且つ空前の偉業として帝國歴史の一大盛觀たる征清戰の顛末を叙し、開戰の原因、海陸の諸戰、據和、凱旋、行賞、臺灣平定に至るまでを、綱を提げ、要を擧げ、簡潔の文を以て之を記し、以て日本帝國の歴史を完ふせり。

文科大學 栗田寛先生校閱

第一高等 學校講師 增田于信先生著

新撰日本小歴史

全壹冊 大判洋裝 紙數二百頁 密裝入 正價金拾五錢 郵税六錢

我が國史に精通せる増田先生が筆を執り、史學の老練栗田先生の校閱を受けたる完全なる歴史にして、神代の昔より征清戰の顛末及臺灣征伐に至るまで、綱を擧げ目を立て最も秩序善く、最も簡明に記述する其史なり。

羅山林 道春先生編

標記本朝通鑑

附録 皇 子 運 會 記、武 朝 職 部

全部八拾四冊 日本紙刷本箱入 和裝木版密刻 紙數四千七百枚 特別金拾圓 通運料全國金五拾錢

標記本朝通鑑は、江戸時代の儒宗たる林羅山先生の編する所、神代の昔より、後水尾天皇の元和三年に至る。首尾連貫、羅して遺らさず。日本歴史中の一巨擘たり。

今泉定助先生著

初等日本歴史

全二冊 和裝 正價金拾九錢 郵税四錢

四

學橋 大橋 穆先生編次

明治新刻 日本政記

全拾冊 木版 和裝 正價金壹圓貳拾錢 通運料貳拾錢

我國古來種々の歴史あり、其體裁文章皆第一得一失あるを免れず、而して其體裁の完全せる、其文章の簡雅なる、其議論の精絶なるは、實に羅山陽の日本政記を以て巨擘となす。讀む者をして、三千年の興亡治亂一讀の中に歴々として胸を掌に視るが如くならしむ。是れ此書の價々として、後人に傳稱せらるゝ所以なり。故に我國建國以來の沿革變遷の故を知らんと欲するものは、必ず此書を讀まざるべからず。

中山利質先生編輯 長山貫先生校訂

南 木 誌

全五冊 木版 和裝 正價金七拾五錢 郵税拾錢

楠公一門の忠孝大節千古に輝々たり、此書は正史實錄より野乘私記に至るまで、苟くも楠家に關する遺聞逸話を悉く網羅したるものなり。一讀當年の史に通ずべく、再讀忠孝の大義を發揮すべし、人々必讀の書なり。

五

萩野由之先生著

日本歴史評林

全二冊總クローヌ 特別價金壹圓五拾錢
金字入大判洋裝 目方八百
諸冊二尊大八洲を生成し、より、徳川幕府の末に至る。其間歴代天子の御行より名臣の言行、朝野の現象に就て、古今大家の論を集む。職見の卓抜、品性の精透、真に斯類の選なり、史を讀むもの必ず三冊せざるべからず。

内藤 耻叟 先生 校閱
大宮 宗司 君 校註

校註 神皇正統記

全一冊洋裝 特別價金拾五錢 郵税六錢
小中村義象、落合直文、萩野由之三先生校訂

水鏡大鏡

郵正合 價壹冊 金拾五錢
稅 冊 三 洋 錢錢裝

增鏡

郵正全 價壹冊 金拾五錢
稅 冊 三 洋 錢錢裝

大和田建樹先生著

新體日本歴史

全貳冊洋裝 正價一冊拾貳錢 郵税壹冊四錢
面白く書かんすれば大冊に過ぎ、小冊に纏めんとすれば簡易に偏して要領をも盡さざるは、歴史編纂の通弊なり、此弊を脱して簡易しきを得たるを本書とす。本書の體裁は最新にして趣向は面白し、加ふるに和漢折衷體の文字を以て流麗に書き下したる、歴史を學ぶと同時に文章を學ぶの用に供すべし。

南梁 小宮山綏介先生編輯

徳川太平記

全貳冊大判洋裝 正價金壹圓五拾錢
精博の學、透卓の識、特に徳川時代の史を修むるに於て、優に三長を擅得せらるゝものは、故南梁小宮山先生なり。本書は先生が群書を涉獵し、最詳確なる事實を摺據して、編纂せられたるものにして、殊に卷首に先生の小傳を附して、出版せり。本書の精其無比なるは更に論なし。其先生を詳にして、斯書を讀まば、自ら一層の光彩を發揮することあらん也。

小中村義象、落合直文、萩野由之三先生校訂

太平記

全三冊洋裝 正價金拾五錢
花圓院の文保二年より後光嚴院の貞治六年まで、凡そ五十年間の事を書ける者、其文章の雅馴妙味なるは、國文の撰述ともなしつべし。
小中村義象、落合直文、萩野由之三先生校訂

平家物語

全壹冊洋裝 正價金貳拾五錢
紙數四百廿餘頁 郵税壹冊拾五錢
平家繁昌の事より、其没落に至るまでの事を、優美麗麗なる筆を以て、面白く書きなしたる者なり。この書は始め盲人に誦はせ、琵琶に合せて聞きしものなれば、文章の雅馴妙味はかへりて太平記にすぐれたり。

保元平治物語

郵正全 價壹冊 金拾五錢
稅 冊 三 洋 錢錢裝

榮花物語

郵正全 價壹冊 金拾五錢
稅 冊 三 洋 錢錢裝

増田千信先生著

日本歴史

郵正價 金拾五拾錢

谷口政徳先生著

訂正日本小歴史

郵正價 金拾五錢

永江正直先生著

繪入日本歴史

郵正價 金拾錢

内山正如先生著

問答日本歴史一千題

郵正價 金拾貳錢

坪谷善四郎先生著

明治歴史

郵正價 金拾八錢

内藤恥叟先生著

徳川十五代史

郵正價 金拾貳錢

川崎紫山先生著

戊辰戦史

郵正價 金拾四錢

川崎紫山先生著

西南戦史

郵正價 金拾四錢

21785

三島中洲先生校閱 山名善讓先生訓點

資治通鑑

全部二百九十四卷 紙數五千五百餘枚
合十帙七拾冊 和裝木版刷美本

正價全部金九圓 通運料全額一圓五拾錢

温公の資治通鑑、周の威烈王に始まり、六朝、唐を経て五代に至り、後周の顯宗に終る。宋を經る一千三百餘年、冊を重ねる二百九十四卷、治亂興亡隆替盛衰の跡、炳然として火を見るが如し。左國史漢の後、實に獲難き良史なり、校正綿密、印刷鮮明、從來行はるゝもの、比に非ず、幸に剽覽を賜へ。

大槻東陽先生校訂

春秋左氏傳校本

全部十五冊和裝日本紙木版印刷美本

正價 大本 金壹圓五拾錢 通運料參拾錢
中本 金壹圓卅五錢

安藤定格先生纂釋

校史記讀本

全部二十冊木版唐裝美本 印刷鮮明
正價金貳圓貳拾錢 通運料廿錢

司馬遷は東洋屈指の文豪なり。其一生の心力を盡くして一書史記の中にあり、史記は馬遷の極刑に關れ、發憤志を立て、筆を執れるもの、支那開國以降漢代に及ぶまで、内外の事歴盡さるるなし、凡そ史傳の評を得しもの、東洋に在つては未だ史記に優るものなく、特に其文の妙なる、千秋の史筆一として之に及ぶはあらず、雄大渾厚、放縱自在、森嚴精選、斯文の妙を極盡す、故に史記は實一個の歴史なるのみならず、實に至妙の名文章なり、文を學ぶもの、心を治めて之を讀まば、遺蹟する所殊に深からん。

近藤瓶城先生評註

萬國十八史略評註

全七冊木版和裝 正價金拾八圓 郵稅貳拾錢

石川鴻齋先生點訂

點五代史

全八冊木版和裝 正價壹圓廿錢 郵稅十八錢

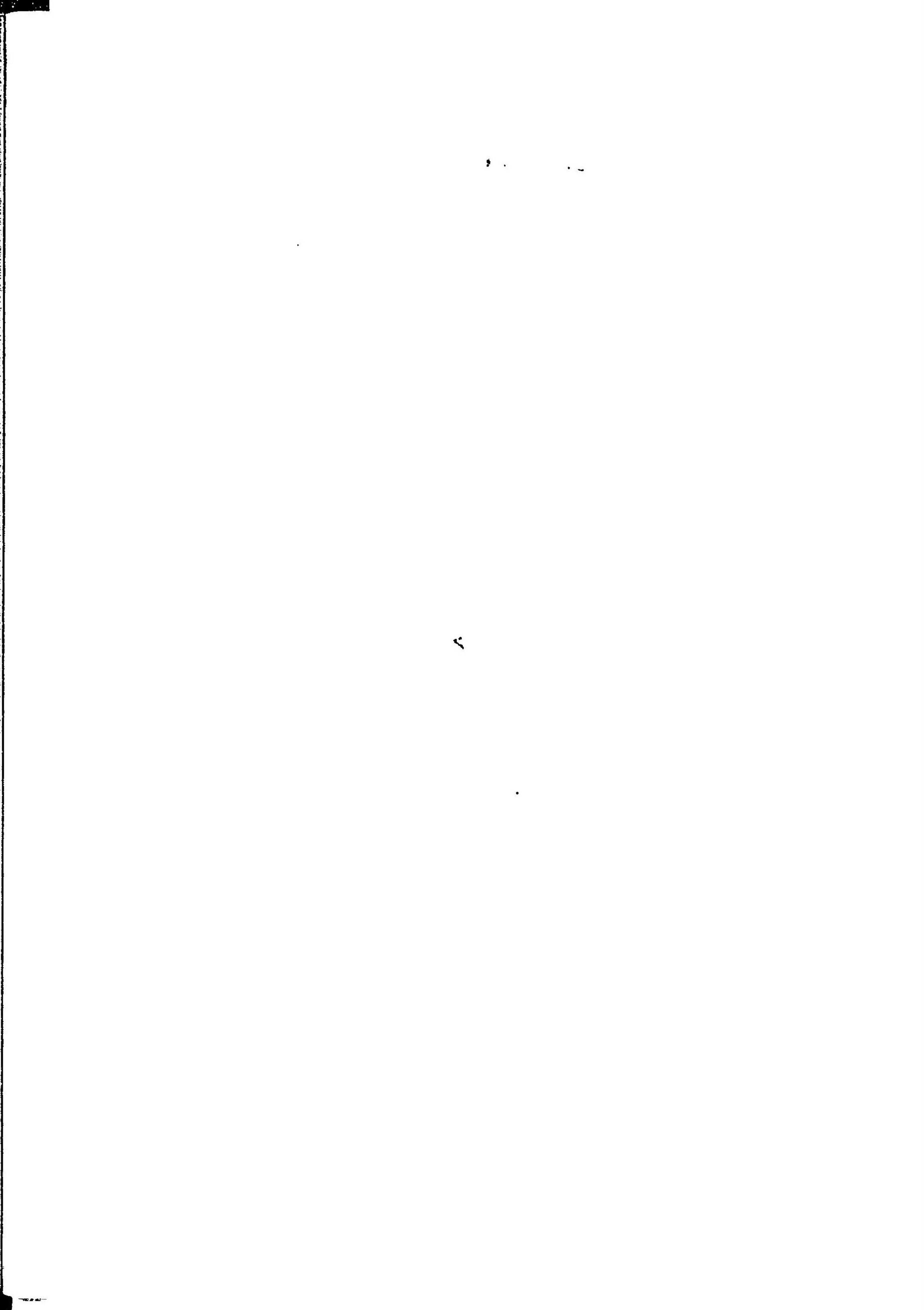
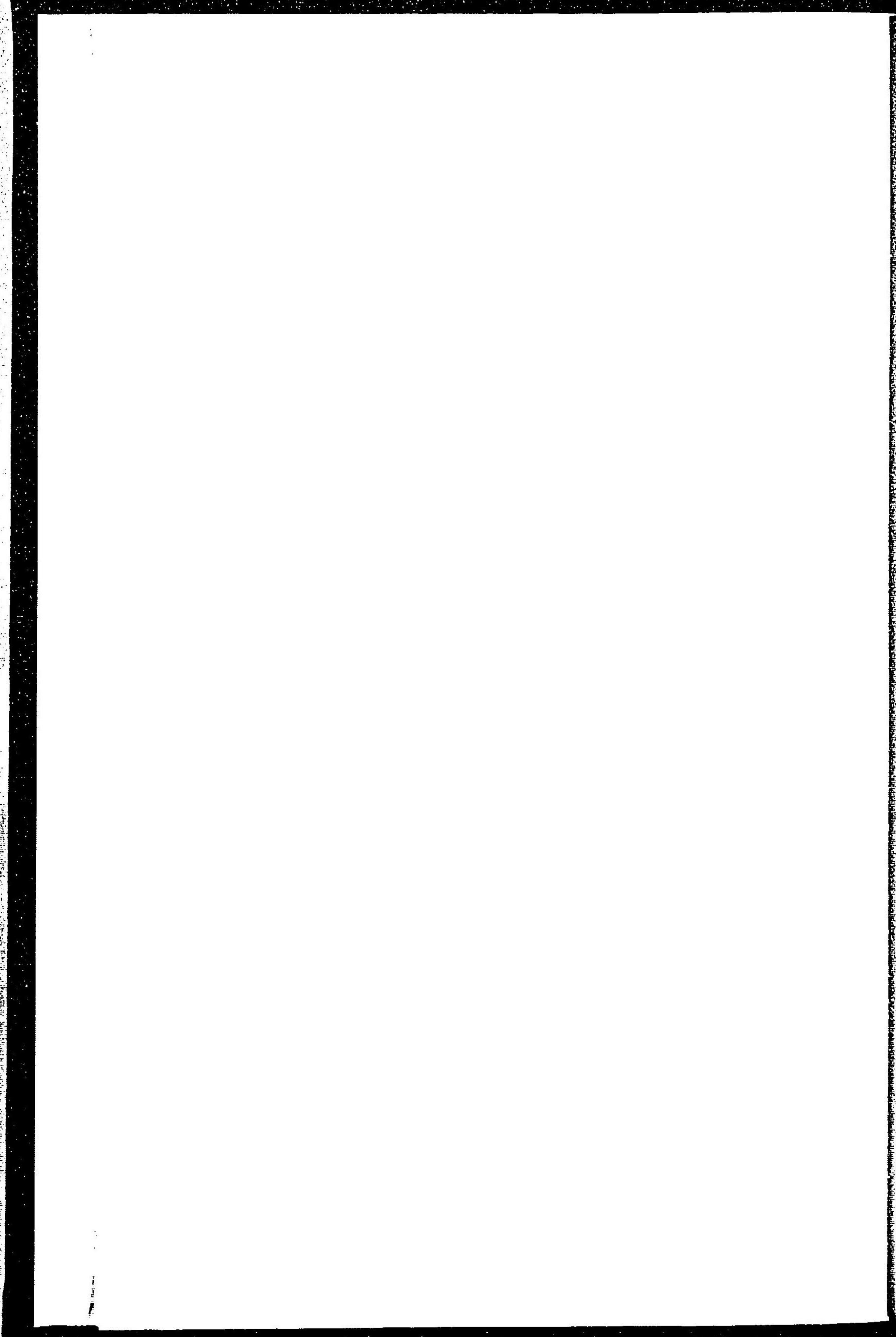
矢土錦山先生訓點

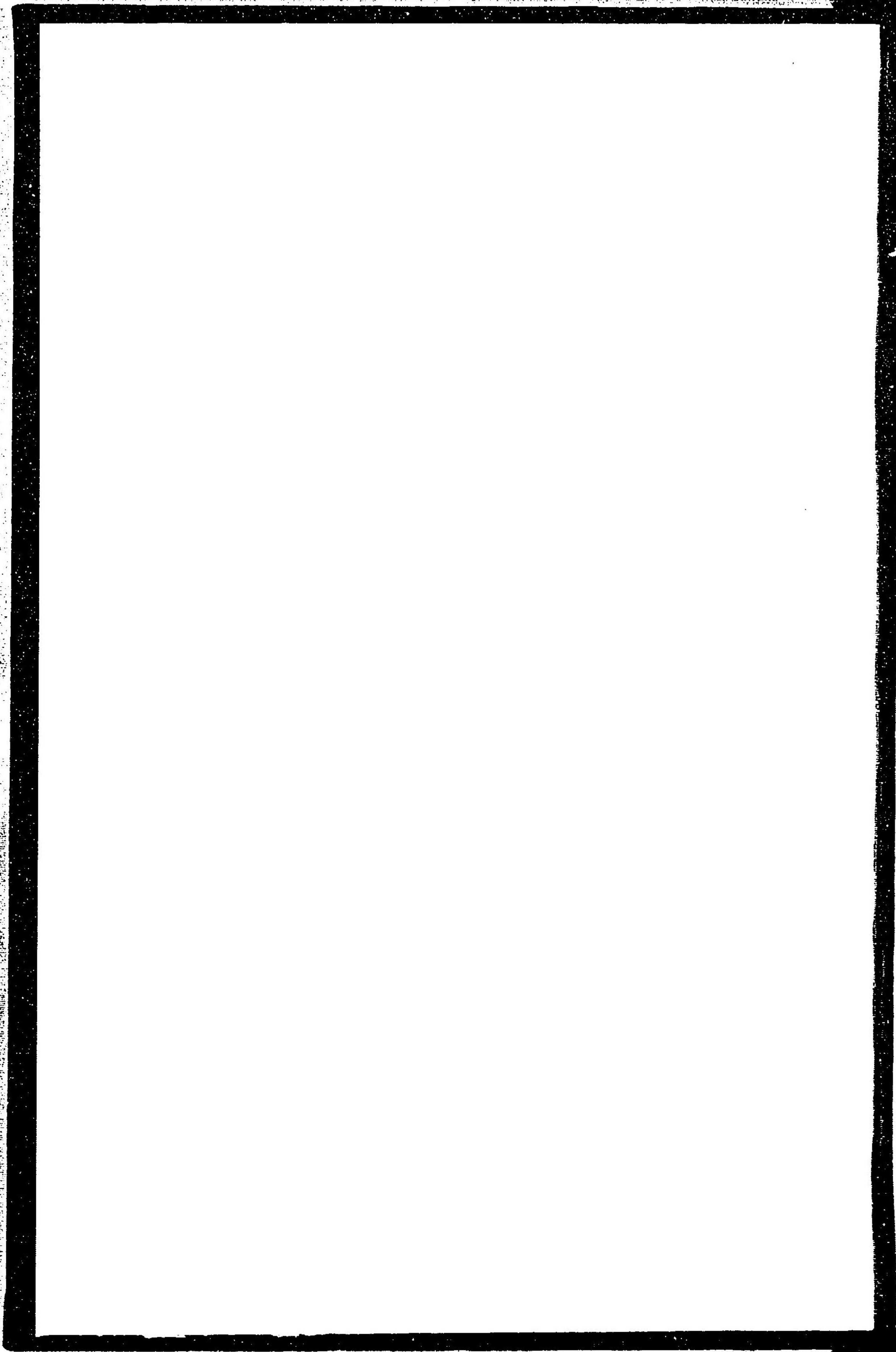
廿二史言行略

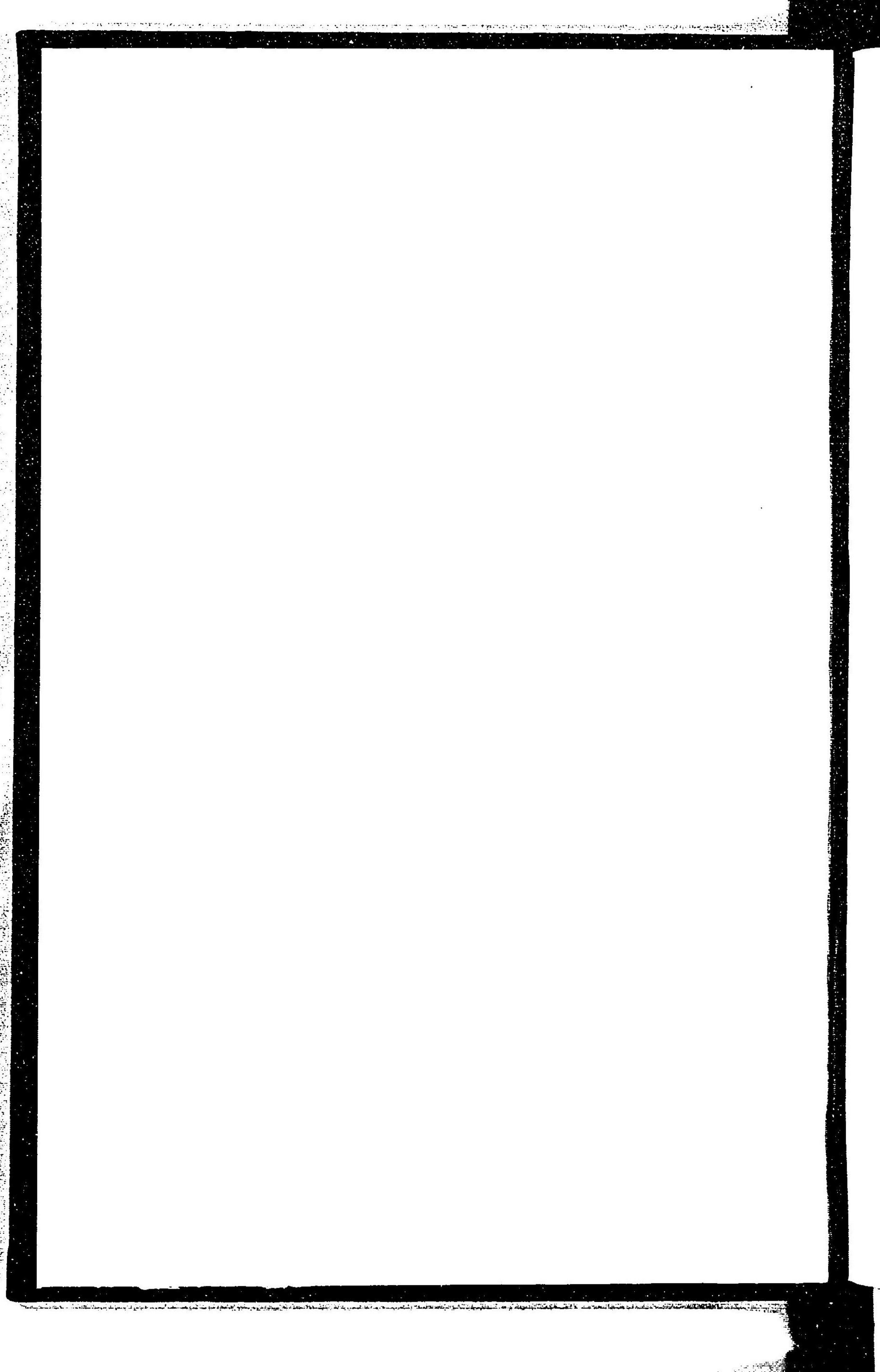
全六冊木版和裝 正價金壹圓四錢 郵稅十錢

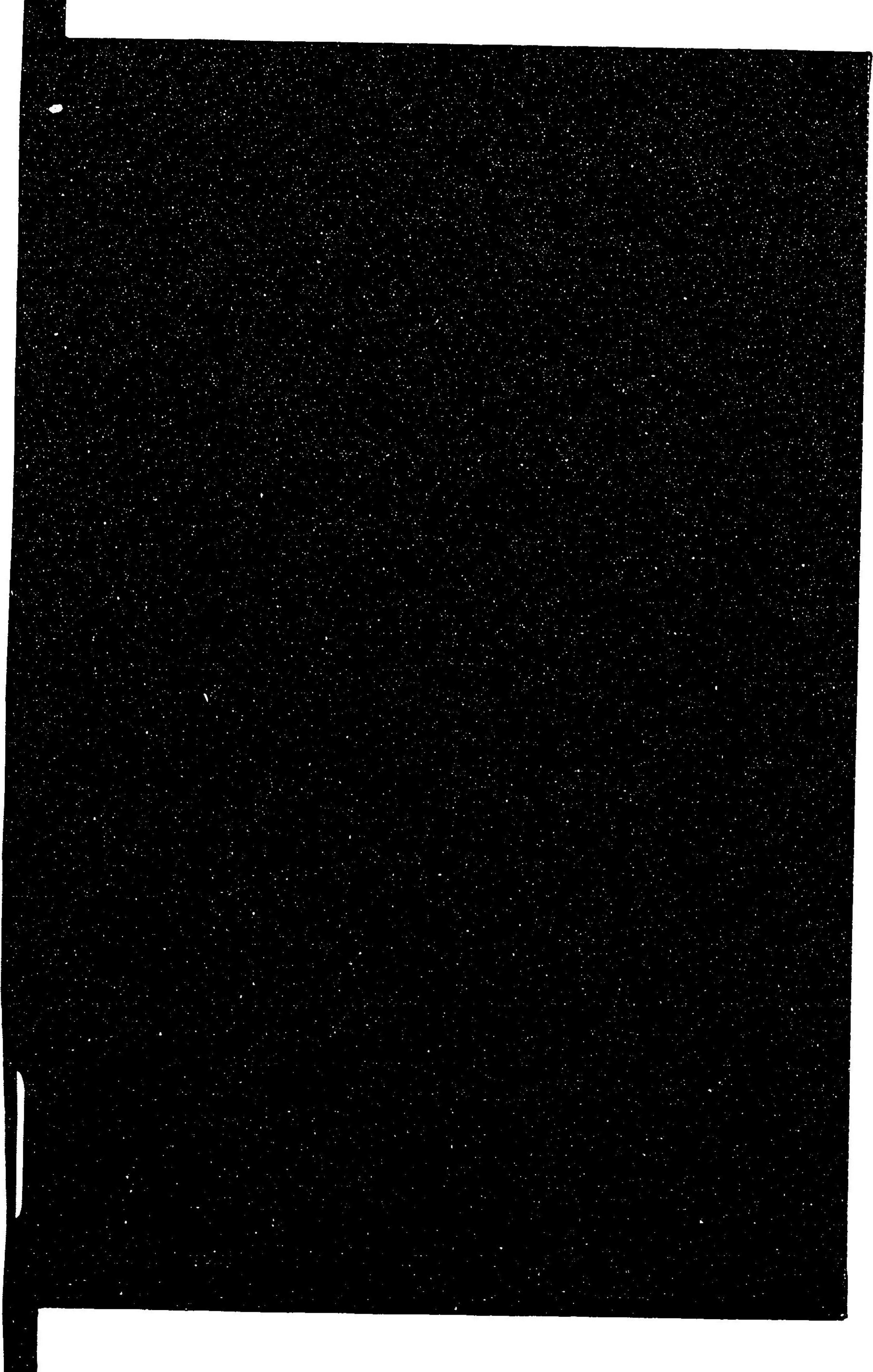












78

3

000111-000-6

78-3

世界文明史

高山 樗牛(林次郎) / 著

M31

ACA-0158

